

私本太平記

風花帖

吉川英治

青空文庫

のわけ
野分のあと

敗者の当然ながら、直義ただよしの三河落ちはみじめであつた。

淵辺伊賀守の斬り死になどもかえりみてはいられず——敵に追われどおしで、とくに手越河原では残りすくない将土をさらにたくさん失い、今川、名兒耶なごや・細川、斯波しばなど一族子弟の討死も幾人かしなかつた。

ついに、ここでは直義も進退きわまつたとみてか、

「腹搔き切つて、左兵衛さひょうえノ督かみ（兄尊氏）どのへお詫びせん」といったのを、

「何の、ここはお討死のつぼにあらず。いかなる恥をしのんでも、生きてこそ」

と、今川範^{のりくに}国のいさめに思いとまつて、苦闘に苦闘をつづけ、やつと川を渡りえたとつたえられている。だがこの段はさて、どんなものだろうか。

直義の性格として、めつたに斬り死にだの自害だのとは言いだしはしまい。もし事実なら、おそらくまわりの将士にさいごの決意を奮わすための指揮者の血相を見せたまでのものではなかつか。

なぜなれば、彼には、彼の身ひとつ以上な重任が考え方られていたはずである。——鎌倉から救出して連れていた成^{しげなが}良親王・み

だい所の登子・またとくに若御料（尊氏の一子・千寿王）らの足弱をおいて——そうした短気はおこしえないところであつた。

また、べつに淵辺をやつて、このどさくさ紛れに、大塔ノ宮を暗殺せしめたなどの、直義がとつた処置をみても、慘敗の中でこそあれ、彼はなかなか狼狽などはしていない。次の段階——将来というものにたいして、兄の尊氏以上にも、

「ここは」

と、はや今日の鎌倉放拠を、大望第二期への峠として、独断、思いきつた手段に出ていたこととわかる。

そして要するに、彼の胸にあつたのは、長いあいだのもどかしさを、宮弑しいぎやく逆の一事にかなぐり捨て、つねに政治的に、また

つねにじれつたい、兄の態度をして、いやおうなしに明確な反朝廷へとここで引きずりこんでしまおうとする彼一流の強引な腹だつたにちがいない。

とまれ、手越河原の難はからくも脱だつしえたが、矢矧やはぎまでまだ四十里ほどはあつた。——が幸いにも、ところの地頭、入江ノ左衛門はるとも春倫はるともの一隊が味方にはせ加わり、どうやら月の末、三河国の矢矧やはぎについた。

ここは郷党の地だ。即、足利方の勢力範囲といつていい。直義は、みだい所の登子の身をひとまず一色村へあづけ、また成良親王は、そのまま兵をそえて都へお送りし奉つた。そしてひたすら兄尊氏の下向を待ちつつ、また一面、奪回された鎌倉を、さらに

再度奪回するの策やら準備におこたりなかつた。

一方、都の空では。

つとに敗軍の報がひつきりなしに朝廷へも六波羅へもはいつて
いた。

まだ、直義の鎌倉放拠とまでは聞えないうちからである。尊氏
は、

「あぶないもの」

と、はやくも形勢を察し、みずから赴つて、直義を扶けたい旨
を、再三、朝廷へ奏請していた。しかるに朝廷では、これにたい
して、断じておゆるしを降さなかつた。

もつとも、尊氏が朝廷へ願い出ていたのは、ただたんに、

「こと火急。鎌倉は無勢。みずから馳^はせくだつて弟直義をたすけねば」

というだけのものではなかつた。

同時に、このさい、

征夷大將軍総追捕使

の印綬^{いんじゆ}を自分にたまわりたいと、あわせて、請^こうていたので

ある。だが、

「もつてのほかな！」

とする廷臣の強硬な反論のあろうことぐらい、彼が想見していなはずもない。知りつつ持ちだした奏請なのだ。尊氏も引くいろではなかつた。

つまるところ、窮極は天皇の御採否一つにかかる。おそらく慮をなやまされたことであろう。

征夷大將軍

は武家最上の任である。それを尊氏にゆるすのは、かつての鎌倉將軍家の格式を彼に与え、幕府再建をみとめることにほかならない。

一日一日、日はすぎた。

朝廷はゆるさず、六波羅はうごかず、ただ東の、敗報ばかりが、矢つき早であつた。

するうちに、鎌倉の放拠、直義の敗走、つづいて大塔ノ宮がその幽所で何者かに殺されたなどの取沙汰も聞えて、都じゅうは容

易ならぬ 風騒ふうそう の中におかれだした。

そうした八月一日。

朝廷は発表した。

鎌倉をのがれ出た成良親王をして“征夷大將軍トスル”とい
う補任の令である。——これで尊氏もあきらめよう。そしてまた、
尊氏の野望をも、これをもつて塞ふさごうという窮余の封じ手だつた
のはいうまでもない。

「殿は」

高ノこう 師直もうなお はいま、どこからか、馬で六波羅へ飛んで帰つて來
たばかりである。

例の廂ひさしノ間まで、一ト汗拭いて、やがてのこと、薔薇園しょうびえんの書院

のうちに、ぬかずいていた。

「いや、その儀は、いましがた、ほかの筋から耳に入つておるよ。かさねて、そちから聞くにもおよばん」

尊氏は言つた。いつもの尊氏とかわりもない。

いささか拍子抜けのかたちである。師直は、また出る顔の汗を懐紙でそつと叩きながら、それとは離れて、とつさに言つた。

「いよいよ、お腹の決めどきでござりまするな。朝廷がわのご態度はさだまりましたで」

「いまさら何を」

尊氏はうすら笑つて。

「そちには、用が多いぞ。いつでも廂ノ間へひかえておるように

いたせ。かかる折、執事のそちがどこへ行つておつた

「てまえならではなるまいかと存じ、佐女牛まで一ト鞭さめうしあてて行むちいてまいりました」

「道譽の許か」

「さようで」

「よく気がついた。気がかりはある男のうごきにある。いたか」

「おりませぬ」

「参内か」

「でもございませぬ。はや佐女牛は無人同様で、昨夜、国元の伊吹へひきあげたと、留守の者が言いおりました」

「奴。さすがだな」

「そして、この一書を、足利殿へと、あとの家臣に託して行つた
よしにござりまする」

文面を一読、尊氏は苦笑をみせ、それなりで黙つていた。

「殿」

と、師直は膝をすすめ、

「道誉が何を書き残しておりますので」

「見るがよい。——このさい二心なし、と道誉がわざわざこれに
証判しておる。そして、わしの東国しゆ_出つぜい勢ぜいを、途中の伊吹にて
お待ちせんとも書いておるのだ」

「はアて？」

師直はうめいた。誇張したあきれ顔をその下に作つて。

「まだ、ご当家の出勢は布令てもいづ、朝廷もまた例の、殿がお願いの件を、おきき入れはなく。……いやその奏請そうせいは蹴られて、征夷大將軍の任命は、成良親王へご決定と、公布がみられたばかりなのに」

「道譽は早耳だ。すでにその内定を、きのうのうち、知つたのだろう」

「それにしても、殿のご意中もようたださず、伊吹へ帰つて、ご軍勢の通過を待つなどという先廻りは」

「よくいえば、機を見るに敏びんなやつ。悪くいえば抜け目ない横着者だ。が、よかれあしかれ、彼が二心なしといつてきたのは、大きな幸せ。……さもなければ、尊氏はここで這奴しゃつにのど首をしめ

られねばならなかつた。たとえどう膝を屈しても、道誉の機嫌をくつとつて味方に迎えねば、うごきのつかぬところであつたよ

「ではやはり？」

「師直。きょう中にあらゆる準備をぬかりなくすましておけ」

「（）発足は」

「明朝、あかつき」

「そして、朝廷へは」

「そのままでよい。お届けにはおよばん。再三、お願ひ出ではしてあるのだ。……のんべんくらりと、御ぎよめい命の降下を待つていたら、東国の様相はそのあいだに一変してしまうだろう。さもあらば、とり返しはつかぬ」

事実、尊氏はいま刻々にそれが案じられていた。

天下の武士あらましは、公家政治に失望して王政ならぬべつな“何か”の形態を統一のうえに欲している。——北条残党ののろしが、東国の野でたちまち巨大な火勢となつたのも、現状に不平な枯れ草が土壤いたる所にあるからだ。

これは、尊氏として、坐視できない。武士の不平は、彼にすれば、彼のいだく大望の理想楼閣をきずく良材なのだ。味方なのだ。その素地（したじ）を、北条再建軍にうばわれては、彼の立脚する所はなくなる。

かつは、朝廷としても、ここまできた北条討滅の意義は霧消してしまう。——だからたとえ朝命をまたず無断東征（おもむ）に赴いても、

それは天下の御為ともいえるのではなかろうか。

尊氏は、しいて自分の行為に、そう理由づける。

直義ただよしとちがい、彼には暴を暴と知つてはできない思慮があつた。朝廷度外などの不逞はあえてなしえないので。あくまで彼のなかには朝廷への崇敬があり、上への越権は気にかかるらしい。

にもかかわらず、彼は師直へ、無断離京の準備を命じた。

ひとつには、望んでいた征夷大将軍の補任が外れた業ははず腹ごうはらもあつたが、なによりは弟直義を見殺しにはできないとする情があつた。分別顔に似ず、情には奔はしるほうなのである。

明けて、八月二日は、空もようまでが、ただならなかつた。

颶たた

いふうき 風期である。どこか遠国で大荒れをしているのだろう。近畿いつたいは強風だった。都の朝も雲脚の迅い明滅をしきりにして、加茂川の戦そよぎがそのまま大内裏の木々をも轟ごうごう々とゆすつていた。

「あれ、御簾みすが」

「蔀しとみが」

と、殿上でも、舍人とねりや蔵人くらうどたちが風にもてあそばれ、てんてこ舞いな姿だつた。雨のないのがまだ見つけもので、木の葉まじり、大屋根の檜皮ひわだまでが空に黒いチリのつむじを描きぬいている。こんなところへの頻々ひんびんな取沙汰だつた。

「朝まだき、暗いうちに、足利の宰相さいしよう（参議）をはじめ、六波羅じゅうの勢せいは、東へ立つた」

「はや六波羅には、武者らしきものはひとりもいぬと申す」

「総勢千七、八百騎とか」

「いやいや、それが大津越えにかかる頃は、尊氏を慕うてあとよ
り追っかけ加わる勢せいもおびただしく、いつか三千余騎にもなつて
いたという」

「いずれにせよ、尊氏は、八座の宰相の身にありながら、君恩も
わすれ、朝命も待たいで、無断とうげ、東下とうげをあえてしたことは確かと
みゆる」

「不忠不逞ふちゆうふとうな臣」

「断乎たる御处分ごしゆんな降くだされねばあいなるまい」

公卿口かしまの姦ましさ。殿上だいじょういづこの間までも廊ろうでも紛ふん々ぶんたる騒ざわめき

である。

公卿ばかりでない。新田、名和、結城などの武臣も、ひつきりなしの参内だつた。——わけて千種忠顕は早々に_{しゅつし}出仕して、上卿の面々とともに中殿_{ちゅうでん}の御座_{ぎよざ}へまかり出ていた。

「皇威にかかわります。勅使を立て、尊氏の意をただすべきでございましょう。もちろん、尊氏は理くつをならべ、朝命に畏みますまい。そのさいは、ぜひもございません」

忠顕は言つた。

——義貞をさし向けて討ち取るべきだという意見である。

すでに直義は東国でやぶれた敗残の将、尊氏は六波羅をすべて途中にある無拠地の旅軍、これを追つて討つのは容易だともいう

のだつた。

「だがの」

ここは待たれよ、とする上卿たちの声もつよい。彼の無断東下とうげが、さまで不逞不忠な罪といえるだろうか。朝命を待たず戦争におよんだ例は、古来、たびたびある。——後三年ごノ役の源義家、前九年ぜんのさいの頼義、みなそうだつた。——いつ降くだるかわからない朝命を待つていたら、戦機、とり返しがつかぬ大事にたちいたるからである。

尊氏のこんどのばあい。

尊氏からいわせれば、そもそも主張できようか。武士の間には、「軍中将軍ノ令ヲ聞クモ、天子ノ詔セウハ聞カズ」ということばすら

信ぜられているものを——と、上卿の老公卿は危ぶみ、また、名分の稀薄を指摘するのだつた。

こんな論議のうち、いつか午すぎてもいたのに、

「在京の武門、あまたな武士ども、足利宰相のあとを慕い、なおぞくぞくと都を離れ出て行きます」

と、刻々その動搖ぶりは宮廷内へも聞えてくる。

すでにその頃、尊氏は瀬田大橋もこえ、彼の東下の軍勢は、野の分の爪あとひどい稻田を途中に見つつ近江路を急いでいた。

「えらい風」

と、尊氏はつぶやいた。

従う三千余騎もみな風の中である。歩兵はヨレヨレに縕れてあ

るいた。

「吉良。追い風だな」

「は。西風で」

「舟にも似て、風を負つて行くゆえ、駒も軽い」

「得手に帆とやら、お門出かどでは上々吉です。が、野分のあとを見て

くると、東へ行くほど、荒れがひどいようですが」

「途中、崖がけなだれや出水のさまたげに会うかもしだん。……しかし従う面々がこの意氣なら何ほどのことでもない」

尊氏が「意氣」と言つたには、ふくみが聞える。

吉良貞義は、ふと他の面々を見まわした。

高ノ師直、桃井直常、一色右馬介、引田妙源らはべつとし——

自分をはじめ、仁木、畠山、斯波^{しば}、石堂、荒川などの一族輩はみな例外なしに、尊氏が弟直義を案じる思いと変わらぬものを胸に持つていた。

なぜならば、その誰もが、兄や弟や、我が子らを、東国の空においていたからで、

生きているやら？

はや死者のかずか

と、口にこそ出さないが、急へ赴く悲壯ないろが、しぜん、たれの眉にもあつたのだ。

行く行く兵は増すばかりで、翌々日、近江番場へかかつたとき、

引田妙源は尊氏へ

「お供の軍勢はもう四千をかぞえます」

と、告げていた。

在京の武門のほぼ三分の一は尊氏を慕つて従いて來たし、土地の無主無名のやからも、腹当一つに柄もほつれた腰刀や、古長巻など引っかかるて、十人二十人の徒党で「——足利の宰相が御東下の端に」と、陣へ投じて來るのであつた。もとより深い頼みにはならぬ鳥合うごうだが、ばかにならない数にはなる。

やがて、不破ノ関は近い。柏原かしわばらノ宿場だ。ここには約束の佐々木道誉が、約をたがえず、自軍を立て並べて待つていた。

尊氏の姿を見ると、道誉は、宿場の一陣屋から立ち出て來た。そしていつもの倨傲きよごうな彼とは別人のように、腰ひくく、

「御着ごちやく。。お待ち申しあげておりました」と、臣礼をとつて、

「軍旅のお疲れもやと、あれにご休息の用意をさせおきまいてござりまする。……いかがでしよう。しばしお憩いあつては」と、誘いかけた。

「いや」

と尊氏は、鞍あんじょう上じょうのまま。

「知つての通りだ。直義の安否も氣づかわれる矢さき、このまま行こう。御辺もすぐつづいてまいられい」

「もとより伊吹の手兵一千、挙げて参陣の心ぐみで、これにひかえておりましたなれど、寸時、彼方の陣屋の内で、このさい会う

てお上げなされてはいかがなものと愚考しますが

「会うてやれと？ 誰に」

「ゞ一子、不知哉丸さまに」

「…………」

「また、藤夜叉どのとも。……いやその藤どのは、名をかえて、
いまでは越前えちぜんノ前まえと申しあげ、以後ずっとお変りなく、伊吹の
城に、今日を待つておられました。ひと目会うておあげなされま
せぬか」

尊氏はふと胸をさいなまれた。

なろうなら目をふさいで過ぎてしまひたかつたものを——その
罪業ざいごうの形見みたいな者たちへ——苦にがい想いを余儀なくされてい

たからだつた。

道譽の言によれば。

藤夜叉は、越前ノ前と名をかえて不知哉丸とともににつがなく伊吹の城にいるという。あれいらい三年になる。不知哉丸もはや十三か。

その母子をわすれているどころか尊氏は自己のおかした罪業のつぐないをいつかは果たさねばならぬものとして日頃にも悩んでいた。けれど実の子や妻とも一つにいられぬほどな時局だつた。

大望の達成までは、家庭や身辺の犠牲はやむをえないとあえて顧慮から忘れようとしていたのである。彼はわざと非情を顔に作つて道譽へ言つた。

「いや、御辺の親切氣はかたじけないが、この日において、申さ
ば、つまらぬもてなしというものよ。さし措おいてもらいたい」

「では、ご対面は」

「いたすまい」

「ふたりは、がっかりするでしょう。ここを御通過ときいて、ひ
そかにお会いがかなうかと、愉しんでいたふうですから」

「いまはそんな時ではない。いかに先をいそぐ身かは、御辺がよ
くわかっているはず」と、言い捨てた。そして「——妙源いるか。

引田妙源」

と、ほかを見て呼び、軍の編成について早口にいいつけた。

「ここから加わる佐々木の伊吹兵一千は、二の備えに組み入れろ。

——道誉。すぐ行くぞ。二の陣について來い」

軍命として言つた彼のことばは、個人を超えたひびきで、もうそれに、私事をさしはさむ余地などなかつた。従来の佐々木道誉も、麾下きかの一部将としてしか扱つていず、またそれ以上には眼の中においてもいない尊氏なのだつた。

「はつ」

と、道誉は唯々いいいとして去つて、中軍から次の隊伍に加わつた。その編入にやや手間どつたが行軍はすぐつづけられ、前隊はもう不破ノ関を通過していた。

その間。かんおそらくは不知哉丸と越前ノ前は、柏原の陣屋のほとりか、寺院の門の蔭にでもいて、よそながら尊氏の通過を見てい

たかもしれなかつた。しかし尊氏の眸にははいらなかつた。またその眸は、それをさがしていたような風でもない。

美濃路——

尾張平野

道をひがしするほど、過ぐる日の颶風が、東国寄りの地方であつたことがわかる。

行軍は、出水のあとや、まだ水力サのひかない川の渡河にならんだ。が、ようやくのこと、京都発足いらい七日目の八月八日、三河国に着いた。

「お見えか」

待ちかねていた直義ただよしは、矢矧やはぎの陣所から八橋やつはしまで出て、兄

尊氏の全軍を迎えた。

相互、無量な感であつたろう。「梅松論」がいう——当夜、矢
矧二御着アツテ、京都鎌倉ノ両大將御対面、久々ナル御物語リ、
尽クトモ見エズ——とある一条の短夜は、こうして、あわただ
しいまにすぐ白む。

そして翌九日。尊氏、直義の兄弟軍は、もうそこを発して、た
だちに鎌倉へさして いた。

鎌倉を奪りかえした北条遺臣の寄合軍は、統一上、

御先代の軍

と、みずからを称えていた。
とな

その先代軍は、

「必定、敗北した直義の次に来るものは尊氏！」

と見、うらみかさなる尊氏、目にものみせんと、遠江からひがしの要所要所に陣地を構築して、備えには、おさおさ怠りなかつたのである。

だが、先代軍の大将、名越式部大輔だゆうがまず、橋本（浜名湖附近）の序戦にやぶれた。つづいてまた敗れ、その総なだれを初めとして、

佐夜の中山合戦

駿河の高橋繩手（興津附近）

箱根越の山いくさ

相模川渡河戦

片瀬、七里ヶ浜

鎌倉口

と、敗走に敗走をかきねた。足利方は、要害七カ所七度のたたかいも、ついぞ負け色をみせず、行くところで勝ち、十九日、尊氏の馬は、もう鎌倉の内へ突き入つていたのである。

連戦わずか十日だつた。この迅さ強さにみても、このときの足利勢が、いかに氣鋭新鮮な、いわゆる風雲児の下に引率された軍であつたかが察しられる。

道譽でさえも。

といつてしまふと、彼は弱い凡将のようだが、彼の天分は別な

面にあつて実戦場ではむしろ 狡将こうしょう と呼ぶべき方の者だろう。その道誉でさえも、このときばかりは必死な目にあつて働いた。いや働かされたといつてよい。

それは、相模川の合戦の日であつた。

敵は、遠江から退いた名越式部の死にもの狂いな兵を中心に、伊豆の伊東祐持すけもち や、三浦、諏訪すわなどの新手を加え、頑強にふせぎ戦つて一步もひかない。

このとき、尊氏が、

「ここはよい。ここはよいから上野（太郎頼勝）の隊と、仁木（三郎太義照）の隊は、川の上かみを乗り渡せ。また、佐々木（道誉しも）の隊は下流を渡つて、無二無三、対岸の敵の腹背に出ろ」

と、軍令した。

これはきつい令である。決死隊にほかならない。

道譽は心で、ほかに足利譜代ふだいの将も多いものをと、

「ちツ」

と、思つたがぜひもなかつた。馬うま 箍いかだ を組んで、敢然かんぜんたる

渡河戦の先陣を切つた。もとより河中では矢ぶすまを浴び、対岸へ斬りこんでからも、たくさん犠牲を出したのはいうまでもない。

従軍はしても、彼は自分が子飼いの伊吹兵は、これを極力大事にして、武功と取り換える消耗はつねに巧く逃げている。

「……尊氏め、それを知つて、おれを今日の難場に使つたな」と

は思つたが、しかし彼の上には勝かちどき鬨くわが沸いていた。悪感情もたちまちそれに吹き消されていた。

こうして彼は、今川頼国と並んで、海道下りくだりの二大将となり、鎌倉口まで先陣をつづけたが、しかしその道譽には、上野と仁木の二部隊が付いていた。軍監として、彼を督戦していたのである。とまれ、鎌倉はまた、足利方の下に回かえつた。

先代軍の脆もろさは案外というしかない。北条時行以下、各地へ四散し、ふたたび元の残党境界の陽かげにひそんだ。この先代軍が鎌倉を占領していたのはわずか二十日間に過ぎなかつたので、世上これを「三十日先代ノ乱」といった。

あずまげしき
東景色

これで、鎌倉の地は、高時いらい、わずかな年月に、四たび^{あるじ}主をかえたことになる。

義^{よしさだ}
直^{ただよし}貞

先代軍の北条時行

そして、今からはまた、尊氏が事実上の「鎌倉殿」たる座にすわつた。

さきに直義がいた二階堂御所は手ぜまなので、さつそく、若宮小路に新邸が造営された。といつても全体の落成ではない。とり

あえず一部を ふしん普請し、あとは昼夜兼行の鑿のみや手斧ちょうなの音だつた。人々はそこを、いつか、

大御所

と呼んだり、將軍御所といつたりした。そして直義の二階堂の
えい
宮はたんに しも下御所しもごしょといいならわした。「鎌倉大日記」に――
 尊氏ノ鎌倉ニ入ルヤ、自ラ征夷大將軍ト称ス――などとあるのは
 事実でないし、世間から観た彼でもない。
 世上ではこんどのいきさつを知つてゐる。

なるほど尊氏は將軍宣下せんげを求めていたが、朝廷はそれを拒否し
 て、他の宮へ征夷大將軍を与えてしまつた。のみならず、朝議は
 その後、おかしな叙任じよにんを尊氏へ贈つていた。

尊氏が、無断、都を発したあと朝議紛々の結果ではあろうが、追っかけに、彼が矢矧やはぎについた日の頃、

征東將軍ニ補スホ

との沙汰をとどけていたのである。征夷大將軍でないべつな官称だ。これなら尊氏が幕府を再建するものとはならない。しかも似ている。という姑息な慰撫であつたのだ。尊氏は笑つておうけしたが、直義はあとで、なぜ御返上しなかつたかと、ひどく腹を立てたことだつた。

だから、似て非なる征東將軍でも、將軍御所にはちがいない。

また大御所と呼ぶのも不当ではなかつた。けれど尊氏はそんな実のない敬称によろこんでもいす、また無頓着なほうでもあつた。

そしてこのさいは、諸将の功にむくいる行賞などの方にむしろ興味があつたらしい。彼は、尻尾を振つてよろこぶ者を見るのが第一の好きらしく、余りに気前がよすぎるほどだつた。それが過ぎて、すでに朝廷で没収していた旧北条遺領や、新田義貞が受領した土地までを、麾下きかわの將につい頒けてやつてしまつたほどである。直義をよく叱るが、やり過ぎは、彼にある。

それと彼は、降伏者には寛大だった。——直義はきびしい。峻烈に斬る者は斬る。——だが尊氏の耳にはいると、いつも彼がなだめる方にもわつっていた。たいがいな旧怨も忘れ顔で助けてしまう。先代軍の余類からも少なからぬ降人があつたなどは、しづんそんな風評が武士間にあつたからにちがいなかつた。

こうしたうちに。十月。

都からは、ゆゆしい勅使の下向と聞えてきた。やがて、詔を奉じてきた御使は、中院ノ源中将具光ともみつで、こういう朝命の降しであつた。

「東国の逆乱もすみやかな静謐せいひつを見、相共によろこばしい。さつそく將士の軍功の施与は、綸旨りんじの下に、朝廷で宛て行うであろう。されば尊氏には、一日も早く帰洛し、六波羅にもどつて、逐あおこな一の報告を親しく上間に達しおわられよ」

時局も時局である。しかも、勅の旨は、尊氏みずから、すみやかに、上洛あるべしという嚴命だ。

勅使中院ノ具光ともみつは、おこそかに尊氏へ伝達してから、個人的なくつろぎに返つて、

「いやなに宰さいしょう相。即答はごむりである。何かと周囲むずかしい御多端も拝察に難くない」

と、言い足した。そしてまたいうには、一族間の御協議などもおありであろうゆえ、両三日のことなら逗留してお待ち申すもよい。とにかく、明確なご返辞をえて帰洛したい、と釘を打つのだつた。

「こころえてござりまする」

尊氏は、旨を拝した。

それなり沈黙におちている。——熟慮のうえでともいわず、即

答したことでもない。

中院ノ具光がじつと観るところ、なにさま、尊氏の心中は困惑そのもののようにうかがわれる。くるしげな彼の立場と腹の中が鏡にかけてみるようわかる気がするのであつた。

ややあつて、尊氏は、こころもち胸をただした。

さしうつ向いていたうちに、その苦渋を顔から除^とつていたのか、はしなく具光の眼と見あつた眸は、細^ほツそりと笑^えみを描き、頬の薄らあばたまでがこの人特有な茫^{ぼう}とした愛嬌をたたえて、何の屈^く託^{つく}顔でもなかつた。

「いや両三日が間は、旅のおつかれを休め、まためつたには東国への御下向もありますまいから、鎌倉あたりの御見物もなされま

せい。……それにせよ、尊氏が返答如何にと、重き御使みつかいを胸につかえておられたのでは、心から東景色あづまげしきもお楽しみのお眼には入るまい。その儀はどうぞ御安堵ごあんどあつて

「では」

と、具光は意外そうに。

「お召には、否やなく、ご承諾と仰せられるか」

「勅。なんで否やがありましよう。さきごろ、みゆるしも待たず、急遽、六波羅を出てまいりましたのも、もしその果斷を取らなかつたら、今日の勝利もなく、尊氏は弟直義を失い、都は北条遺臣軍の包囲を見、天下の再乱、君のおん大事は必至と、憂えられた以外、何の私心でもございません」

「ゞもつともじや。さればその儀については、君もさらさら、お咎めではおわしまさぬ。さればかりか、其許の功を嘉^{そこよみ}せられ、征東將軍の称を贈つて、宰相の心をなだめようとさえしておいであそばす」

「もつたいたいないことでした。不肖尊氏にたいする君の御優遇には、いつも心のそこからありがたいとおもつております。乱麻^{らんま}の時代、権謀の多い君臣の内外。時には、叡慮にもそむき、また時には、お気にくわぬ自恣^{じし}もあえて振舞う尊氏にはゞざりますが、正直申せば、僭上ながら自分は当今のみかどを、比類なき英君なりとあがめておる。そして主上もこの尊氏をかくべつお目かけて下されいるものと、鴻恩^{こうおん}、忘れたことはありませんぬ」

「ううむ、おことばのまま、ようおつたえ申しあげよう。いかばかりおよろこびか」

「されば、御使みつかいなくとも、夙つとにわれから上洛すべきでしたが、戦後なお鎌倉は乱離らんりの状です。なにとぞ、ここ数日のご猶予をばお願い申しあげます」

勅使の中院ノ具光ともみつは、

「これで安心いたした」

と、ひとまず宛てがわれた饗應屋敷へ引きとつた。そして尊氏

からは、

いつ上洛するか

の日取りを、数日中に答えることになつたのだつた。そのあい

だの饗應役は、高ノ師直。これは適任であつたろう。

がしかし。勅使下向のその日から、どことはなく全足利党は殺氣立つていた。朝廷から何をいつて来たのか。その難題とは何か。そこの饗應屋敷をめぐつて険惡な臆測をさまざまにし、あたかも敵国の軍使でも迎えたかのような反抗氣分さえあるのだつた。

「万一一でもあつては」

と、尊氏は上杉憲房(のりふさ)をして、勅使の宿所から一町四方を警固させた。それほどの動搖の中にであつた。

「あとはたのむぞ」

と、尊氏は今、大御所の広間に居ながれた一同へ向つて、「ぜひなく自分は、勅を畏んで早々(かしこ そうそう)に上洛いたす。君もお待ち

かねとの勅使のおことば。何はおいても、罷らねば相なるまい」と、言っていた。どうしようと諂はかる評議ではない。決意を告げ渡していたのである。

「……」

弟の直義。

以下、細川和氏、仁木、今川、一色、畠山、斯波などの重臣から、そして佐々木道誉までが、たれひとり尊氏の言をそのまま胸にうけ容れたらしい顔つきでない。沼のような沈黙がつづくだけだつた。こうなると直義以外には一族の気もちを率直に口に出せる者はなかつた。

「宰さい相しょう」

と、彼も兄弟としての馴れなどはどこにも示さず、重々しく、
その頭かしらを下げる。

「仰せではありますが、このさいの御上洛などは、もつてのほか
と存じられます。何とでも辞を構えて、ここはお断り申し上げて
おかれますように。……一同もひとしく同じ憂いに相違ございま
せぬ。いや、問わずもがな。揃つて、お見合せのほどを、こうお
願いつかまつております」

すると尊氏は、

「いや」

と、刎ね返すように、きっぱり言つた。

「そうちまいらん。ほかならぬ勅のお召めし、またも違勅をかさねて

は畏れ多いおそ

「ですが」

「ならんのだ、そこが」

「そこがと仰せられますが、しかし、時にもよれ、勅にもよること」

「直義」

「は」

「一同へも、かきねていう。すでに拝諾の旨は、勅使へお答え申しあげてしまつたのだ。——時も時なる危うさは、尊氏とて、知らぬはずがあるものか。上洛なせば、堂上こそつて尊氏を指弾し、身の申し開き如何いかんを問わず、万々の御譴責ごけんせきはあるだろう。……」

が、わしは天皇の御寵恩ごちようおんにそむき奉ることはできぬ。このまごころをもつて咫尺しせきにお訴え申しあげてみるつもりなのだ。おそらくは君もおわかりくださることと思う。……な、直義。また一同もそれの結果をおとなしく待て。かまえて妄動しては相ならんぞ」「では、どうありますても」

「む。上洛は変更し難い」

「いや私どもは、何としても、お止めせいではいられません。断じてお止めいたしまする！」

「い、う、な、直義」

尊氏は叱つた。

だが。直義が黙ると、仁木、今川、細川、みな口を揃えて、

「何とかお考え直しを」

と、上洛の危険を説き、尊氏の決意を諫めてやまなかつた。
佐々木道誉も、おなじ見解で、

「このさい、もしご上洛あらば、必ず義貞の要撃をうけて、天皇
への御拝顔をとげる以前に、千種忠顕ただあき^{わな}らの罠におちいるものと、
お覺悟あらねばなりますまい。なぜなれば」

と、ここで彼は知るかぎりな公卿間の内情をかたつた。在京中
には、千種や新田とも、つきあいよくつきあつていた道誉である。
そのことばには、耳をかしていいものがある。

すでに、尊氏要撃の企くわだては、大塔ノ宮いらいの根深い計であり、
今とて変更されているはずはない。むしろ、宮の遺臣やその勢力

は、義貞の下に編入され、打倒尊氏の計画は、義貞を中心に一ぱい強大になつてゐるだろう、と道誉はいう。

そのほか、幾多の悪条件をかぞえて、極力、道誉も諫止した。^{かんし}

けれど、尊氏はいぜん、うなずく風もなかつた。——ただ一ト言、考えてみる、といつただけである。そしてかえつて、留守中のさしづなどして一同を退がらせた。

「なにどぞ、ご賢慮を」

ぜひなく、一同は退出まぎわの一言に一縷いぢるをつないで退きさがつたが、しかしこれで安らげるはずもない。その夜、またあくる日と、この面々は直義の下御所しもごしょに寄合つて、どうしたら朝廷の難題をのがれうるか、また、尊氏を思い止まらすことができるか、

直義を中心に、鳩首、談合の様子だつた。

その果てとみえる。

直義はただひとりで、一夜、下御所から兄の大御所をおそくに訪ねた。

「はやおやすみの時刻、あすにゆづろうかと思いましたが」

「いやまだ寝るにはちと早いから頬春（細川）を相手に碁ごでも打くどうかといつていたところだ。そちが来たのなら酒さけでも酌くもうか」

「いえ、ちとおはなしもござりますから」

「なんだの」

「そのご、何かよいお考え直しがおつきでございましようか。直ただ義だよしもそれのみが苦慮され、一同もひたすらお案じ申しあげてい

る次第ですが」

「上洛の件か」

「はい」

「あれなりだ」

「あれなりとは」

「鎌倉の留守の方がむしろ心配でな。ご勅使への返答も迫つてお
るが、出発の日取りだけがつい決めかねておる」

「兄上」

「なんだ」

「ではまだお迷い中なので」

「迷つてはいない。一同の案じるところもよくわかっているが、

勅命、かしこ畏んで行くしかない。上洛ときめているだけだ

「ばかな！」

直義はついに張りつめている胸のものを破つて、兄の、まともに瞠みはつた眸へ向つて、挑いどみかかつた。

「勅が何ですつ、勅が。勅とあれば兄あにじや者には、そんなにもありがたいのか。そむけないものなのか。兄者は近頃、どうかしてしまッている！」

尊氏は、屹きつと、きつい厳きびしい顔をしてみせた。

「…………」

ものはいわす、それはただ兄の顔になりきつている。

これにぶつかると、直義は幼少からの習性に抑止よくしされている平

常の屈従感から、別な“弟の反抗”が抑えようなくむかつとクビをもたげてくる。

直義にはつねに、^{おおやけ}公の兄なる人と、私の兄とが意識無意識にくべつかれていた。——今夜この室にはたれもない。——直義の感情は丸裸なものになれと内からささやかれている呼吸づかいなのである。兄弟にして一人にひとしい骨肉感が濃厚に彼の血のうちで何をいおうと恐れはないような勇を想起させていた。

がしかし、一瞬だけの反逆だつた。いつまで、ものもいわぬ兄の眼に、直義はつい気を崩した。そして位くらいま負けみたいな卑屈にすぐ妥協しかかる自分を腹だたしく厭いながらも、

「兄者。^{あにじや}……思い出してください。直義は鑁阿寺の置文おきぶみを今

とて夢にも忘れてはおりません。兄者には、いつかあれを、お忘れではないのですか」

と、ことばを直した。自分の激血と兄の反射とをなだめ合うつもりで強いて低く静かに言つたのだつた。

「おたがい、いつか年をとりました。都の風にも吹かれ、一門三十二党それぞれに家運を伸ばし、わけて兄者は、正三位左兵衛ノ督に叙され、八座の宰相（參議）の御一人にも挙げられ、殿上人の列にも列せられてみると、置文のお誓いなど、自然お心からうすらいでしまうのは、人情自然かともぞんじますが、しかしそれでは一体なんのために」

「直義、直義……」

「いやもすこしいわせてください。そんな小さい望みのために。
そ、そんな 小しょうせい 成に安んじるくらいなら何も」

「過ぎるぞ、口が」

「いいや、先祖家時公の置文などを御一門に誓わせたり、またこれまで、あらゆる恥に耐え、多くの者を奮い死なせ、その秘事のため、私はいまにいたるも妻を持たず、兄者は妻子はあるも妻子と一つに居ることもないなどの苦勞は何もすることはなかつたはずです」

「だまらんかつ、ばか」

ついに、苦しいものは、彼よりは尊氏を耐え難くして來た。尊氏もどうとうおおやけ 公には吐かない語氣で弟を呶鳴つた。

「直義。きさまこそ少しどうかしておるぞ。それしきのこと、きさまから聞くまでのことはない。ちと、あたまを冷やせ」

「どちらが」

「なにつ」

「われらの大望はまだ中途でしようが。だのに、はや公卿なみの優遇ぐらいで骨抜きにされ、勅とあれば理非なくありがたがる兄者なのでは情けない。直義は一同に代り、その晏あんじよ如を醒まさいではなりません」

「だまれ。青臭い広言をば」

「お叱りは何とうけてもいい。かくなる上はだ。——兄者つ」

「なんだ、その眼まなざしは」

「僭上ですが、今日、勅使の方へは、尊氏事上洛つかまつらざと、兄者に代つて、いや足利三十二党を代表して、直義からお断り申しておきました。勅使は明早々に、帰洛のはずです。もう御断念のほかはござりますまい」

「な、なに」

尊氏はせきこんだ。あきれ返つた態ていでもある。穴のあくほど直義の顔を見て。

「き、きさまは、この兄をさしおいて、直々じきじき、勅使へさようなくれをお答えなどして、わしを窮地へおとす所存なのか」「なんで。ばかな！」

直義は言い放した。もう腹をすえた眉なのだ。

位置を変えて、弟が逆に兄へ食つてかかるときの盲目的な顔を見ては、その暴言の底のものに、尊氏もはつと怯まずにいられなかつた。その常軌のワクにしばられている兄へ、弟はなおさら果敢だつた。

「そこがあなたの頭がどうかしている所だ。あにじや兄者とうりようを待つ窮地とは京都のことでしかない。そんな危地へわれらの 棟梁とうりょうをやつてはならん。断じて、上洛は阻止すべきだと、一族どもは寄り寄り憂えているのですぞ。その憂いを負つて、私は勅使にきつぱりとお断りを呈したまでだ。それが何で兄者を陥すことか！」

「ああ、きさまもまだ依然むかしのままな青侍だつたか。浅慮あさはか者ものめがッ。これでまづ 九きゅう 仞うじん の功こうも一簣いつきに欠いてしもうたわ。

思えば、きさまの如き無謀こうざい小才なやつを大望の片腕こわんとたのんだな
どがすでに尊氏のあやまりだつた。返す返すも残念な」

尊氏は一步自分を内省に退いている。ここで弟と争つたら全足
利党は真二つに割れる。必死にことばを抑えていたる風なのだ。が、
直義にはそれも弟への揶揄やゆに聞えた。

「これやおかしい。すべてを直義の小才や無謀のせいになさるが、
兄者はどうだ！ その兄者はもう公卿風の毒に魅せられて、苦難
の大業よりは、いまの栄位に小さく安んじていたいのだろう。大
望に魁さきがけて死んだやからこそ不憮ふびんなものだ。幾多の將士の白骨は浮
かばれもしまい」

「ちと、おちつけ、直ただよし義」

「この私が」

「よく聞け。そもそも、われらの望みとは、そんな易々たる道ではあるまい。第一この国では、逆賊朝敵とよばれたら大事を成すなど全く望めぬ不利となる。またあくまで朝廷は朝廷としてあがめおくのが尊氏の本心でもあるのだ。そこがきさまらには分つておらぬ」

「分りません！　てんで分りませぬ！　どうして朝廷をそう恐がるのか」

「ちがう。尊氏の意はちがう。どうなろうと、天皇はやはり至上の上にあがめおきたい。この国の美だ、また要だ。^{かなめ}もしそれをなくしたら、さなきだに俺が俺がの天下は、のべつ乱麻^{らんま}乱世のくり

かえしだろ。それを恐れる」

「それなればだ、なぜ大望などいだいたのか。初めから矛盾でし
ょうが」

「いや矛盾でない。頼朝公はそれを成しとげた。いやもつとよい
武家統治も不可能ではない」

「ちッ、それで兄者の夢は夢とわかつた。幕府を廃し、武家を政
治から無力にし、すべてを天皇の下（もと）に歸す（き）というのが後醍醐の一
貫した御方針。（あが）いや王政としてじつきにもう布かれている。そ
れをその朝廷も崇め、また武家統治の再興も見ようなどとは、元
々出来ない相談だ。矛盾も矛盾、いやはや、ばかげきつていてる！」
「直義。いかにとはいえ、下種（げす）の喧嘩ではなかろうぞ。雑言はや

めい！」

「やめます！　いう気力もありはせぬ。痴人の夢には、もう、がつかりだ」

「そちは大望を矛盾といつたが、朝廷を上に崇めることと、武家政治をもつこととは、矛盾しない」

「もうお説諭せつゆはたくさんだ。頼朝公の時代とは時がちがう。あのころは後醍醐の御代あがでもなし、朝廷でも、王政一新などを世に布いてはいなかつた」

「だからこそ、尊氏はひたすら機を待つに如くなしとしていた。
自然、御心みこころが、人心の望まぬ王政の非をさとられる日を、気長に待つの腹でおつた。しかるに、きまと来ては、短慮だけの者

でしかなく、事々に先ばしつて大望の道を邪げさまた、それのみか、この兄を叛逆者の名に追いこみ、大事の達成を、われから進んで打ち壊している」

「はて。いつ私が足利党のめざす希望をさまたげたろう。また、ぶち壊したと仰つしやるのか。いくら兄者でも聞き捨てならん。これまで戦場の犠牲にえとしてきた多くの白骨に対してもだ。兄者ツ、

自分の卑劣を弟の私にかぶせて、それでも気がすむのか」

「ではいうが。直義。きさまはまだこの兄にさらと打明けぬな」

「何をです」

「大塔ノ宮弑しいぎやく逆の不逞をあえて犯したことだ」

「いやお耳には入れてある」

「それは一片の報告にすぎまい。部下の淵辺とかをやつて、このたびのどさくさ紛れに、殺せといいつけたのは、ほかならぬきさまではないか。下手人は汝直義なんじなのだ。それをば今日まで、あからさまに、そうとは告げず、ただ鎌倉放拠のさい、何者とも知れぬ者の兎行であつたかのごとくぼかしておる」

「おお、ご存知ならいいつてしまおう。いかにも私が命じてやらせた。直義こそは下手人と世上から指さされても私はいい！」

「たわけめ。何でさような暴をむざとしたか。非情、無思慮、それで一軍の将といえるか。言語道断、いつかは、きさまを罰しずにはおかぬぞ」

「これは異いなお叱りだ。私心私怨のように仰つしやる。だが直ただよ

義しの心は、未来恐るべきあの宮はかかるさいにこそ除いてしまえ。きっと兄者も腹の中ではよろこぶに違いない。そう考えていたものを」

「だまれ。かりそめにも至尊しそんの御子みこ。しかも陪臣ずれの無慈悲な刃で殺し奉る法があろうか」

「では、女奏によそうの讒ざんを用いて、宮を初雪見参の夜に、陥おとしいれたのは誰ですか。兄者、あなたの計ではないか」

「…………」

「それだ。そのように、あなたのすること、いうことは、すべて矛盾だらけなのだ。尻尾と頭とが一つでない。道誉ぬえを鶴おおねえというが、兄者こそ上手うわてをこす大おお鶴ぬえだわ！」

「こやつ、止めぬな、悪口を」

「いうまいとしても、こよいばかりは直義も」

と、直義は眼のうちのものを煮えたぎらせた。ふと幼少の頃そつくりな顔にみえる。せつな、尊氏はいきなりその弟の頬をピシツと烈しく一つ撲^はりつけていた。

「いえッ。いくらでも申してみよ」

「打ちましたな、兄者！」

尊氏にもままかつとなる性情がなくはない。

そこもまた、直義からいわせれば、『矛盾の人』であるのどう。けれどそれを外に出したせつなに彼は後悔する。いまもそうであつた。弟を打つには打つたが、とたんに胸は凝縮^{ぎょうしゆく}の痛み

をしていた。そしてもう半分は理性の自己にもどりながらも、

「オオ打つた。まだいうなら、いくらでも打つぞ」

と、怒いかった眼だけはそらさなかつた。

「……」

直義は蒼白な顔に鬚びんの毛を垂れていた。とつさに、あらい感情を吐きそこねて、かえって、打たれた自分を憐あわれむようにしゆんと色を沈めている。そして、静かに、曲まがつた烏帽子えぼしの緒おをむすび直すあいだに、薄い自嘲と度胸をすえた太ふて々ぶてしさとを、どこやらにたたえていた。

「兄上——」兄者とはいわなかつた。「ついまたあまで、言いたい放題を吐きすぎました。ご折檻せつかんは身にこたえる。お気のす

むまで打つてください」

救われたように尊氏もすぐ顔を解した。

「いやおれも大人気ないわ。そちと二人だけでいると、とかくわがまま同士になりやすい。そのくせ兄のおれの中には亡父のおもかげや先祖の遺言などが常住無意識に住んでいる。それを直義にまで水臭くされるとこれまた淋しい。そこらが尊氏の矛盾だろうよ。だがどう争ッたところで、しょせん二人は兄弟なのだ。かんべんしろ、弟」

こういわれると直義は口ほどもなかつた。ほろッと涙をこぼした。

尊氏はそのとき、その眸をじろつと斜め後ろへやつた。近侍の

細川頼春だろう。主君同士ふたりの争いを心配して、廊のそとにかがまつていたらしいが、すうと退がつて行つた氣配である。尊氏はすぐ言つた。

「な、直義。とかく口論してみても始まらぬ。大塔ノ宮弑しいうやく逆の一事も、勅答の一条も、はや、やつてしまつた後のまつりだ。いまさらどうなるものではない。またそちの悪意でもなく、みなこの尊氏を思つてしてくれたことではある。このうえはあとの思案だ。が、その思案には」

と、尊氏は襟もとに顔を埋めて、

「……いささか、わしも途方にくれる。さてどうしたものか」と、つぶやいた。

「いやその儀なら」と、直義は初めからの覚悟のいで「——す
べての悪名は私が着ます。いかなる難関にも身を以てあたる所存
ではあります。がただ一つ、兄上の胸底には、いまなお、なじ
おきぶみ寺の置文おきぶみが、お忘れなくあるのかないのか、それだけが」
　　鑽阿ばん

「気がかりか」

「気がかりです」

「はははは」尊氏は、初めて笑い出して。「見損うな。殿上の衣
冠などはひなにんぎょう雛人形ひなにんぎょうでも着る。また、すでに白骨となつた者、生
ける一門の族党やから、ましてそちまでを、裏切つていいいものか。尊氏
はそちたちが観て いるよりは、ずんと欲望の深い悪党なのだ。わ
しが仕尽くす業ごうはこんなことでは終るまい。頼朝公ですら、さし

も死際しにぎわはよくなかった。この尊氏もそれには似るかもしだん。
 ……それでの、そろそろ後生ごしょうを心がけたい。ここでしばらく仏門に入りたいのだ」

「えつ、仏門に？」

本気かと、直義は疑つた。

だが、あいまい模糊もこな尊氏の顔はまた笑つていた。

「いや謹慎のためにだよ。近日中にわしはこここの将軍邸を捨てて、寺へ移る。身はそのまま俗尊氏だがの」

「どうして急にさような思い立ちを」

「なんといったせ、大塔ノ宮を殺めまいらせたことは申しわけない。

下手人淵辺ふちべには科とがもない。当然そちの犯した逆罪だが、この尊氏

も同罪たるはまぬがれ難い。かたがた、上洛も拒否し、違勅をかさねたうえは、寺へでも籠つて心からな詫びを、朝廷及び世上へ、かたちで示すしかみちはなかろう」

「では、しばしふの？」

「そうではない。また兄の矛盾よと笑うだろうが、本心、宮の御ご菩提ぼだいも弔とむらう氣だ。むごたらしいご最期をお遂げさせた。尊氏の強敵たるには違いないが、もはや無力なお人なりしを、さまでにはせんでもよかつた。いや、直義、またそちを責めるわけではないぞ。いわば後ごしょう生の怖れか。ふと夢枕に宮のすさまじいお顔を見た夜もあつた。ともあれ、わしは寺へ移る」

「あとは」

「そちがやれ」

「軍も諸政も」

「一切ここはそちに委す」

「かまいませぬか」

「ただしわしが今夜言つてきかせたことだけは以後踏みはずすな。
八幡はちまん、尊氏がこよいの言に偽りは持たぬ。何事もその辺を考え
てやつてくれい」

「ですが、朝廷の御目標と、わが足利家の大望とは、まったく相
容れぬ逆です。出来るでしようか、その両立が」

「できる」

「むづかしい」

「もとよりやさしくはない。百難もあるう」

「ですが、朝敵となるのをひたすら怖れてばかりいた日には、大事を成すなど思いもよらぬ難事ではありませぬか。いくら委すと仰せ下されても」

「時運はたえまなく動いているのだ。そうこだわるな。眼前の事態にのみ固着した頭脳あたまでは手も足も出せはせぬ。——やがて勅使も帰洛のうえには、何かの変も生じて来よう。打つ手も自然出てくるものだ。尊氏もここしばらくは静観しよう」

やがて、両三日後に、はやこのことは実現された。

尊氏は、細川頼春、一色右馬介らの近習小姓わずか七、八名を身につれただけで、突然、

蟄居する

の旨を内外に触れ、淨光明寺のうち深くに籠つてしまつたのだつた。

いきさつは直義とおもなる者しか知るところでない。一門の族党は大きな驚愕に打たれた。しごく単純な武者ばらでもある。彼らは主君の謹慎のすがたをそのまま信じた。理由なく傷んだり何かへ憤慨したりした。そして一時的ではあるが、鎌倉は冴えない景色のうちにあつた。

勅使、中院ノ具光は、すでに帰洛の途にあつたが、これらのことも海道では早耳に入れていたにちがいない。

彼の見た“東景色”はそのまま朝廷へ復命された。——尊氏勅

ヲ奉ゼズ——は、なかば予期されていたものの、いよいよ事実化されると、あらためて衝動は大きかつた。朝敵尊氏ということばは、宮中公然な声になつた。

義貞・駁す

連日くげの公卿せんぎ僉議である。そのふんい氣といい宮廷内の緊張は、かつてのどんな時局にも例をみないほどだつた。

「もはや僉議の要はない！」

この声は最もつよい。また多い。

彼ら若公卿はいう。

「尊氏の反逆は、すでに歴然といえる。それなのに再度の勅を奉じさせて、法勝寺の慧鎮^{えちん}上人をさし下してみたらなどという儀は、あまりにも手ぬるすぎて、彼を增長せしめるばかりか、賊に軍備をかためさせる余日^{よじつ}を与えるだけでしかない」

「かつは御威光にかかわろう。朝廷に人なく軍威なきにも似る」「それはすぐ在京武者に弱味をおもわせ、いたずらに去^{きよ}就^{しゆう}を迷わせる悪結果をよぶ」

「すでに、足利の叛旗とみるや、諸家の武門を脱走して、ぞくぞく、鎌倉として行く兵も少なくないとか」

「いや、それは憂えるほどなことでもない。事態の急に、京から鎌倉へと、身の処置をきめて行くもある代りに、また都に祗候^{しきゅう}

の主筋や縁故^{えんご}を持つ輩は、これまたぞくぞく、東国から京へと急ぎ、海道はそのため、西ゆく者、東する者、櫛^{くし}の歯を挽くが如じやと、いわれておる」

「いずれにせよ、もはや右顧左眄^{うこざべん}しているときではない。朝敵尊氏を討つに、なんのおためらいなのか」

「新田義貞に、逆賊討伐の朝命をさしつけ、あるかぎりな王軍を催して、いまのうちに、禍根^{かこん}を断ちおかねば、百年の後、悔いてもおよばぬ」

「それこそは、さきの大塔ノ宮護^{もりなが}良親王の御遺志でもあつた。

いまにして宮の御先見がおもいあたる」

僉議^{せんぎ}の席では、しばしば宮の御名が人々の口に出た。

しかし、宮の御受難とは、ひろく知られていても、その死期のありさまなどは、まだとんと確かなことはわかつていない。——もつともひそかには、先代軍か足利勢の兎刃のもとに？ という臆測もおこなわれていなくはなかつたが、見た者はなし、確証もないことだつた。——ただいえることは「これも尊氏が女奏の讒ざんに始まつたことだ」という恨みだけなのである。

この恨みは当然、大塔ノ宮遺臣のあいだに強かつた。かねがね屈きよう強ふちな侍や多くの兵を内に蓄えていた宮家でもある。——この者どもは扶持にも離れかけたが、しかし浮浪にまではならずにそのほとんどが新田義貞の麾き下かにかかりえられた。近ごろとみに義貞の二条烏丸屋敷の周辺が喧騒にみち、尊氏罵倒の氣概りんりん

たるものがあるのも、ひとつはこれによるといつてよい。

異様な充血はしかしここだけの現象ではなかつた。

千種忠顕ただあきの邸なども近來は、半公卿半武将ともいえる陣装を構えており、つねに義貞をはじめ、目ぼしい武門との連絡を、緊密にもつていた。——無二の味方とばかりおもつていた佐々木道誉が、尊氏へ奔はしつてしまつたなどのことが——彼をしてこのさいの警戒心をいちばい強めさせていたにはちがいない。

その忠顕は、外では義貞とむすび、公卿僉議せんぎでは、たれよりつよい主戦論をとつていた。そして後醍醐へもしばしば直じき奏そうの下に迫るなどの熱中のしかたであつた。

この日、ころのお悩みは 龍顔のうえにもうすぐろい限くまとなつて、さしもお身の細りすらうかがわれる後醍醐りゆううがんだつた。

いつの公卿こうけい僉議にも、

「……まずは」

とのみで 入御にゆうぎよ。また、

「考えておく」

とばかりで御裁可はない。

いわんや、千種忠顯じきじきが 直々の奏上などに、ご意志を左右されるはずもなく、

「ま、さは逸るな。はや 息りたつな。坊門ノ清忠ら一部の意見にも耳いきをさせ」

と、抑えてしまふ。

要するに、僉議の決まらぬ原因は、ほかならぬ帝のお心にあつたのだ。——そして暗に清忠の説を支持しておられるやのふしがあるのも、あるいは帝のおむねを彼にいわせているものなのかもしれなかつた。

その左大臣坊門ノ宰相清忠ひとりは、ほかの激越な即戦主義者とは大いにちがつて、

「尊氏にも功はある」

と、言い、

「その功もたちまち措いて、ただ罪のみをあらだてるのは如何かとおもう。——たとえば元弘げんこうの六波羅探題攻めのさい、彼の反かえ

り忠ちゆうがなかつたら、あのせつ天皇御帰還は仰げぬことであつたかもしれぬ。——また高時の滅亡をはやめたのも、ひとえに義貞の善戦によるとはいえ、もし足利千寿王が一軍の参陣なくんば、これまたどうであつたろうか。——そのほか戦後の混乱時に、よく闕下けつかの治安を維持したなども、尊氏の功は少なしとせぬ。……さればこそ。おん諱名いみなの『尊たか』の一宇をさえ賜うたほどなご嘉賞ではなかつたか。さるを……手のひら返すことく、逆賊とよび、王軍をくだして討たなんどとは、それこそ朝廷の不見識、朝令ちようれい暮改かいまいのたのみなさを、われから世へあかす愚でなくてなんであらう。よろしくここは人心をなだめ、いくたびなりと尊氏の存意をただして、事を政治による解決へ見いだしてゆく工夫こそ、わ

れら朝臣の務めと申すべきではなかろうか」
〔つと〕

というのであつた。

これが衆論にうけつけられなかつたのは、前述のとおりである。けれど後醍醐の顧慮のうちには、ほぼこれと同じものが、たゆたつていた。

元来、この君としては、尊氏なる人間を、根からお嫌いではないものである。いや人間的には彼の一種魅力めいたものに引かれてさえおいでになる。君臣というかきさえなければ一壺酒こしゆを中において膝ぐみで議論してみたい男ですらあるくらいな思おぼしめ召さしめしだ。かつは彼には実力がある。その実力にも御意ぎよいはつねに、あの薄らあばたの一壯者さうしゃを、御無視できない。

だん

のお迷いはかくてつづくばかりだつた。このさいにおける英断には、玄以に学んだ儒学も、大燈、夢窓の両禅師からうけた禅の丹心も、その活機を見つけるところもない幾十日の昼の御座、夜ノ御殿のおん悩みらしかつた。——そして来るべきものはひたひたと月日がついに帝をも浸してきた。突如、即戦派には有力な材料が、諸国から帝のおん目の前につきつけられた。

それは何かといえば。鎌倉から発した檄——すなわち足利家による——諸国への軍勢催促状なのだつた。

「かかる物が國元へまいりました由。朝へ二心なきおちかいに、内覽に入れたてまつりまする」

と、在京武門の国々から届け出てきたその数は、何十通にもおよんでいた。

尊氏の逆心を証拠だてるにはこれ 究竟なものである。ひと
束たばにして僉議の席へもちだされた。

帝も御覧あるに。

新田右衛門佐義貞

誅伐セズンバ有ル可カラズ

一族相催シ

急ギ馳セ参ジラレヨ

と、すべて同文で、また、はなはだ簡である。そして日付けも

みな一様に、

十一月二日

の発になつてゐる。

だが、署名は尊氏ではなく、左馬頭さまのかみとあり、すなわち弟直ただよ義の花押かきはんだつた。

内覽ののち、僉議の公卿一統へ廻覽された。色めきたつ小声小声の下にすべての者がやがて見終る。

「みられたか」

洞院とういんノ実世さねよが言つた。

千種忠顕、二条為冬など、声をそろえて。

「この檄げきに見るも、王軍のお手まわしはもうおそいほどだ。名を、義貞誅伐にかり、賊はすでに、全国から起たんとしておる」

「檄の名分を、君側ノ奸ヲ除ク、というところへ持つてゆくのは、いつのばあいでも、むほん人が世のていをつくろう口実としまつてゐる。はや一日とて、猶予あるべきではない」

「しかも、尊氏の狡さよ」

という者もあつた。

「檄の上に、わが名はあらわさず、弟直義の名を唱うなども、這奴の隠れ蓑！ 見すかさるるわ」

このとき、坊門ノ清忠はなお、いつもの騒がない語調で、「いやいや悪しうとれば物事はいかよにも悪しうとれる。つたえ聞くに、尊氏は先の月、違勅の畏れをいつて諸政を弟の直義に託し、身は謹慎を表するため、淨光明寺に入つたままふかく

つつしんでいると申す。——そして以後は、元弘げんこうにおける戦死者の靈をなぐさめんがため、高時の旧館のあとに、円頓宝戒寺えんとんぼうかいじの建立こんりゆうをするなど、ひたすら恭順の意を表しているとあるが「それよ、そこが尊氏の食えぬところとお気がつかぬか。——つたえ聞くところなら、這奴しゃつは一族の斯波家長なるものを、私に、奥州管領となし、ひそかに奥州へ下向せしめたと聞いておる。——これなども、事をあぐる日、奥州東北の地を、同時にわが麾下きかに取り込まんとする謀意でなくてなんであろうぞ」

清忠は一言もなかつた。

そのうえにも、また、ちようどこのころ。大塔ノ宮の侍女南かしづきノ御方が、宮のおかたみなどをたずさえて、病後のやつれもまだ

癒えぬ身でやつと都へたどりついてきた。——果然、これによつて、宮の死は、足利家の一武士の兎刃によつてなされたことが明白になつた。——後醍醐もこれのみは、よもやとしておられただけに、南ノ方からつぶさな当夜の惨状をおききとりあるや、さすが御父子である。逆鱗げきりんすさまじい御みけしきだた。朝敵、それ以上にも増す尊氏兄弟へのお憎しみが、どつとお胸の堰せきを切つた。

朝廷が尊氏討伐を決定してこれを公卿せんぎ僉議せんに宣したのは、十一月に入つてからのことにはちがいないが、その幾日頃であつたらうか。

「公卿補任」をみるに、

在^{ザイ}、陸奥ノ府

陸奥守北畠顯^{アキイヘ}家

十一月十二日

鎮守府將軍ト為ル^ナ

とあるに徵^{ちよう}しても、この日すでに東征の用意があつたのはあきらかだ。

これはいうまでもなく東海東山両道から兵をすすめるのみでなく、北の奥羽からも官軍を攻めのぼらせて鎌倉を 挟^{きょう}撃^{うげき}させようとの兵略にほかならなかつた。しかし鎮守府將軍の官位はさきに尊氏へさずけられていたのだから、いまそれを褫奪^{ちだつ}して、顯家へ与えられたことにもなる。

ところが、「神皇正統記」にもみえる通り、ここに、

十一月十日あまりにや

謀叛のよし聞えける尊氏

かへつて

義貞追討の請ひを

闕下けつかに奏し奉る

と、ある一ト波瀾が起き、これが問題の、尊氏が細川和氏を使
者として、朝廷へさし出した“義貞だんがいじょう弾劾状”であつたのだろう。さらに「元弘日記裏書」によれば、

尊氏ノ奏状タウライ到来

十一月十八日

との明記もあり。——いざれにせよ、すでに官軍発向の準備や任命などに、朝廷の内外ともに沸くばかりな空気のところへ、この奏状がとどいたことはたしかであつた。

ところで、その上書なる物だが。そのなかで尊氏はこう訴えているのである。

義貞と自分との、年来にわたる確執かくしつを述べ、つまるところ、このようなはめになつたのも、ひとえに佞臣ねいしんの讒口ざんこうによるもので、その張本は義貞であるとし、

「——願わくば、乱将義貞ちゆうぱ誅伐ばつの勅許をたまわりたい。つくすべき忠も、荼毒とどくの輩が君の側かたらにはびこつていたのでは捧げようもない。君側の奸かんを一掃してのうえでなら、微臣たりとも海内静せいひ

謐^{つづ}のためどんな御奉公も決していとう者ではない。どうかご推量を仰ぎたい。恐惶謹言^{きょうこうきんげん}」

と、結んでいるのだ。

内覽のあと。

上卿のおもなる者もこれを見た日のことである。千種忠顯は参内^{かうし}の帰途、新田義貞の烏丸^{からすま}屋敷をたずねていた。そして云々^{しかじか}と、わけを語り、弾劾文の写しを彼にみせたのだつた。

「…………」

義貞は読んでゆくなかばのうちに、もうありありと感情に燃やされた色で耳のあたりまで紅くしていた。

「心外な」

と、一ト言ひつて。

「……千種どの。これに黙つていては、佞臣^{ねいしん}乱賊の汚名を義貞が自認しているものになる。義貞も一文を駁ばくして内覽に供えたい。そのような前例はどうであろうか」

「なんの、前例の顧慮などいるものか。すでに御辺は、王軍の大將として、ご内定もみておるのだ。——尊氏の奏状など、その一行の文も、おとりあげにはなつておらんが、それにせよ、ご潔白を立てる要はある」

その夜、義貞は灯をかきたてて、痛烈な反駁の一文を草そし、あくる日ただちに上覽にいた。

義貞の上奏文は、じつに激越な文辞であつた。自分に対する尊

氏の弾劾状を、完膚^{かんぷ}なきまでにたたいて「尊氏兄弟こそは、大逆無道な人非人である」ときめつけ、箇条書きに、尊氏の“八逆の罪”なるものをそれにあげてある。

一つ、臣義貞が上野^{こうづけ}の旗上ヶは五月八日であり、尊氏が宮方へ返り忠して六波羅攻めに出たのは同月七日だつた。相距ること八百余里。何で一日のまに連絡がとれよう。それを尊氏は、あたかも自分の令で新田を起たせたかのように誣奏^{ふそう}している。これ罪の一つ。

一つ、尊氏みずからはじつさいには元弘の鎌倉攻略に参加しておらず、幼弱な千寿王に少数の兵をつけて、新田の陣^{じん}_{がり}借をしていただけのものにすぎない。しかるにそれも足利の功

として誇っている。これ世上を欺瞞^{ぎまん}し上を偽る。罪の二。

一つ 尊氏の六波羅にあるや、みだりにみずから奉行を称え、
上のみゆるしもなき御教書^{みぎょうしょ}を発し、親王の卒^{そつ}をとらえて、
これを斬刑^{ざんけい}するなど、身、司直にもあらざるに法を執り行
う。これ罪の三。

一つ 東国にあつては、ひそかに禁府を開き、公^{おおやけ}の物をもつ
て、私の恩を売り、征夷大将軍の位^{いみょう}名を偽称す。その罪の
四。

一つ 軍功の施与^{せよ}は朝廷直々^{じきじき}の令に待つべきを、北条時行
を追つて府に入るや、僭上^{せんじょう}にも身勝手に諸所公領の地を割い
て、これを餓狼^{がろう}の將士に分つ。罪の五たり。

一つ さきには 謔構ざんこう をもうけて、巧みに、兵部卿ひょうぶきょう ノ親王（大塔ノ宮）を流離りゆうり に陥す。その罪の六。

一つ 親王の御罰ぎよばつ は、ひとえに宮の驕りおご をこらす 聖衷せいちゅう に存するを、私怨しえん をふくんで、これを囹圄れいご に幽す。罪の七。

一つ 混乱に乘じて、部下の兇兵じそう を使嗾つかなうし、宮に害刃れいじん を加えたてまつる。天人ともに憎むところ。その罪の八。

以上のあとに、

伏して請こふ

乾臨けんりん 明照めいしょう のもと

尊氏直義ただよし 以下

逆党の誅命ちゅうめい あらん事を

畏みて 奏し仰ぐ

義貞 誠惶誠恐謹言

とした長文だった。

尊氏の言いぶん。

義貞の言いぶん。

いざれが是か非などは、もはや問題の時期ではない。またたれ
がみても、尊氏のそれは、義貞との確執を口実に、鉤^{ほこ}をかえて
挑発している詭弁^{きべん}のもののようにだし、義貞がかぞえあげた尊氏の
八逆^{はくせき}のほうが、はるかにその論拠にも力があつた。しいて歪^{わいきよ}
曲^くしている点もなくはないが、不俱戴天の仇敵^{ふぐたいてん}をやつつけた筆
誅の余勢である。多少の誇張^{くわうじょう}はしかたがあるまい。

しかも、彼の昨今は、

「待ちに待つたる日が来た！」

と心を奮つている風だつた。得意さだつた。

その義貞への朝命は、十八日に降りくだり、十九日には、はや京中出陣ぶれの勢揃いがおこなわれていた。——早朝に、彼は曠れの大よろいを着かざつて、いそいそと参内に向つた。朝敵征伐の節度せつど（出征の祝い）を賜わるためにである。義貞はかがやく栄光の中に自分をみていた。

朝敵追討大將軍の首途かど

それには当然、朝廷でもなみならぬ期待のもとに、ずいぶん、古式に則つてその鼓舞のつとこぶをさかんならしめたものらしい。

王軍をうごかす。

それじたいが、朝廷の浮沈もここに賭けたことになる。やぶれば朝廷たりとも、争覇の敵のそうは驕りに屈する覚悟のもとでなければならない。

その大任を負つて、新田右衛門佐義貞はいま、身のしまるおもいで、南殿なんでの下にぬかずいた。——すこしきがつて、弟の脇屋義助、式部義治よしはる、堀口美濃などの身内が、これまた、ひとかたまりに平伏している。

御庭みにわの階下には、内弁、外弁、八座、八省の公卿百官がしゆくと整列しており、その視線はすべて、義貞ひとつに自然そそがれたままだつた。——日ごろにも見てはいるが——わけて今日はそ

の人物にたのみをかけて、

この人に栄えあれ

と祈りをこめた衆目だつた。

義貞はそれを感じる。武門最上な本懐と感じる。彼はすでにかつての旗上げの日、郷土の産土神に願文をささげて、

——古ヨリ源平両家、朝ニ仕ヘテ、平氏世ヲ乱ストキハ、源氏コレヲ鎮メ、源氏世ヲ侵ス日ハ、平家コレヲ治ム

と、告白していた。彼にもこの下心はあつたのだ。いまや平氏の北条はない。足利が取つて代ろうとしている。しかし自分も源氏の嫡流だ。有資格者である。八逆の賊尊氏を逐つて、自分が霸武の権を取つて代るに、世上の誰もふしげとはしまい。

しかも優渥なるみことのりと大將軍の印綬を賜わつてそれに向うのだ。義貞はすでに尊氏を呑んでいた。やがて下された祝酒の一ト口にさえ、それは色になつて彼のおもてをほの紅くした。

朝廷では、万一このたびの東征にやぶれでもしたら、建武新政の緒も根本からくつがえるものと、さまざま古例の吉凶なども案じて、治承四年、頼朝追罰のさいに、三位惟盛をつかわされたさいの仕きたりは不吉であつた、よろしくこんどは天慶承平の例に倣うべきであるというところから、特に、義貞へは節刀を賜わり、やがて、三たびの万歳の唱えのうちに、華々と、彼のすがたは大内を退出してきた。

そして衛府の門を出ると、なに思つたか、

「高倉へ」

と、軍兵をうながして、彼の馬はとうとうと先をきつて二条高倉ノ辻へ馳^はせむかつていた。そこで馬を止め、

「やよ船田ノ入道、朝敵退治の都立ちには古例がある。知つてい
るか。古式いたせ」

と、一つの門を指さして、命令した。

そこは今は人もなき、旧足利直^{ただよし}義^{よし}の空^{あき}館^{やかた}なのである。――

――船田ノ入道は、その前に兵をそろえて、三たび鬨^{とき}の声をあげさせ、また、三すじの鏑矢^{かぶらや}を邸内へ射込んだのち、中門の柱を切つておとした。

するところこの鬨^{とき}の声にあわせて、三条河原の空でも、わああつ

と、武者の諸声もうごえがわきあがつていた。

上將軍の陣であつた。

大將軍義貞のほかに、後醍醐の一ノ宮、中務尊良親王が、上將に任せられ、この日ともに都を立つこととはなつていた。

まもなく、義貞の軍は、尊良親王の騎馬一群をまん中に迎え入れて、その長蛇ちようだのながれは、順次、三条口からえんえんと東していた。

このさい、親王の中書軍ちゅうしょぐんがささげていた日月の錦の旗が、とつぜん突風に狂い、竿頭かんとうから地に落ちたので、人々みな、

「あな忌まわし」

と、不吉感に吹かれたなどと古典太平記にはあるが、作為であ

ろう。ほんとは思われない。

また兵力なども、

その数六万七千余騎

前陣すでに

尾張の熱田に着きけるに

後陣はまだ大津相坂の関あふさか

四ノ宮河原にささへたり

などとあるのも大げさに過ぎたものだ。もちろん、物見、伝駅などの小隊は、先へ先へと、先行してはいたろうが、それにしてもの感がある。

じつさいの兵数は、中書軍をあわせても、二万がらみではなか

つたが。

親王の軍を、中書軍とよんだのは、親王が“なかつかさきよう”で
あつたからで、ナカツカサの御子を唐名では「中書王」という。
それからの敬称である。

しかし軍の中堅は、ほとんどが宗徒の新田一族で——脇屋義助、
義治をはじめ、堀口、綿打、里見、烏山、細屋、大井田、大島、
籠守沢、額田、世良田、羽川、一の井などの諸将いずれも越後
から坂東上野の出生者だつた。

これになお、他家の大小名がある。勅にこたえて、一議なく官

軍側に拠つた在京中の諸国の武門で、それには、

千葉ノ介貞胤

さだたね

よ

宇都宮公綱
きんつな

菊池肥後守武重

大友左近将監

塙治の判官高貞
えんや

熱田ノ大宮司、薩摩守義遠などの百数十家、所領の分布からみても全国にわたっていた。まさに王師おうしとよぶにふさわしい。

なおこのほかに。

同日から三日おくれの都立ちで、尾張黒田から東山道をとつて下くだつて行つた別手の搦め手軍からもあつた。

それの大将には大智院ノ宮、彈正ノ尹いん宮のみや、洞院とう院いんノ実世、

二条ノ中将為冬など、公卿色がつよく、侍大将では、島津、江田、

筑前の前司ぜんじら、二十余家の旗がみえる。兵力はざつと五、六千騎で、行く行く信濃の反軍を揉みつぶし、甲州を掃いて、鎌倉武藏口へせまる作戦。

時をあわせ、奥州からは北畠顕家が一路南下の予定である。——この両翼を心にえがきながら、義貞は東海の征途にあつた。——濃尾のあいだでは一矢も錦旗まに抗むかつてくるものはなく、十一月の寒烈はかぶとの眉びさしに霰あられを打ち、弓手も凍るばかりだつたが、彼の頬にはたえず自信の信念か微笑かがあつた。

「尊氏は以前から戦にかけてはから下手よ。また直義は、たんなはやる血氣の逸り者」——と。

このあいだにも、都の使いは、たびたび、義貞をはげましに下

つていた。——朝廷では諸大寺の座主^{ざす}から天皇ご自身までも、連日にわたつて戦勝祈願の大威徳法の修法をこらし、また再度の綸旨^{んじ}を諸国に発して、逆賊尊氏の必滅^{ひつめつ}を天地にちかつておられるとのこと。まさに天下分け目の様相だつた。

網引き地蔵^{あみひじぞう}

鎌倉泉ヶ谷の浄光明寺は、ほんの一堂に庫裡^{くり}があるだけの、草寺^{くさでら}だつた。

むかし北条長時が何かの忌縁^{きえん}に建てたものだという。いかにも侘びた禅室ですぐ裏の泉谷山には朝夕鴉ばかり啼いていた。それ

に時は十一月。枯木寒鴉図こぼくかんあづそのままな冬木立の中でもあつた。

「もどりまいてござりまする」

馬は山門の外に。

駒のあるじは今、旅ぼこりの身もそのまま、すぐ、ここにさき
ごろから引き籠こもつていた尊氏のまえにあつて、平伏していた。

「和氏かずうじか」

待ちかねたぞというばかりな顔である。が、大いに労をねぎら
つて。

「早かつたな和氏。——海道の往復を、こんな日数でもどるには、
さだめし道中夜もかけて帰つて來たか。大儀大儀。して、上奏文
の響きはなんとあつたぞ」

「すでに朝議一決のあとにござりましたが」

「うむ」

「上書は、洞院ノ実世卿さねよきょうからただちに叢覧に入れ、僉議せんぎの席でもご披露あつたやにうけたまわります。が、ついにお返し沙汰は何もございませぬ」

「それでいい。だが、義貞の反応についてはどうだ。聞きおよぶところはなかつたか」

「いや、それは大いにございました」

「大いにあつたと？ ふ、ふ」

予期していたものの手ごたえに、思わず彼の相好そうごうが笑えみ破われ

た。

使者の細川和氏も、これを土産として帰るには、よほどな苦心を要したらしく、やおら革かわづと苞ふくさを解いて、

「まず、ご一読を」

と、尊氏の前においた。

それは彼が和氏を使いとしてわざと朝廷へ提出した“義貞弾だんが劾いじょう状”にたいして、当の義貞が、ただちに「尊氏こそ八逆の賊である」と反駁上奏したと聞く全文の写しなのだつた。

和氏は殿上の誰かにそつと手を廻して、その写しを入手してもどつて来たものにちがいない。……尊氏は手にとるや、眼をそばめてその全文を黙読していた。

一つ、何

一つ、何

と箇条書きにしてある自分への痛烈な八罪なるものに目を通していくながら、尊氏の面にはしかしなんの波紋も起つて来ず、むしろ容認しているふうですらあつた。いやもつと何か目的を別にした「——思うつぼ」とこれを読んで、ほぼ満足のうちに巻き取めていたといえないことでもなかつた。

「和氏。ろうく老軀に鞭打むちうたせて、ご苦労だつたが、使いの功は上々であつたぞ。これでまず、義貞もじつとはしておられまい」

「されば即日、朝廷からは義貞へ、尊氏追討の総大将を任せられ、ちゅう中書うしょの宮尊たかなが良を上に、約三万騎、東海東山の両道から、ぞくぞく東へ下りつつあります」

和氏はべつな覚書をふところから取り出して、その密牒な
ども、尊氏の前にならべかけた。しかし、尊氏は手にもとらずこ
ういった。

「待て待て。わしは世に告げてあるとおり籠居の身だ。軍事は
聞いても、せんかたない。諸政一切も直義にまかせてあること、
戦のことなら直義の許へ報告せい。この尊氏はあずかり知らん」

晩の勤行ごんぎょう、朝のおつとめ。ここでの禅院生活を、尊氏は出

家の身とも変りのない規律と日課の中においていた。

大塔ノ宮の靈

元弘げんこうの戦歿者敵味方の靈

高時の靈

いくたの有縁無縁の靈

に心からな回向をささげて いる姿にみえる。また心から朝廷へ
も 恭順の意を表して いる彼かに見える。

もちろん、酒も魚肉も断ち、法衣こそつけていないが、道服す
がたで、昼は机によつて 読書三昧、閑居まだ日は浅いが、倦む
色もみえないのだった。

したがつて、近習の細川頼春と一色右馬介も、庫裡の裏で、ぜ
ひなく薪割りや水汲みまでをやつていた。彼らだけが日々ただ武
者張つて無為にもいられないのであろう。——今も、裏山から担かつ
ぎ出してきた粗朶そだタバに腰をおろして いた二人はいささか味氣

ない顔の疲れを見あわせていた。

「右馬どの」

「む？」

「貴公には分つておるだろ」

「何が」

「大殿の御本心だ。本心、このまま世捨て人となるおつもりだろ
うか」

「さあ、どうかな」

「幼少からのお傳もりやく役。その右馬どのなら」

「いや、ご舎弟（直義）さまでさえ分らぬ兄といつておられる。

どうして拙者などにわかるものか。……だが、ああしていらつし

やる今日は今日だけの御本心だとはいえるだろう

「では、あしたは」

「あしたのことは、おそらく御自身でも……。いやもつと遠い先是観ておられるに相違ないが」

「つかみどころのないことを」

「そう、つかみどころがない——それがあのお方そのものだな。

まだ又太郎さまだつた十代のお若い頃からだ。……しかしそれは、
ぼんやりしているのとは違う。何か、人とは異なる^{こと}時点と観点に立つておられるせいであろう。だから、人には矛盾とみえることも平気でなされる風もあるのだ。またそんな一面が年ごとおつよくなってきた風もあるな」

「……」

頬春は、目くばせした。寺の庫裡くりやにもよく里の販ひきぎ女めたちが物売りに廻つて来る。いまもふと山着姿さんしょくしきの小娘が、方丈の庭口をとりちがえて、戻つて来たらしく、うろうろしていたが、ここの一
人へ気づくと急に、

「山の芋いも買いうておくんなされ。お侍さん、山の芋はいらんかね」と、馴なまれ馴なまれしく、そばへ来て、強しいるのだつた。要いらぬとい
うと、

「では、麦の粉はどうですえ。菓子にしたらええがの」

「いらんと申すに」

「お茶は」

「茶もある」

「でも、ことし摘んだよいお茶なのに、見ても貰わんでは
 「解くな。荷を解いても、買いはせぬぞ」
 追い払っていたときである。ちょうど庫裡くくりの縁えんを通りかけた尊
 氏がこれを見て。

「頼春。買つてやれ、何ぞ」

「お。これはいつのまに」

「愛くるしい娘だ。その芋の苞うぶ、持つているだけ求めてやるがよ
 い」と、言つた。

「運のよいやつだ。殿さまへようお礼を申せ」

頼春は、あたい値ひさをきいて、販ひざぎ女の手に錢ぜにをわたし、そそう々に追い

立たたが、女はぬかずいたまま、縁の上の尊氏の姿へ、

「ありがとうございます」

なんども、それをくり返し、またお願ひいたしますと、やつと立つて去りかけた。

その背へ、浴びせるように、

「これこれ。これに狎なれて、またうるさく来てはならんぞ」

右馬介が言つた。けれど女は返辞もしなかつた。そのくせ遠くから縁の尊氏の姿を二度も振り向いて行つた。

尊氏はあとで二人へ訊ねた。

「あのむすめは、よくここへ見えるのか」

「いえ、里の物売りは、よくまいりますが、いまのような小娘は」

「初めてか」

「は。きょう初めて見たようにおもいまする」

「気をつけたがよい」

「それはまたどういうわけで」

「ただの山家女や浦人うらびとのむすめとは思えぬ。何かいわくのある者だろう……」と、そのまま縁を下りて、あり合う草履ぞうりに足をつづかけながら。

「右馬介」

「はっ」

「この裏山の洞ほらに、地蔵まつが祀つてあるといつたな。ゆうべの炉辺で、そんな話を二人としておつたが」

「は。いやしかし、つまらぬ地蔵でござりますので」

「何でもよい。地蔵は母の信仰でもあり、わしの守護仏ともいわれておる。行つてみよう」

尊氏はもう歩いていた。

鎌倉の海もこの山も、冬を忘れたような小春日だつた。右馬介たちが柴採りに来てふと見つけたという横穴を覗いてみると、二尺ばかりな石の地蔵が、ちよこんと石の台座に乗せてあつた。

「これか」

「はい」

「地蔵だろうか?」

〔みだ〕
「弥陀とも見えませぬ」

「やはり地蔵尊かの。しかしお顔も衣紋えもんも、ひどく磨滅して貝殻みなども附着しておる。察するに、地蔵は地蔵でも、海上がりの御み
仏ほとけだろ」

「お目がねの通りです」と、頼春が答え——「これはいつの頃か、近くの漁師が海から拾い上げた物のよしで、里人さとびとのあいだでは、網引き地蔵と呼んでおるやに聞きました」

「ほ。網引き地蔵と」

尊氏は急にその前へうずくまつた。そしてつらつら地蔵を見て、また、うやうやしく掌てを合せた。そのあとで笑いながら二人の近習へ言つたのだつた。

「どうだ、地蔵のお顔は、この尊氏と、どこかよう似ているであ

ろうが

「お戯れを」

「いや戯れではない。網引き地蔵とは、おん名からして気に入つた。粗略にするな」

このときは、ただこれだけで帰つて來たので、二人には、尊氏そんじが何でそのような冗談をいつたのか、またひどく機嫌のいい一瞬いつきを顔に見せたのか、主君の心は酌めなかつた。

が、その意味がわかつてきたのは数日の後だつた。いやその晩、下御所しもごしょの直義ただよしがこここの禅院を訪ねて來た時からだといつてもよい。

「こよいは、お別れにまいました」

直義は、冷静だつた。

尊氏もそうと察していたらしく、かくべつ、怪しみもしなかつた。

「出陣は明朝かの」

「は。すでに高こうノもうやす師 泰以下三千騎ほどを、とりあえず一陣として先に急がせ、吉良、細川、佐々木道誉らも、つづいて戦場へむかわせました」

「そうか」

「敵は、東海東山の両道を数万の大軍で急下してまいるよし。このたびこそは、天下分け目の一戦と期しているもののようにござりまする」

「むむ」

「おそらくはなかなかの苦戦。直義も生きてふたたびお目にかかるや否やわかりませぬ」

「ぜひもない儀だ」

「一族の諸将は、このさい、まげても、大御所（尊氏）の御出馬を仰がずにはと、軍議紛々^{ふんぶん}ではございましたなれど」

「……」

「否々^{いないな}、一たん寺門に入つて、世へ屏居^{へいきよ}と触れたからには、たとえ剃髪^{ていはつ}はなさらぬまでも、めつたにお心をひるがえす兄上ではない……と一族どもを押しなだめて、一切はこの直義が独断にて指揮いたしまいてござりまする。その僭上は、おゆるしのほ

どを

「なんの、軍事も諸政もすべてを捨てた恭順きょうじゅんの身。あとは、
あとの者の一存に委すしかない。……だが」と、間まをおいて。

「直義」

「は」

「このたびの戦の相手は一体誰だ？」

「異いなおたずね。おたずねまでもござりますまいに」

「いや心得ておかねばならん。敵は新田義貞であることを。皇室
ではない、義貞であるのだ」

「が。その義貞は、朝命をこうむつて、朝敵討伐の節刀せつとうを押し

た者にすぎませぬ」

「かたちは、さもあれ、名分めいぶんの上においてはだ。あくまで、わが足利家は新田ちゅうばつを誅伐ちゆうばつするものと世上とよなへ唱えろ。——和氏かずうじからも、その義貞弾劾の件は、聞いたであろうが」

「はい」

「尊氏のあの上奏は、朝廷を相手どつたものではない。いや朝廷との対決を、わざと、足利新田両家の確執そに外らして、義貞を陣頭におびき出すためにした挑戦状にはかならぬのだ」

「ではあれも、そうした深いご用意であつたので？」

「もちろん、実戦でもその域いきを越えてはならん。——はや高ノ師泰せんぱうを先鋒せんぽうにやつたそうだが、その師泰の軍勢にも、三河の矢矧やはぎ

から西へは進み出るなと固くいましめておけ。……三河までは足利家の分国（領分）だが、そこから先をおか侵せばしぜん反逆の軍になる。あくまで私は、受けて立つ、そこが足利家の名分であるぞよ」

「心得ておきましょう」

ぜひなく、直義はそう言つてまもなく退さがつて行つたが、決してしゃくぜん然とした色ではなかつた。いや奮然と死を期して別れ去つたものと見られなくもない。

すると、当夜の夜半だつた。

何か、尊氏の寝所の方で、異様な物音がしたので、近習の二人は、押つ取り刀でそこへ駆けこんで行つた。

「殿つ」

「おうつ、介^{すけ}と頼春か」

「なんでございますな、いまの物音は」

「盜^{ぬすびと}人が入つたのだ」

「え、盜人が」

「あかりをつけろ」

「は。ただ今」

室はまつ暗だったのである。右馬介は宿直^{とのい}の方へ灯を呼んだ。
すると尊氏は、

「ほかの侍どもは入れるな」

と、頼春に命じて、廊の仕切り戸を閉めさせた。

寝所の内には、枕が飛んでいた。また研ぎすました短い刀が落ちている。尊氏に投げつけられたものであろう。隅には小さくなつて、うずくまつている人影があつた。

「お。そやつでござりますな、曲者は」

二人はそばへ寄つて行つた。山着の筒袖に膝行袴たつつけを穿き、布ぬの頭巾で顔をくるんでいたその者は、左右の腕を、いきなり介と頼春の二人につよく捻じとられたので、いやおうなく伏せていた胸を反らし、覆面のうちを短繁たんけいの灯に曝さらした。その顔は、思ひがけなく、花みたいに白かつた。

「やつ？」

二人は思わず手を離した。きのう庫裡くりへ物売りに来たあの販ぎひさ

女^めなのである。またとつさに、あのとき尊氏が言つたことばも思
い出させていた。

「介——」と、あきれ顔でいる彼へ、尊氏は一方の座から声をか
けて。「ま。やさしく訊いてやれよ。なんでこの尊氏の命を狙う
などの不敵を抱いてここへ忍んできたものか。ましてまだ年もゆ
かぬ小娘の身でよ。よほどな仔細がなくてはなるまい」

「では、これに落ちて いる刃は」

「その小娘の物だ。それをもつて、わしの寝首を搔^か_{こう}と神かけ
ていたものだろう。可恐^{こわ}いな。尊氏、大軍は何の怖れともせぬが、
こういう目に見えぬところの刃には心も胸^{すく}む。何でわしにさまで
な恨みがあるのか、介よ、やさしく訊いてみい。おそらくは娘も

逆上していようほどに、あとでもよい、よくいたわって、訊いて
おけ」

「かしこまりました」

介が、そう答えると、すぐその尾について、小娘が言つたのだった。

「仰せられますな尊氏さま。いたわつてなど、いただきたくはありません」

「ほ。いうたな」

「逆上もしておりますぬ。さむらいの娘です。仕損じた上の覚悟もしております。あなたはよくよく悪運のつよいお方。わたくしは不運なお人たちの味方。それだけのこと。すぐご処分をして

くださいませ」

「よし」

尊氏は、うなずいた。

「望みのようにしてやる。だが、一応の理由を問わねば処分をく
だし難い。まず訊こう。名は」

「なつめ
棗といいます」

「棗か。して生国は」

「しなの
信濃の諏訪です」

「諏訪のはぶり
の祝の一族だの」

「はい。兄の三郎盛高は、鎌倉の亡ぶ日まで、御先代（高時）の
近侍の内の一人でした。そしてわたくしは」

「あ。思い出したわ」

「ご存知でしたか」

「二位殿（高時の妾）の御所に仕えていた者である。……かねて和氏から聞いていた」

いつであつたか。細川和氏の夜話に聞いたことがある。

高時滅亡の直後。

そして鎌倉の焦土に“犬神憑き”という奇病が流行つていた頃のこととか。和氏と弟の師氏は、浜の漁師小屋で、一夜、ふしぎな小娘を見かけたという。

戦後の中またには、亡家の女たちが、みな身を売つたり浅ましい生業のものとに生き喘いでいたが、その小娘は、亡主の二位殿と

高時との仲に生した龜寿丸の行方を独りさがしあるいていた。

——と聞いて、和氏はそのけなげさに感じ、舟を与えて落してやつた。——という巷話を尊氏はいまふと思いだしたのだつた。

「そのときの棗なつめとやらだな。棗か、そちは」

「和氏さまのあのときのお情けは、いまも忘れてはおりませぬ」「ではその折から、兄や父のいる諏訪へ帰つて、亡君のわすれがたみ、龜寿さまのおそばに、再び仕えていたわけだの」

「はい。兄の三郎盛高は、あの日、龜寿さまを背に負うて、信濃へ落ちておりました」

「むむ。さすが北条遺臣の中には良い武士はあつたのだな。さきごろ、信濃北越に大兵をおこし、わずか二十日の間でしかなかつ

たが、一時にせよこの鎌倉の府を奪回した先代軍の大将は——その亀寿さまが名をかえた——北条時行だったのであつた』

「そうです。……足利直義どの以下を追い落し、ふたたび、亀寿さまをいただいて、この鎌倉へ入ったときの、一族方のよろこびは、ことばにも言いつくせません。けれどそれもわずか二十日、たちまち、京からあなた御自身が加勢に来て、あわれ私たちの夢は、二十日先代と、世の人が笑うほど、つかの間に、みじんとなつてしましました』

「ぜひもない。なべて、弱いものは、亡ぶしかない世の中だ』

「いいえ』

と、棗はするどく首を振つた。解け落ちた頭巾の下も無造作な

つかね髪にすぎず、紅白粉も知らない顔はただ一途いちばで異様な若さだけに研とがれていた。

「おことばですが、ほんとの人らしい人は、弱い群れの中にこそ大勢います。弱いながら人の美しさを持つて必死に生きているものを、そんな者は亡んでしまえとは、あなたらしい言い草です。

だから、わ、わたくしは」

ふと、嗚咽おえつになりかけた。唇をむすぶ。キラと目だけで尊氏を射、そして、涙をこらえてから、なお次をいおうと体じゅうの敵意を少しも解いていない。

尊氏は、じつと、見すえた。男にもこれほどの者は少ない。女である。しかも小娘だ。時代の風雲が作つた荒磯の奇形な姫小松

の一つともいうべきだろうか。

尊氏は、ふと、からかい気味に、

「だから、どうなのだ？」

と、反問すると、なつめ棗は、血ぶくろを切られたようにばツと答え
た。

「あなたを殺してやりたいと思つたのです！」

「なんで」

「あなたは強い」

「それだけか」

「それだけではありません。あなたは悪人だ。先には、ご恩顧あ
る北条家を裏切り、今まで、朝臣の身で朝敵に立っている」

「はははは」

尊氏は笑つた。だが、どこか空虚うつろをおおいえない笑いでもあつた。

ふと、朝早い寒雀のさえずりが耳につく。

尊氏は三名をそこへおいたまま黙つて廊へ出て行つた。まもなくまた、ここへ戻つてきた彼は、衣服もかえ、洗顔や髪の手入れもすましていた。そして、

「介。
……
袈裟けさを」

と求め、その袈裟を掛け、手に数珠すずを持つてから、介と頼春へ、こういいつけた。

「なつめ棗なつめの処置は、そちたち二人へ預けておこう。あわれな者だ。酷むご

くはするな

「はつ」

しかし、二人は当惑顔を見あわせた。小娘とはいえ尋常な不敵さではない。もし逃げでもしたらどうしようかという慎れである。で、そのへんのお指図を仰ぎたいと重ねていうと、尊氏は事もなげに笑い捨てた。

「たまたま、わしの室へ舞い込んだ小鳥のようなものだ。逃げたいなら元の野へ放してやれ。居たいなら幾日でもここへおいてやれ。ま、遊ばせておけばよい」

ゆるい、しかし大きな跔音は、もう本堂のほうへ通う暗い廊を踏んで遠退いていた。例の勤行とおのの時間なのである。まだ夜の

ような冬の朝だが、彼はここに屏居いらい、朝々のそれを欠かしたことはない。

みずから壇の燈明とうみょうをとぼし、香こうを拈ねんじ、経文一巻をよみあげる。そのあとも、氷のような床ゆかの冷えもわすれきつて禪那ぜんなの默想をつづけるのだった。この修行は彼としてはすでに久しいもので、いま始まつたことでもない。師の疎石夢窓国師そせきの許へは、在京中にも折あるごとに参さんじていたし、その師を都へ迎えたのも彼であつた。また、後醍醐との禅縁をむすぶにいたらしめた蔭にも彼のすすめがあつた。

ただにそればかりでなく、後醍醐と尊氏とのあいだには、疏そつう通微妙みみような間に、禅の眼があつた。どつちも、禅の人である。そ

の観見かんけんをとおして互いの人間はかを量りあつてゐるところがなくもない。禅は何らの扮飾も見ない。直指人心じきしだ。赤裸と赤裸だ。いやその赤裸すら禅はないのだ。しかも機應自由の中に世を見つくす、世を生きぬく。そうして今という大地を舞台にこの両者は禅と禅とのたたかいを無意識に意中でしていたともいえないことはない。

「……殿」

誰か、後ろでよんでいた。

われにかえると、尊氏の耳にも遠い所の貝の音かいねが聞えていた。
直義ただよしの軍勢が、今朝、由比ヶ浜から西へ立つはずである。そ
れだな、とすぐ覚る。

「介か。……何事だ」

「はつ。ただいま山門まで、仁木殿が、出陣のごあいさつまでに、と申しまいて」

「見えたのか」

「はい」

「あいさつだけを受けておけ。屏居へいきよの身だ。会えしゃく釈におよばん」

「かしこまりました」

退さがる。

まもなく、また来て。

石堂父子がお別れに参りましたと告げ。つづいては、畠山左京、
今川修理亮しゆりのすけ、小山の判官、武田甲斐、そのほか幾十将が、出陣

のいとま乞いにと訪れたが、尊氏はそのたれへも会わなかつた。

そして昼はまた、机によつて、独り読書に耽つていたが、なに思い出したか、急に右馬介を呼びたてていた。

「介か。もそつと、ずっと前へすすめ。急にそちならではの用事ができた」

「は、何事で」

「極秘のこと、書状にしては万一がおぞれられる。しかしそちならば年来の馴染みだ。先の道誉も疑うまい」

「お使いでござりますな」

「そうだ。直義の軍勢は今朝立つたが、佐々木道誉らの先鋒は、すでに鎌倉を立つておる。——その佐々木の陣へ、秘命をつたえ

に行つて欲しいのだが」

「おやすいこと、さつそくにも」

「いや、やさしくない。味方のたれ一人にも知られてはまずいのだ。行く行く味方の陣地を通らねばならんが、そちの顔は余りにも味方には知れすぎておる」

「お案じなされますな。それほどの御秘命なら、頭を剃りこぼち、寺の備えにある笠ころも、法衣こうもを着てまいります」

「俄か坊主か。それやよからう。道誉しきじかに会うて、云々しかじか、尊氏の意中をかく申せ」——と、その云々しかじかの内容を小声で彼にささやいたが、また一考して、

「いやあの疑いぶかい道誉ではあるな。そちの使いでも、言葉だ

けではなお、これほど大事、なかなか信じぬかもしけぬ」

と、机の上の禅書に、目をおとしていたが、やがて朱筆をとつて、その禅書の文字の諸所に、朱点を打つたり、棒を引いたり、また欄外に書き入れするなど、苦吟、長いことかかって、

「これでよい」

と、やつと筆をおいた。朱しゆをたどれば、いわゆる「暗文」をなすのであつた。

「介。すけこれならば僧侶が持つてもふしげはない。また他人が見ても解げどく読あわはできぬ。併せて、これを道誓へ渡せ」

「こころえました。ではおあずかりしてまいりまする」

「ときには」

と、尊氏はことばをかえて。

「昨夜の小娘なつめ
棗なづめと申したな——あの小むすめはどうしておる
な」

「一室にふさぎなづめ」んでおりまする「

「朝あさがて餉がいは」

「与えました」

「逃げもせぬのか」

「は。朝餉を喰べたあとも、釜屋部屋の片すみに坐つたまま、じ
つと考へこんでいるのみで、べつに泣いてもおりませぬ。何か、
ご处置のことでも」

「いやべつに」

「では、身の支度もござりますので、このままおいとまを」

「待て待て」

「は」

「尊氏はつつしみの身、かかることを命じた者は、尊氏ではないぞ。裏山の網引き地蔵が命じるのだ。たとえ途中で直義ただよしの陣に行き会い、直義と出会うても申すなよ、道誉の件は」「申すことではございませぬ」

右馬介は退がつて、こつそり一と間のうちで頭をまろめ、法衣、
頭陀袋ずだぶくろの雲水姿うんすいすがたになりました。

同僚の頼春は、それを見て驚いた。しかしその頼春にさえ、介は、仔細を打ちあけなかつた。そしてただ、

「どうだこの姿、お地蔵そつくりだろう。じつは裏山の網引き地蔵尊のお使いで急に西の旅へ立つ。頬春どの留守をたのむぞ。わけてあの小娘に油断するな」

とばかり、冗談に言いまぎらわし、たそがれの山門から飄ひようとし
て飛び出て行つた。

門

官軍は、十一月の二十五日、三河の矢矧やはぎまで来て、はじめて足利勢の抵抗をうけた。

海道の合戦は、この日に始まり、交戦三日後には早やそこの矢や

矧川はぎも官軍二万の後方しりえにおかれていた。そして序戦にやぶれ去つた足利方の先鋒せんぽう高ノ師泰もうやすは、鷺坂さぎさか（遠州見附の北）までなだれ退いて、

「残念だが、味方の来援を待つしかない」

とし、初めからおおうべからざる敗勢だつた。

師泰らが、無念がつたのも、むりではない。彼らは、すでに当

初、

「矢矧川から西へは一歩も進んではならぬ」

という軍命令の下におかれていたのである。当然、こんな制約下では士氣もあがらず、積極的な作戦もそれなかつたにちがいない。——そのため、まもなく仁木、細川、今川、吉良などの味方

を加えるには加えたが、鷺坂のふせぎもならず、またぞろ、駿州の手越河原まで敗退するの余儀ない破目になつてしまつた。

官軍は強かつた。

わけて新田義貞の采配振りも、かつての鎌倉入りの日以上な冴えで、その用兵ぶりなど、さすがと思われるものがある。

加うるに、

王軍

の威光もあつた。なんといつても錦の旗には人心がひかれる。多くの犠牲を捨てながらも、兵数は逆にふくれあがつていた。土地土地の土豪の参加、降参兵の投入。勝敗の帰趨はもう、それだけでも官軍強し、と誰の目にもトしうるものがあつたのだ。

一方。

鎌倉をややおくれて出た足利直義の本軍は、手越で味方の退却とひとつになつた。ほとんど全兵力の足利勢がここに結集したわけである。直義はすぐ布陣を立て直し、士気をはげまし、「もしここでもやぶれたら、われらの途は死しかないぞ。万事は休む」

と、みずから指揮の陣頭に立つた。——宿敵義貞と一騎打ちの覚悟であった。

激戦幾昼夜。

しかしここでも一戦ごとに、足利勢は敗色を否みようなくしていた。その上にもある。突如、

「佐々木道誉の一軍が、義貞へ降参をちかつて寝返った」という驚くべき声が陣中を騒がせはじめた。

「よもや?」

直義はなお信じかね、また、とくに、道誉とは昵懇な高ノ師直なども、

「そんなばかな。おそらく、それは敵方の流言だらう」

と、頑強に否定していた。けれど彼の信念も半刻とは持たなかつた。道誉が守備していた上流から押し渡つた官軍の強力な大部隊が、夜のうちに早くも味方の後方にまわつて、直義の退路を断たにかかっているとすぐ分つた。

「すわ!」

と、ここに暁の総なだれをおこし、その日から翌日へかけ、海道は敗走の足利兵がひきもきらす、直義はやがて、箱根の水みずのみ飲（三島口の山中）に拠つて、味方をまとめていると聞えた。

このとき。もし官軍が急追さらに急追撃を加えていたら、直義は危なかつたかもしれない、鎌倉も一拳に義貞の馬蹄ばついの下であつたかもしれない。だが官軍も連日の戦いで疲れていた。それに心も驕おごつていたか、義貞はつい国府の三島に馬を駐めて数日は凱歌の快に酔つてしまつた。

どんどん、どん……

さつきから山門の外を烈しく叩いている者がある。朝だが、ま

だ星があつて、淨光明寺の内はまつ暗だつた。

だが、尊氏はすでに起床していた。いつものとおり勤行の座ざにすわるためにである。かじかむ手、白い息、みずから灯す燈とも明うみょうの虹の中に彼はふと耳をすまして、頬春頬春、と二た声ばかり呼んだ。

すぐ庫裡くりのほうから跫音たすきがとんでも来る。近習の頬春であつた。

金屋働きの襷たすきを解いて。

「殿。何ぞお召で」

「お」

と言つて、尊氏はまた、遠い所の音を待つように面おもてを澄ました。
「頬春。外は風だな。聞えなかつたか?」

「はて。何かお耳に」

「しきりに山門を打叩く者があつた。風の音とも思われぬ
「それはどうも。……竈かまどに火をたきつけておりましたので、つい、
うかとしておりました。ことによつたら、お待ちかねの右馬介が
立帰つてまいつたのかもしれませんな」

「いやいや、一両人でない、馬のいななきもしたようだつた。う
かと門を開けず、まず何者かをたしかめて來い」

頼春はかしこまつて、すぐ外へ駆けだして行つた。

そのとき、山門の外の者は、あきらめたのか、鳴りをひそめて
いた。が、なるほど少なからぬ人馬が騒めている様子だつた。

頼春は、太刀の鯉口をかたくつかんだ。武者の習性といつてい

い。すぐ不測な敵の襲来が胸をつきぬけていたのである。そこで彼はいわれたとおり、門扉もんびのかんぬきもそのままに、まず何者か？ また何の用か？ を大音声でたずねていた。

そしてまもなく。

彼は、門外の者の答えを持つて、もとの本堂へもどつて來た。が、尊氏は、はや勤行ごんぎょうの座について、読経をあげていた。

——その三昧さんまい一念な背を見ると彼はぜひなく遠くにそつと坐つてしまつた。そして機をうかがつていたが、近づいていえる機はなかなかかつた。——誦経ずきようがすむと尊氏は半跏趺坐はんかふざ（片あぐら）のかたちをとり、丹田たんでん（下腹）に印いんをむすび、呼吸をひそめて、いつもの坐禅に入つたまま、またしばらくは他もなく自己

もない“面心面仮”の人そのものになりきつている姿だつたからである。

「…………」

いつか堂の欄間に朝の陽の冽ね返りが映していた。尊氏はやつと、趺坐をかえて、頬春をふりむいた。

「どうした？ 門外のことは」

「お味方の勢にござりました」

「味方」

「は。……戦場より抜けてこれへ急使としておいでなされた下
御所（直義）さまのお旗本、上杉伊豆守重房、須賀左衛門、
そのほか十騎ばかりの」

「ならば門をあけてやれ」

「お目通りへ請じてもよろしゅうございましょうか」
しょう

「む。二人だけを」

「では、すぐこれへ」

頬春は、飛んで戻つた。そして山門をひらくと、
破れ鎧や よろいある
いは乱髪、または負傷ておいの足をひきずるなど、惨たんたる敗戦の泥
土をそのまま身に持つた武士大勢が、ぞろぞろ霜を踏んで境内へ
入つて來た。

尊氏は道服に袈裟けさすがた。

通されて平伏した二人は血泥ちどろもそのままな戦場の身なりである。

尊氏は後ろの頬春へむかつて、

「御壇みだんの御明みあかしを消せ」

と、命じ、さらに、

「堂の四面の扉を閉めろ」

と、先にいいつけた。

それから使者二人の話を聞き、また直義からの書状も見て、さて言つた。

「むむ。いくさは負けか。直義以下そんなにもさんざんにやぶれたのか」

「まことに面目もござりませぬ。矢矧川やはぎがわの一戦を仕損じてからは、海道の要害でも、いたる所でお味方は討ちなされ、あまつさえ、手越河原では佐々木道誉の裏切りなどもあつて、残念至極な

がらいかんともなしがたく」

「そうだろう。——兵数においても味方は敵の四分の一。——初めから負けは分つっていたといえなくもない」

「いやしかし、もし矢矧川より先へは出るなどの制約さえなければ、濃尾のじざむらい地侍、半島のお味方も、呼応こおうして来ましたろうし、また作戦も自由に、よい勝負ができたろうにと、それだけを、みな無念にぞんじております」

「だまれ」

「はつ」

「元々、尊氏は朝廷を敵とする意志でない。さればこそ、恭順の意を表し、ひよう戦は、義貞との対決として、直義以下のそちたちにま

かせたのだ。敗れてからの泣き言などは聞きぐるしいぞ」

「ゆめ、泣き言など申しはしません！」と、上杉伊豆守（重房）は大声で言い返した。これは憲房のりふさの長子である。したがつて、尊氏とも他人ではない。

「……まずはお聞きくださいまし。直義さまはいわずもがな、足利方の諸士、みな名に恥じぬ戦はしたとおもいます。けれど、敵は官軍の名に誇り、いまや三万におよぶ大兵を擁すようすにいたり、お味方はといえば、からくも箱根山中の一墨見る二墨見るにしがみついて、孤軍、必死のふせぎにあたつておりまする」

「わかつた。いま、直義の書状に見るも、その辛さつらのほどはようわかる。……だが、それゆえ、わしに起たてとすすめに来ても、そ

「は無理だろ」

「なぜ、ご無理ですか」

「尊氏は公約しておる。本心、朝敵たるは好まぬところと」

「でも、過ぐる日、朝廷では、尊氏ノ官位ヲ褫奪スチダツ、と世に公布しております」

「仔細ない、仔細ない」

「のみならず、軍状その他、すべて官軍の合言葉は、逆臣尊氏でしかありません」

「それもよし」

「いや殿はそうでも、朝廷方では、殿の恭順など一切みとめてな
どおりません。——ひとたび、官軍がここへ迫らば、たとえ染せんえ

衣剃髪ていはつのお身とおなりであろうとも、何で、仮借かしゃくなどするものですか」

「……」

「申しては憚りながら、大塔ノ宮の仇あだとばかり、ハツ裂きにもいたしかねますまい。さらには、ご舎弟直義ただよしさまをも、お見殺しになさるお腹でございましょうか。いまや箱根の孤墨こゑいには、譜代ふだいの御一族の全生命が、ただ一つのお救いのみを、ひたすら、お待ちしておりますものを」

重房が言い疲れると、代つてまた、須賀左衛門が言つて、尊氏へ迫つた。

じつと、恐い目をしたまま、黙りこくつている尊氏へ。

「何としても、おきき入れかなわぬ上はこれまでのものです。御一門の魁さきがけに、まずわれら両名ここの御堂みどうを拝借して、腹搔ハラハラツ切つて相果てまする」

「…………」

「また直義さまも、孤軍の味方も、箱根の一墨るいを枕に、立ち腹切るか、斬り死にか、いずれともみな最期の途をえらぶでしょう」

「…………」

「ですが、これがわが殿のご誓約であつたでしようか。——そもそも元弘の初め、はじめてわが足利勢が上洛の途中、矢矧やはぎの柳堂において、一族宿老すべての者へ、ご大望を打ちあけられ、一同、源氏重代のみ旗と祖靈のまえで血判をいたしました。よもあれを

お忘れではござりますまい。 いらい拙者どもは、それのみを、ただただ、弓矢の大願とちかい、子を捨て、親の死をも見てきました

「…………」

「しかるに今日、殿には、恭順となを称えて寺を出で給わづ、それもそのお心が、天てん聴ちようにとどいているならまだしものこと、そうでもないのに、ひとり何を守ろうとなさるのか。われら将卒には、得心がゆきません。……孤軍の御舎弟を見殺しにし、お味方すべてをも失つた後に、いつたい何があるのでしよう。……あわれ、三河におわす千寿王さま、みだい所さま、いや足利一類と見なさるる者、ひとりも世には残りますまい」

ことばは、切々^{せつせつ}、ていねいであつても、身はそのまま戦場人の二人だつた。このとき、上杉重房も言つた。

「左衛門ツ。これまでだ。殿はつんぼとみえる。もう申すもせんない。やめろつ、腹切ツてお目にかけるばかりだわ」

「おうつ、御覽^{ごろう}ぜよ殿」

二人は坐り直した。革胴の紐を解いて短刀を左に持つた。——が、尊氏はそれも見ている氣か、なお黙つていた。

しかし、尊氏の蔭に控えていた頼春が、ばつと進み出て二人を止めた。たかぶる声と声の下に三名のからだは一つものに見え、相擁しながら、主君を後ろに、その主君を罵倒し、

「見損つた！ ああ、見損つたおれたち家来も馬鹿だツた」

と、無念泣きに泣き入つてしまつたのであつた。すると尊氏は初めて、

「頼春」

と、重い口をひらき、身に掛けていた袈裟けさを外して、

「袈裟けさ笠ばこへおさめておけ。そしてまず朝飯を食おう。それからすぐ身仕度だ、具足櫃ぐそくびつを取出して來い」

と、いいつけた。何か凜りんとした語氣だつた。そして命じ終るやいな本堂を立つて方丈の方へ行つてしまつた。

「や、や？」

頼春は躊躇いざるように、主君の姿を、廊の外へ追いふためいて。

「殿々とのとの、よろい櫃びつとは、お身仕度とは、ご出馬のご用意にござ

りまするか

「おおよ！」

遠くの房の内ぼうで、尊氏の返辞が、大きく聞えた。

本堂前には大焚火おおたきびが焚かれた。淨光明寺のうちも外もたちまち活氣と人ざわめきの坩堝るつぼと変り、尊氏は、あらためて方丈へ呼びよせた上杉重房と須賀左衛門のふたりへ、

「すぐ行け」

と、何事かを命じていた。

ふたりはすぐ馬にとび乗つて山門を出て行つた。おそらくは鎌倉じゆうを駆けまわり、なお各所の木戸や屋敷には多少残つている留守の将士へ、尊氏の出馬を告げ、

「すぐ御馬前へ集まれ」

と、布令に廻つたものに相違なかろう。

尊氏はそのあとで芋粥いもがゆを三杯も喰べた。出陣には武門しきたりの古式もあるのだが、家族はおらず、時もこんな場合である。

頼春の給仕のみで、すぐ粥腹かゆばら よろいに鎧よろいを着込む。

かつての元弘の年。

はじめて、彼が高時の命で上方へ出陣したときは、父貞氏の喪もに会していた。よくよく、出陣祝いにはめぐまれない巡り合せがつきまとっている。

しかし彼は、こんな形式事を気に病むものではないらしい。粥腹ぬくに温ぬくもつた五体をよろいにつつむと、かえつて、彼本来の面目

とおちつきを持ち、そして、頼春や寺中の家士がそれぞれの腹拵えや身仕度をすますあいだ、独りあぐらをくんでゆつたりと庭の朝霜に対していた。

もちろん心はもう戦場へとんでいよう。自分が駆けつけてゆくまで弟の直義ただよしがよく敵の大軍をささえて生きているかどうか。あれこれ、限りのない懸念も湧いたであろう。

しかも、この敗退の因は、彼にある。尊氏が初めから起たなかつた出ばなの士氣の不振にあつたと言つていい。——その大事な機会を——なぜ彼はわれから恭順をとなえて寺へなど籠こもつていたのか。

後世の史家は、これを尊氏が打つた“賊名のがれの芝居”であ

つたと結論する。

なるほど多分に意識的な計算のあとはある。だが、これが彼の名分だけの擬態であつたとするなら、何もここまで、あぶない橋は渡るまい。足利一門の致命ともなりかねないような最悪の最後まで、じつと、蟄居ちつきよをまもつている愚はしまぐいし、その必要もなかつたのだ。

おもうに。——彼が後醍醐の恩寵おんちようをふかくわすれず、また

朝廷は朝廷としてあがめておきたいと声明していたのも、それは彼の本心で決して偽りではなかつたものと考えられる。けれど、足利一門の滅亡もそのためには捨てて惜しまぬというほどまでには徹底した恭順きょうじやうでもなかつたのである。——そして彼は、朝廷へ

は抗したくないが、対義貞との戦いならば——と、義貞のおびき出しには、むしろ主戦的な構えですらあつたのだつた。

矛盾の兄、と直^{ただよし}義がいつたのも道理であつて、今朝の尊氏はまた、自己のそうした行為のあとを、いさきかも矛盾だつたとはしていないふうだつた。——天も照^{しようらん}覧^{らん}あれ、自分の本心はこうである。にもかかわらず、あくまで朝^{ちようけん}權^{けん}をかさにきた王軍はわがのどくびを締めてくる。坐して待てば死あるのみ。足利一門は地上から消滅する。これは我慢ならない。たとえ朝廷の軍であろうと今は忍べるときではない。

「行くぞ、頼春」

尊氏は、方丈から起つやいな、大きくどなつた。

「それつ、お出ましだぞ」

寺中の将土は、尊氏につづき、一せいに山門の外へ流れ出た。といつてもすべてで四、五十人をこえてはいない。このわざかなるものがじつに尊氏の、天下の分け目をみかどと争う門出の兵力であつたのだ。

つい今朝はまだ、身に袈裟けさをかけていた恭順の人が、具足馬上の人だつた。かぶとは背に負い、鳥帽子だつたので、まだうらうらと冬ふゆ靄もやの高きにはあがつていない太陽が彼の顔をまともから染めていた。そのきらやかなる“矛盾像”を、しかしその自身は決して眩まぶしげになしていなかつた。しかと腹では割りきつている眉だつた。

「頬春、頬春」

「はつ」

「わしの馬の尻について、よく駆けてくる童はだれだ、どこの童わ
らべむしゃ
武者だ」

「ゞ)そんじの棗でゞ)ざいます」

「女か」

「はいっ。先夜の」

「なんであんな者を連れてまいる。追つ返せ」

「ききません。何といつてもきかないのです。けれどあくまで殿
のおん供をして行くのだと」

「修羅また修羅だぞ、行く先は」

「がてん合点なのです、充分に」

「どういう 料りょうけん簡かんだ」

「わかりません、まつたくわからぬ女です。……が、察しまするに、これまで自分が考えていた足利の大殿というものと、目に見た殿とは、まつたくちがつていたと、いたく悔悟かいごねんの念に打たれたものと思われまする」

「ふうむ」

「そのうえ、ここ幾日を共にして、殿のご起居から一切を知るにおよび、いよいよ初めの恨みも畏敬いけいにかわり、いつまでもおそばにいたいと願うたのではありますまい」

「まるで、やんちゃ娘だな、ただならぬ生死のちまたを、なんと

も恐れていぬなどは

「ここを追われても、行く所はないとも言つておりました」
 「それはそうだ。先代軍などは、はや一ト村雨の露とどこかへ消えてしまった。女の兄の諏訪三郎なども生きてはおるまい。ふびん不愍な女」といえば、不愍な女」

「この明け方も、いちどは、おん供などは相ならんと、追つ払つたのでございましたが、どこか近くの農家にでも預け置いてあつたものか、たちまち、小姓具足を身に着け直し、殿が御出門となるやいな、ああしておあとについて来たものにござりまする。お目ざわりなれば、もいちど叱ツて、追い返しましようか」

「いや待て」

尊氏は、振返つて。

「ほツとけ、放ツとけ」

彼の駒足、彼の前後につづく駒足、自然に駒と駒とは勇みを競つて、加速度に流れは早くなつていた。

また、辻々へかかるたび、その参加者も激増していた。——すでに伊豆守重房と須賀左衛門とが、ふれ廻つていたことなので、鎌倉じゅうの留守屋敷は、この朝、その老幼までをあげて身の物ものぐもあわただしく、すべて辻の木戸や浜べ口にむらがり出て、尊氏の駒を迎へ、「——先は知らず、ただ大殿が行く所へ」と、いのちを託していたのだつた。

かくて由比ヶ浜を西へこの一勢が急いだときは、老兵童卒を加

えおよそ六、七百の兵数にはなつていた。

風花
かざはな

時は、真冬だった。諸書に

建武二年

十二月八日

鎌倉をお立出で……

と一致しているから、尊氏の発向は、この日とみてまちがいな

いが、以後の合戦中には、

「タビタビノ氷雨」
ヒヨウウ

とか、

「終夜ノ風」

とかの記録がまま出て来るから、終始、天候はよくなかったようである。

ところで作者わたくしはよくものしり顔に古書の端々を引きあいにもちだすが、これは決して物語の辻褄をあわせるための手段ではない。必要な脚色や小説模様はわたくしもわたくしなりの仕立て方で染め上げてはいるが、素材の史系しけいはどこまで史家の糸で織つて行きたいと思うし、またすこしでも往時おうじの実際を紙背しほいに読む読者の試案にもなろうかと、折にふれお目にかけているにすぎない次第である。

大体、古典の戦記物なる物では、たたかいの奇略、一騎打のさま、筆を惜しまず、つぶさな描写はこころみられているが、これを絵画的でなく、理念でたどると、しよせん現代人にはウ呑みにできかねる。

たとえば、このさいの、

箱根、竹の下合戦

の一条もまたしきりで——両軍の配置、地理、兵数、機動の経路——そして尊氏が断行した兵略の根底など、すべて大切なことはなに一つそれからは知ることができないといつても決して言い過ぎでない。

というようなわけで、ここでもまた、阿蘇家あそ、相馬家の軍忠状

とか、古文書こもんじょの断片とか、古典太平記よりはややましな梅松論などの傍証を綜合して書いてゆくしかないことになる。

と、まず前提して——そしてその推定から尊氏軍の進路を図つてゆくと、彼が酒匂川附近へさしかかった頃には、おそらく、箱根山中にとりかこまれていた弟直義ただよしの孤軍からも、

「ありがたし。これこそ天助てんじょの御到着」

と、直義の口上を持つて、さつそく出迎えの将土がこれへ来合せたことと思われる。

それもあり、また伊豆や海道筋からも味方の相当数が「尊氏出馬」の声から声をつたえ聞いて集まり、須臾にして麾下きかは、数千にのぼっていたろう。軍記調の古典ではすぐこれを十八万騎の二

十万騎のと称するが、せいぜいのところ、じつさいは三、四千騎か。

しかも彼は、このさい、

「直義から迎えによこした武者どもは、ただちにまた、直義の陣所へ返つて、そこのみをかたく守れ」

と、その数百人も、自軍には加えなかつた。

この意外な指令に驚いたのは、細川頼春、上杉重房、須賀左衛門らの左右だけではない。あたりの将土はみな、耳を疑つた顔つきで、

「——では、いったい、孤軍の味方も援けに向わず、この軍はどこへ行くのか?」

と、一せいな怪しみを尊氏へそそぎあつた。

尊氏はしかし何のためらいもなく、それらの一隊は元の箱根路へ返し、自身は自軍だけで、さらに酒匂の岸を上流へ急ぎ出した。

つい言いのこしていることがある。

それはさきに、尊氏の密命をうけて、淨光明寺の門から、旅の一雲水うんすいに化けて、どこへともなく立去つていた侍臣一色右馬介についてであるが。

その右馬介は、尊氏の軍が酒匂さかわの駅に着いた日、

「途中、ご出馬と噂をきき、ここにお待ち申しておりました」と、どこからともなく姿を現わし、彼の前へ来て初めてその破や

れ笠のひもを解いた。

「^{すけ}介か」

待ちかねていた尊氏は人を避けてすぐ彼とふたりだけで駅の伝馬役所の内に入り、しばし密談をかわしていた。

要は、介の報告であつたにちがいない。——報告の内容に尊氏は満足した容子であつた。彼がこれから臨まんとするいちかばちの戦場の賭けは、このときにおいて一^{いっ}そう腹がすわつたものといつていい。

「^{すけ}介。……すでにそちが去つてからまもなく、佐々木道誉の寝がえりと聞えて來た。それ聞いて、ひそかにやつたわと思うていたぞ。そしてまた今、そちのことばでまた一ばいたしかめえた。こ

のうえは、大儀だが、もういちど、あとへ戻つて使いしてくれい」「いざこかは存じませぬが、いとやすいことにござりまする。して次はどこへ」

「直義の陣場へだ」

「こころえまいてござりまする」

「直義一勢はいま、箱根路の三島口、水みずのみ飲のみという部落の前に壕ほりを切つて、一族死に物狂いでふせぎ戦つていると申す。……我慢はここわざかなまだ。死ぬなと申せ」

「きつとおつたえ申します。いやおん兄君の御出馬とお聞きあれば、それだけでも勇気は百倍。およろこび目にみえまする。そのほか何ぞおつたえは」

「書面はいらん。その口だけで充分だろう。序戦、そちが遠くへ策に出ていたなどは、直義もまた、何も知つていないので。そこを打明けて、よう話せ」

「（ご）遠謀には、さぞお驚きなされましようず。では」

「待て待て。いま、そちから敵状の仔細あらまし聞きとつたが、もいちど、念のため、覚えをしておきたい」と、尊氏はよろいの袖から小さい綴物とじもの^つと矢立の筆をとり出した。そしてそれへ地形の図を描き、また介の調べによる官軍方の陣所人員その他の符号をざつと誌けて行つた。

「ま、こんなことでいい。いくら確かにそちが見ておいたことで、も、軍は生き物だ、いくらでも動く。その動きを見こして把握せ

ねばならぬ

「しかし、三島あたりの町沙汰でも、義貞はじめ、官軍の公卿大将輩ぱら、みな勝ちに酔つて、はや凱旋がいせん凱歌がいかの有頂天うちょうてんとあるのは事実にござりまする」

「そこがありがたい。……ありがたい無形な味方と申さずばなるまい。——では右馬介」

「は。おいとまを」

「裏から出て行けよ」

「そのつもりで笠、杖なども離しておりません。さらば御武運を」
介は、一礼して、伝馬役所の裏から誰にもその面を知られず立去つてしまつた。じつにこの一布石があつたればこそ、尊氏も自

信をもつて、直義が迎えの一隊も返し、自軍のみで目ざす山波深くへ進んで行つたものであつたろう。

いつたい、どこへ。

歩いている將士すら軍の方向は知らなかつた。が、翌日の彼らはもう酒匂さかわの上流を折れて足柄あしがらやま山にかかるつてゐるのを知つていた。——やがて地蔵堂を経へ、金時きんとき山やまの北を峠越えに出ると、南へのぞむすぐ目のさきに、

竹の下

さらに三島まで一路降くだり坂さかで、その彼方には駿河湾の冬の海が黒いといつていいほど深い碧あおをしている。

しかし、そこまでを見とどけたのは、先駆の物見隊だけで、尊

氏の本隊は、なお地蔵堂のあたりにとどまり、吹きすさぶ風花
まじりの山嵐やまおろしの下にその晩は夜営していた。

地名、竹の下とは“岳だけの下”の意味か。——物見の言によれば、
そのへんから足柄明神へかけて、およそ七、八千とみられる敵が
諸所に団々たる大焚火おおたきびをあげて温ぬくもつてているという。——いま
は疑いの余地もない。大将尊氏の胸にあるものは、その搦め手の
敵軍を、不意に、真上まうえから撃うち下ろすにあつたにちがいない。

「旗は」

と、尊氏は物見の者に、彼らが眼で知りえたかぎりの旗じるし
など聞きとつていた。

それによつて、敵の主陣は、義貞の弟、脇屋義助よしそけ、義治よしはると

わかつた。

また 中書ちゅうしょノ宮尊良親王以下、八人の公卿大将がそのうえにいることもわかつた。

「よしよし、ほかの大名旗本勢など、いちいち知る要もない。ま
ずは腰糧こしがてを食うてよく寝ておけ」

と、これは物見隊へだけでなく、全軍の將士へも同様な令でつ
たえられた。

けれど腰兵糧は氷を噛むようなものだし、火の氣はもちろんゆ
るされず、その寒烈は骨を刺す。が、それでもいつか横たわると
三千の兵は死んだように眠っていた。眠っているまが人間の本望
を充たしている最良の時もあるかのように。

尊氏も一とき眠つた。

そのほかは地蔵堂の縁をめぐつて思い思いな寝相をえがいていたが、折々には、むくと誰かが首をもたげて耳をたてた。そしてまた眠りにおちた。

こうして寅の刻とらのこく（午前四時）をやや過ぎたかの頃になると、初めて、地蔵堂附近は騒然となり、人も馬もふるい起きて、やがて一せいに峠の上へ出て行つた。——そこに立つと、竹の下はすぐ眼の下にあり、敵の所在は燃え残りの火の氣で知れる。尊氏は歯の根のふるえを禁じえなかつた。心のなかでさし上げた大石を一気に落すような思いで言つた。

「あの真ん中へ突つ込め」

そしてまた、

「坂下へ廻るな。いつも敵の上に足場をとつていためつけろ」と、追っかけに注意した。

まだ夜は明けていず、足もとすらもまつ暗なのだ。——敵の驚きはいうまでもない。寝耳に水の奇襲だつた。脇屋義助の本陣のあたりが、須臾しゆゆのまにぱつと赤い火光に染まつてみえる。すでに火かが放けられたものであろう。

また。近くの足柄明神もすぐ黒煙にくるまれていた。中書ノ宮をはじめ長袖の公卿大将ばらは、うろたえに右往左往し、打物すら持ち忘れてただ逃げ惑つた。そして手もなく討たれてゆく将も二、三にはどどまらなかつた。

何か、地異天変のような錯覚^{さつかく}にもとらわれる。

七千人の旗營^{きえい}が一瞬にどうかしてしまつたとしか見えない。——どろどろと熔岩^{ようがん}のような黒いものが、山の中腹から逃げまろび重なりあつて、はるか麓^{ふもと}まで押し流れて行く。すべてそれは、人間と馬と、また新田勢や中書軍の旗差物などだつた。

「まずかつた」

脇屋義助。兄の義貞にまさるこの勇将は、どこかで地んだんじだ踏んだことだろう。

「これというのも、足手まといな中書ノ宮や、公卿大将の大勢を、上に奉じていたためだ」

と、くやしがつたにもちがいない。

およそ兵略として、夜の陣を、山腹の急坂において眠るなどは、法外な無知である。——と知りつつも、つい竹の下にとどまつたのは、足柄明神や民家の屋根もあるので、宮以下の陣座の便宜につい惹ひかれての処置だつた。

「もう追いつかぬ！」

彼の号令も、今は一兵の足さえ踏みとどまらせん力にはならなかつた。——敵は、金時山を負つて、逆落しに、猛火は山風を孕（はら）んで、これも味方のあたまからおおいかぶさつてくる。そしてひとたび浮き足立つた自失のなだれは加速度を加えるばかりで、その群影は——御殿場——御坂——佐野ヶ原——黄瀬川べりと、止まるところを知らなかつた。

しかも 雜兵輩ぞうひょうばい は、こんな潰滅状態のなかにありながらも、「氣をつけろ、新手の敵は足利の宰相らしいぞ」

と、はや尊氏の出現を知つて、尊氏の名を口から口へつたえていた。そしてこれも予想になかつた震しんかん 撼かん をよびおこし全官軍の大驚愕だいきようがく となつた。

時に、当の本軍たる新田義貞はどこに陣していたかといえば、この日の前日も箱根山中の一要害——足利直義の孤軍を——まだ攻めあぐねていたのであり、この明け方の、

尊氏来る

の声には、ここでもまた、竹の下と同様な寝耳に水の驚きと共に、総退却を余儀なくしていた。

なぜならば、竹の下や足柄明神から崩れ立つた兵は、みな渓流三島口へ落ちかたまり、その三島口は、義貞の本軍からもただ一路の後方陣地だつたからで、

「なに、尊氏の軍が」

と、ここでは、その恐慌状態を背後からうけたかたちだつたのである。

義貞もあわてた。

足柄峠を突破して、尊氏自身が、背後へ深く廻つてくるなどは、よくよく捨て身の戦法に出て来たものにちがいない。——おそらくは精兵をすぐり、決死の兵でもあるだろう。恐るべし、決死の軍には当るべからず、として彼は急に、

「全軍、退け」

と令して、その大軍を、徐々に、駿豆ざかいの藍沢方面へ移しだしたものだった。

すぐ。前面にあつた足利直義らの孤軍は一せいに攻撃に出てきた。また新田方のうちからも突如、寝返り軍が行動を起すなど、みるまに義貞の本軍はズタズタに乱れ、その陣地を変えさえおぼつかなく見えてきた。

果てなく戦場の地域はひろがつていた。函南のかんなみの裾野から足柄、愛鷹のふもとへかけ十里は人馬のどどろきといつてよい。

ひようひようとこの日は風があつて白い風花が旗や剣槍を吹き

かすめた。義貞はひとまず三島ノ国府に兵をまとめて陣容をたて直すつもりで藍沢あいざわケ原を駆けていたが、幾度となく、

「裏切りとは何者の裏切りだ。一体、誰のどこの軍が、寝返つたのか」

と、前後の騎影に訊いていた。しかし皆かいもく目それの真相はわかつて来ない。そしてただ味方のどの方面を見わたしても、西へ南へ、なだれうごいているか、支離滅裂な雄おたけびのうちに、しかもまた、あらぬ地点に敵が見えたりもするのであつた。

「船田、船田。あれなる小高い岡へ旗立て、義貞ここにありと味方へ知らせろ」

そこは三島に近く、西に黄瀬川をのぞんだ土狩とかりの岡だつた。

船田ノ入道はまつさきに登つて行つて一引両の幟のぼりを立て、また螺手らしゆに命じて貝を吹かせた。つづいては堀口、世良田、里見などの一族。さらに義貞のそばを杉原下総、高田義遠、篠塚伊賀守、川波新左など——新田十六騎——の旗本がとりまいていた。けれど、味方をよび集めるための旗陣きじんと貝の音は、かえつて敵を求めてしまつた。

黄瀬川の向うには、足柄峠から脇屋義助と中書軍とを追いくだしてきた尊氏の麾下きかがまつ黒にみえ、またうしろからは、直義の兵馬が追ツかけて来、岡は孤立に陥りかけた。

もちろん、空むなしく待つてはいない。河原の低地、背面の平野ではすでに激戦を展じている。

烈風なので、矢は用をなさず、どこでも騎馬歩兵の接戦だつた。そのうち国府（三島）方面から黒煙がのぼりはじめた。官軍につての重要な本営地である。義貞は愕然とした。

「や、や。退路を断つた敵があるぞ！」

もはや三島の内からも寝返り軍の出たことは疑つてみる余地がなかつた。いや今暁来の裏切り者が、誰と誰であつたかも今はほぼわかつて來た。

四十人、五十人と、組々で敵へ降参してゆく小族などは物の数でもなかつたが、千、二千という兵をつれて敵へ寝返ツた大物もある。そのうちの優なる者は、

筑紫の大友左近将監

出雲の塩治判官高貞

えんや

近江の佐々木道誉

などであると聞えた。

「えつ、道誉が？」

と、それには義貞も啞然とした。——その道誉は、つい先ごろには足利方として矢矧やはぎの陣にいたのであるが、手越河原の対陣のさい彼から款かんを通つうじて来たので、渡りに舟と味方に用い、以来、後ろ備えにしておいたものだつた。

「さては」

と、今にして思い当らぬわけにゆかない。

出雲の塩治えんやは元々佐々木一族だし、筑紫の大友は、初めから信

じ難いふしがあるので後陣においた者である。ここで彼はハツと
した。あるいは、道誉の降参は初めから尊氏との黙契もつけいで行われ
た二度のとんぼ返りではなかつたのか、と。

「しまつた！」

何処かで、あの薄らあばたが——そのあばたをみな笑クボにし
ているような尊氏の顔が——義貞の瞼に、ふと見えた。

風花はひる頃からほんとの雪に変り出していた。

その雪雲の下に、炎々と焼けつつある国府（三島）の町屋根が
望まれる。

新田軍は三島を捨てた。ぜひなく、愛鷹山あしたかやまの根に沿つた西へ
の道を、幾段にもなつて、落ちて行つた。敵に追われ、雪風に捲

かれながら、逃げなだれてゆく人馬の影が日没まで絶えなかつた。

「中書ちゅうしょ」の宮はどうなされたか。宮以下の公卿軍は」

こう訊きながら義貞はひと息ついた。鈴川の近くであつた。

旗本十六騎のうち、そばにいたのは葦堀あしほり七郎、篠塚伊賀守、川波新左などの四、五名にすぎず、兵もせいぜい二、三百しかみえなかつた。

「いや、もう先です」と、旗本の中の一人がいう。

「——宮の軍は、はや富士川まで落ちて行つたと聞きまする。しかし二条の中将為冬卿はお討死とか」

「二条殿は死んだか」

「ほか二、三の公卿大将も討たれ、その手にあつた諸家の兵など、

どうなつたのか、ほとんど確かにわかりません」

「義助（脇屋）はまだ後だな」

「（ご）舍弟様の一軍は、黄瀬川の上を取つて、烈しく敵をくいとめ、船田ノ入道なども、必死な殿（しんがり）軍をつとめておりますが……」

まもなく鳥山修理亮（しゆりのすけ）、大井田式部があとを慕つて追ツついて来る。また一ノ井兵部、厚東駿河守、堀口美濃守貞満も、満身、朱（あけ）の姿で、

「おお殿」

と、残念そうに、みな義貞の駒のまわりに寄つて來た。

が、なお義助が見えないので、

「いかにせし」

と、義貞は気が気でない。けれどその義助もやがて見え、わが子、義治よしはるを連れていた。

この式部大輔義治たゆうは、まだ十四の年少武者だつた。父義助は、この子を乱軍中から救い出すためにずいぶん苦労をしたらしい。父子のすがたにその難戦苦戦を通して來た状がそのまま出ていた。しかし脇屋義助は、ここへ來るとすぐ兄へ忠告した。

「馬もうごかず、お疲れでもありましようが、ここで夜は過ごせませぬ。どうでも夜のうちに富士川を越え渡らねば危険です」

「大敗だなあ」

と、義貞は浩嘆こうたんして。

「きのうまでのあの大勝が、こんな一敗地に終ろうとは」

「無念です。まつたく尊氏めにしてやられました。——大友、塩

治、佐々木などの寝返りさえなくば」

「それはやはり尊氏の計だつたのか」

「——としか考えられません。思うに、這奴しやつが蟄居ちつきよの入寺にゆうじなど事々しく世にふれていたのからして、こちらに油断を囁ませる策であつたのでしょう。……そして道譽という化け物を巧みにつかい、その道譽をして、官軍中の諸将へ密々後日の恩賞を約束させ、今晩、一ときの返り忠に出たものと思われまする」

「むむ。……」

義貞のせつなの眉を、このとき、誰も正視にたえなかつた。

「よしつ、忘れまいぞ。いつかは尊氏にこの逆の目を見せずにお

こうや。が、ぜひもない。今は無念をのんで退いておこう」

全軍、富士川を雪の夜半にやつと渡つた。

一方。

足利勢は三島を中心夜つびての凱歌だつた。降りやまぬ雪の下にはまだ炎々と民家が焼けているのだが消し手はなく、ただ戦勝の驕りおごに燃えた顔の狂奔と、降参兵の大群が、諸所に茫然と給与の粥かゆを待つてたたずんでいるほか、折々、前線からの騎馬が泥土を飛ばしてその夜の本陣の森へ入つて行くのが見られるだけで、いつか十四日の朝は来ていた。

尊氏と直義ただよしとは、きのうこの國府の館たちで落ち合い、

「いまは何もいえぬ」

と、いう尊氏に、

「私もただ胸がいっぱい」

と、直義も眼をうるませ、二人はあとの陣務に追われていた。

その降将のうちでも、とくべつに尊氏が床几しょうぎを与えて、やあと、親しげに迎えたのは、かの佐々木道誉であつた。

「道誉。健在でまずめでたいの」

「おかげで。ははは」

「いやこのたびの勝ち軍かいくさは御辺の功を第一と思う。ご苦労だつた」

「お賞めにあずかつて身の面目でおざる。したが、およそ道誉のいたしたことは、武門の名譽とはうらはらなもの。おかげで道誉

は海内外一の寝返り上手という名を博したことになり申そうか。

いや、自嘲にたえん」

「人には人の才能がある。それも器量の一つ。道誉にあらずんば
なしえない」

「お賞めやら？ お貶しやら？ とにかく道誉を知る者はあなた
でしかない。同時に、あなたを知る者もそれがしだと自負してお
る。そのためや、分の悪い役割とは思いながらも唯々として、
御計略の道具になつた」

「珍重 珍重

と、尊氏も戯れて、

「この後も使うぞ」

と、顔じゅうのあばたを笑クボにして言つた。

入れ代りに、陣幕とばりを揚げて、直義が顔を見せた。明け方のつか
の間まだつたろうが、よく眠つた朝の顔だつた。

「兄あに者じゃ」

と、ついに出たことばを、言いあらためて。

「兄上。——一夜考えておく——との昨夜の御意ぎよいでしたが

「む。この後の方針か」

「されば。いちど鎌倉へひきあげて地固めするか。または、この
まま義貞を追つて都へ迫るかの、二途ですが」

「きめたよ、直義」

「どう?」

「このまま行こう」

「即日?」

「今日にも」

「こころえました」

「鎌倉などは欲しいものにくれてやれ。直義、中原ちゅうげんとは真ん

中のことだ」

「そこまでのお腹をうかがえればわれら死んでも本望です」

「ばかを申せ。死ぬに苦労はいらん。これからこそ実みのある苦労を尊氏はする気なのだ」

「朝敵とよばれても」

「照覽しょうらん あれ、人はいおうと、天は知るだろう。尊氏はただ正

しいと信じる道を行くだけだ。……いやこんなはなしは後日後日。
直義、すぐ前進の貝を吹かせろ」

「お待ち下さい。さつき師直が、降参の将の簿ぼを作つて、お目に
かけるといつておりましたから」

直義はあわてて出て行つた。まもなく発向の貝が鳴つた。この
朝の足利勢は、一夜に万を超える兵力となつていた。

ほとんど抵抗らしい抵抗もみず、以後の足利勢は、行く先々で
いよいよその兵力を強大にするばかりであつた。

当日、加島に夜營

翌朝、富士川渡河

次の日、興津

やがて手越、大井川と一路東海の道は足利色に風靡ふうびされて行つた。

しかしその間、大雨の一昼夜もあつたので、尊氏は新田の敗残勢力を叩くよりも、これ以上、自軍を疲れさせまいと心していた。わけて海道一の大河、天龍川を越えるには、しよせん一ト難儀はとしていたのである。

ところが、ほどなく遠州に入りその天龍川を前に眺めわたすと、濁流満々ながら対岸にいたるまで堅固な舟橋がえんえんとなお無事に架かかっていたので、

「これはどうだ！」

と、軍勢は笑いどよめいた。

「新田勢のあわてぶりよ。逃げるに急であとの舟橋を断り落して行く大事な退軍の常法すらも忘れている——」と。

が、尊氏は、

「はて？ うかと渡るな」

と、全軍を待たせた。

そして附近の川小屋から土地ところの者数名を狩り出し、何で舟橋が無事にあつたかを直々じきじき_{ただ}に質した。

すると彼らは。——これはつい四、五日前のこと。新田勢がさんざんな敗けまいくさ軍かのでいでこの地へかかり、俄に村々へ合力を命じ、そのせつ架けおかれたもの、と前提して。

「まる二日二た晩は、馬やら兵が西へ西へ越え行かれましたが、

てまえどもはまたこれへ呼びつけられ、やい聞け、われらの勢せいが渡りきつたら、すぐさま舟橋を断り放ち、一その舟も附近に置いてはならんぞとの、ご嚴命でござりまする」

「む、新田がの」

「いえ、仰おつしやつたのは、ご幕下ばつかのお方で……。すると、おん大将の新田殿は、それを聞いて橋の途中からお戻りになり、たいそうご機嫌のわるいお声で、お侍たちを叱しかつておいでられました」「叱しかつた？」

「はい。おことばには、敗軍のわれらさえ架けえた橋を、断り落としたとて何になろう。およそ、大敵に向う戦の始めなら、舟橋などは焼いて、背水はいすいの陣を布くという兵略もあるが、敗戦して落

ちてゆく今、敵にもやすやすかけ得られるものを毀こわして行つても益はない。むしろ義貞の小心を見すかされよう。狼狽したといわれても末代までの恥だ。そつくり残しておけ、との御意。わたくしどもへも、しかとお命じで、そのままお立ち去りあつたような次第にござりまする」

「そうか。……川守どもに褒美をやれ」

そして、尊氏はそれから言つた。感に打たれている麾下きかの将士を見て。

「さすがは義貞よ。逃げつつも見事な一矢いつしのあいさつを残して行つた。武士はこうありたいもの。彼にかかる鎌倉武士の余香があろうとは思わなかつた。尊氏もここでは見事彼に負けたぞ。好敵

手、好敵手。いちばい心をひきしめようわい」

途中、さらに軍の強化に努めながら、やがて足利軍は、近江へ達した。近江柏原に軍營を張り、年の終りをここにみた。
——すでに十二月二十九日であつた。

内裏炎上

何を感じるのだろう、瘦せ犬すらも目を光らしてどこかに異常なふうである。ちまたの人間はいうまでもない、都じゆうが日ごろの姿一切を喪失し——春を待つ——そんな年暮景色など見たくとも見られなかつた。

敗軍の新田勢が洛内にぞろぞろたどりついて来たのが二十五、六日のこと。それからは一日たりと兵馬の東奔西走を見ぬ日はない。足利軍が近江まで迫つたことはたれもみな知つてゐる。けれど洛民の恐怖はそれだけのものでなかつた。べつに兵庫、摂津方面からも西国の反官軍が尊氏に呼応こおうし、淀、山崎の口へ攻めのぼつて来るとさかんな風説だつたのもある。

「西も、東もか」

「都はどうなる?」

「どうなるものか、都はふくろの中の何とやらじや」

「いや、わしらはよ」

「こうなつたら、どうしようもあろうか。命一つをかかえて、戦

のやむまで、どこぞへじつとかがんでいるほか思案もないわ」

さるほどに――

と、古典はいとかんたんに書いている。

新玉の年立ち帰れども

内裏には朝拝もなし

節会もおこなはれず

京、白河には

家をこぼちて堀に入れ

財を積んでは持ち運ぶ……

庶民は「すわ」とまたもや山野へ逃げ込む騒ぎだったのだ。し

かも暮正月を跨いでである。なんの因果でと、嘆きの声は枯れ野

や冬山に充ち充ちても、血まなこな武者ばらには、何と無用な生き物の多さよと、かえりみられもしないのか。荷を負つたり手に手をつないで行く老幼が馬蹄にかけられて転けまろんでいるなどは、めずらしくない巷ちまたであつた。

明けた年は、建武三年。——だがそれは後世には、北朝側の年号とされ、後には同じ年を、延えん元げん元年とも併称された。

だからその意味で、南北二朝に別れた最初の年だ。
その年の始め。

一月元旦いちがつというのに瀬田ノ大橋では戦争の支度しとだつた。いやその防禦工事中も、しばしば敵陣からの奇襲きしゅにおびえ、どこかではもう不吉な年の前ぶれに似て、魔の声みたいな矢うなりが虚空こくうの

冬を引き裂いていた。その配備は、

瀬田方面、三千騎 総大将 千種ノ中将 忠顕ただあき、名和伯耆ほうきのかみ守

長年、結城の判官親光

宇治方面、五千騎

楠木左衛門尉じょう正成

淀方面、一万騎

新田右衛門佐義貞

山崎方面、七千騎

脇屋駿河守義助

遊軍、山徒さんとの僧兵千余人

延暦寺えんりやくじノ僧、道場坊宥覺ゆうかく

ほかに若干じやつかんの舟軍がある。——舟軍は琵琶湖上を遊弋ゆうよくして

ていた。

この兵力と配置でもよくわかるのは、義貞の敗報いたるや、いかに今はと朝廷もあわてたかということである。在京の地方軍は

もちろんのこと、公卿指揮者、滝口の兵、叡山の僧兵までをあげて都門の東西にそそぎこみ、

「万が一にも、ここにやぶれなば」
と、廟議びょうぎとしては、じつに稀有けうな即決と、また一大覺悟のもとに、これの布陣となつた経過がありありわかる。何しろ元日、これはただならぬ元日だつた。

由来ゆらい、洛内攻めには、いつも近江路と大津の中間、瀬田川の瀬田ノ大橋、また宇治川が、攻守決戦の境になる。

壬申じんしんノ乱の大海上人おおしあまの皇子軍。木曾義仲の寿永じゅえいの都入り。
承久じょうきノ乱の北条勢と朝廷方がた。

そしてまいど、守備のほうが、そのたび破られていくことも例

外がない。

という前例もあるので、このたびはと、千種忠顕ただあき、結城判官ただあき親光らは、その防禦構築にはあらん限りな力をそそいだ。

瀬田から石山の下へかけ、川へ向つて諸所に櫓やぐらを組み——櫓には出櫓、高櫓の二種があつて——たて楯のうちに弓隊の弓の上手を選抜して揃えた。

もちろん、大橋の橋板はすべて撤去し、橋づめの口には、厳重な鹿垣しじがき。ここには弓隊だけでなく、その後方に長槍隊と歩兵部隊が厚く見える。

そしてなお、川の中には、乱杭らんぐいを打込み、大綱を張りまわし、膳所ヶ瀬ぜせ、供御くごノ瀬せのあたりまでは水も見えぬほどな流木りゆう うぼくだ

つた。すべて敵の渡河にたいする防禦であるのはいうまでもない。

「天野經つねあき顕の軍忠状」に見ても、

正月元日より十一日迄

連日の合戦

警固毎日

高矢櫓たかやぐらにありて

軍忠に抽ぬきんづ

とあり、いかに肉薄戦がむずかしく、遠矢合戦に暮れていたか
がわかる。

が、これは正面大手だけのことだつた。

——宇治方面では楠木正成の五千騎が、宇治橋を断きり、槙まさきノ島、

平等院のあたりに黒煙をあげ、こここの守備は一ぱいものものしく、

魔風、たいか 大廈に吹きかけ

宇治びやう 平等院どうあん の宝蔵仏閣

たちまちに焼けうせしこそ

浅ましけれ

と、古典の筆者も古来の文化財があくた 芥のよう焼亡やきな されてゆくさまを嘆いている。

いやそのような暴状はここだけでなく、石山寺の宝蔵もこのときには破壊され、淀、八幡、山崎へかけても同様だつた。とまれ都門の東西南北、今やぐるりと剣槍の長城だつたわけである。

また、ここで視野を大きく、全国的なうごきへも目をそそ 注いでみ

る要がある。

さきに足利方が、直義の名で、諸国へ飛ばしておいた檄の応えが、いまやものをいつて来たかたちで、

五畿き、七道、四国九州、全土の朝敵

一時に蜂起ほうきすと聞えしかば

朝野肝とうやきを消さずといふ事なし

とあるような情勢にもあつたので、都はまさに海嘯つなみの中の一樓ろうに似ていたのである。——現げんに、刻々と兵庫、摂津方面からせまつて来る四国の細川 定じょうぜん禪こおう（足利一族）、山陽、山陰の武族など、みなそれの呼応で起つたものだつた。

だから尊氏には、確信があつた。心に期して、あせらなかつた

ようである。

彼は大晦日おおみそかも元日も行軍中にあつた。そして途上、江州の伊岐いきノ宮の小城を一昼夜で攻めつぶし、前線に着いてからでも、入念に巡察をおこなつていた。しかる後、いよいよ瀬田の攻撃を弟直義と師泰もうやすの手にあづけ、自身は中軍の精兵一万余をひきいて宇治へ向つた。

足利方の兵力は、官軍より数倍多かつたようである。

勝てばどつと降兵を加えて強大となり、負くれば一夜にその旗營ひいやうも痩せ細つてしまふのが、今の合戦の特徴だつた。低い土分、雜兵のあらかたが「命」いのちを一つの投機にして、戦場をただ食う職場とも考えていた風潮がひろい底辺にはあつたのだろう。

とまれ、尊氏は敵に数倍する兵を計算に入れて、ひとつの人海戦術に出た。

それは上手な戦法では決してない。坐しての政略には富むが、馬上実戦の奇手などはない彼である。しかし、策はあつた。

その日、七日から八日へかけて。

かねがね、しめしあわせを持つていた足利軍は、瀬田、宇治、大渡、山崎、丹波口、のこらずの前線から一せいに攻撃をおこした。——主力はもちろん尊氏の麾下きかで、その中軍は、八日、大渡をつき破り、同夜、八幡やわた方面まで進出した。

そして、翌九日、

「山崎の口も、細川定禪じょうぜん、赤松円心らの手勢が、かち取つて

ござりまする

との伝令をうけたとき、尊氏は口にこそ出さないが、

「もう、しめたもの」

と、思ったような態ていだつた。

はじめ、彼は宇治を突破口と考えたが、その手の守りには菊水の旗が見えた。すると、彼は、

「楠木勢だな」

と、すぐ転てんじて、大渡へ移つてしまつた。なぜか正成を避けた

のである。

もし尊氏がそこの守りを突いたら、楠木勢も一敗地にまみれていたかもしぬなかつた。なぜなら、瀬田、供御くごノ瀬方面の味方あ

やうしと聞えたので、正成は麾下の矢尾やおノ別当、志賀右衛門さらに八百騎をつけて、加勢に割いてやつたところであり、義貞は淀口、脇屋義助は遠い山崎だつたから、とても尊氏の兵力はささえきれなかつたにちがいない。

けれどまた、もし楠木へぶつかつて行つたら、尊氏軍の死傷もおそらくかず知れなかつたことだろう。——尊氏はよくそれを予察していた。——いや正成をちしつ知悉ちしつしていたのである。彼はまだ心のどこかで正成に惹ひかれている。

「縁あらば」

と、他日一つの酒を酌み合い、同床異夢どうしょういむにあらぬ同夢を見ることがないでもないと思つていたのだ。

十日の昼合戦は、伏見、鳥羽、桂川の沿岸など、長い戦線で展開された。——しかし細川定禪、赤松円心らの四国、中国勢は、すでに洛内の一 角に入つていた。——義貞の一万余騎は、いくつもに分裂し、日没前、諸所に乱れ立つのが見えた。

「宇治もやぶれた……」

とは、その時刻の声だつた。

尊氏の軍は、伏見へ出、このさいまたも、馬淵義綱、田上正氏などの降将とその兵九百人を加えていた。

そして味方の細川定禪、赤松円心のりむら則村の二将と、鳥羽殿とばでんの門外で落ちあつた。つまり東西両軍の連絡を遂げたのだつた。

「本望を遂げまいた」

と、円心は言つた。この円心も、いぜんは宮方であつたが、例の建武恩賞のさい、余りにもひどい冷遇に怒つて、いろいろ国元の播州にひき籠つていた者であつた。

瀬田はひがしの関門だが、都の西の八幡やわた、山崎はもつと重要である。畿内きない、西国街道へののどくびなのだ。

尊氏はいつも目先の障害にとらわれない。先のたたかいをたたかつて行く。万難を排して、今やこの方面の赤松円心や細川定禅らの西国勢と手をむすび、そして鳥羽伏見から羅生門にわたる都門の動脈を扼やくしてしまつたものである。

「洛内の占領も、はや、今夜のうち！」

当然、波濤の軍勢は、逸つていた。が、尊氏は、
「あしたにする」

と、急に、この日の合戦を、ひとまず都の郊外にとどめ、そして、

「もう急ぐことはない。むしろ宇治、大渡、丹波口などに、なお、
うごめく敵へそなえて、味方をかためる」と、いう令を出した。

停頓は意外だつた。麾下の将士には理解できることである。

このへんを彼の戦下手という者はいうのだろう。古典「太平記」
「保暦間記」 「梅松論」の諸書はその理由を、

この日、十日は厭み日（悪日）なればとて、洛中攻めは翌日

にのばす——

として、あえて尊氏の氣もちには入つていない。しかしそんな御幣ごへいをかつぐ尊氏でなかつたことは、これまたいうまでもないことである。

血に狂う**羆**ひきゆう **貅**こう 数万の大将として、尊氏が慎重でないわけはない。おそらくは、いまや動どうてん 頭狼狽の極にあろう内裏の**大宮**おおみやびと 人たちが——わけても後醍醐のご進退が——彼の胸にも想像されて、「まず、こよい一夜は、ご猶予を差上げておくべきか」と、したのがその胸底であつたと思う。

この期ごにしろ、彼には本心、後醍醐を憎みたてまつる氣などは毛頭ないのである。ただし専らにとつては当面、まことに困

るお人なのだ。退いてもらえばよいのだつた。——すでに叡慮と
してもお勝目はありますまい。聖断いかがなされますや。尊氏、
これにて一夜だけはお待ち申し上げましよう——。という無言の
表示がその停戦であつたと觀る。

まさに、その通りで。

洛中は早や死の街に似、どこか戦線の綻びから潜入した西国兵
が、町屋の裏にひそんで火をつけ出したのが消し手もなく燃えひ
ろがり、煙は二条内裏へも忍び入つて、いつにない早い黄昏たそがれが
御所一円をおおい出していたのであつた。

「いかにせん？」

との、御評議もまたたくまだつた。——主上には叡山えいざんへ御ごらつ

落去きよあるぞ！——と声大きく触れ出された瞬間からの光景といつてはもう一ト方ひかたな騒ぎではない。

賢所かしこどころの神器を、玉体にお添えし、鳳輦みこしへと、お急き立てはしたもの、それをかつぐ駕輿かよちよう丁の者はいづ、ぜひなく、衛府の士が前後になを担かいまいらせる。また、供奉ぐぶの公卿も、若きはあらかた甲胄かつちゆう弓箭きゆうせんをおびて前線へ出払つていたし——吉田大納言定房が牛車くるまをとばして参じたほか、老殿ろうでんじょう上じょう十数人、滝口、蔵人の輩やからなど、寒々さむざむしいばかりである。——そしてただ多かつたのは、准后じゅんごうの廉子やすこ以下、あまたな女御やそれに侍く小女房たちの女人だつた。

十日の宵には、瀬田はまだ陥ちていない。

前線の義貞からは、夕方、

「お気づかいあるな」

と、宮門まで強気な伝令もあつたりしている。にもかかわらず、洛内の危機感は、刻々、不気味さを濃く^こしていた。玉座をまもる侍臣のあわてふためきも度を過ぎてはいたが、このさいの、

主上、山門へ御動座

の措置^{そち}は、よくよくなことだつた。窮余の急、やむをえなかつたともいえようか。

こんな例は、平家都落ちのむかし、木曾義仲の侵入にあたつて、一時、後白河法皇が叡山へ難をお避けになつたあれ以来のことである。しかも後白河のばあいは、源平両勢力の上になお中立的な

余地を残しておられたが、こんどはそうでない。——後醍醐はその経過やら綸旨の上からも、御自身、軍の御指揮者たるのかたちで、公卿すらも 弓 箭（きゅうせん）を取つて陣頭に出ていたのだつた。

だからおなじ 蒙塵（もうじん）（天子の御避難）でも、今日の恐怖は、往む時の比ではない。—— 賢所（かしこどころ）の渡御（とぎよ）（三種ノ神器の移動）を忘れなかつたのがやつとであつた。——日ごろ、紫宸（しじん）、清涼（せいりょう）、

弘徽殿（こうひでん）などになぞらえられていた所の一切の御物（ぎよぶつ）——また昼の御座の “日の簡”（ひだ）、おん仏間の五大尊の御像（みぞう）、后町（きさきまち）のきらびやかな御簾（みす）ごとの調度なども——すべてそのままお立退きのほかなかつた。

それから、まもなく。

これらの巨大な洞窟の宝財はチラチラと煙のなかに静かなそして妖しいばかり美しい火を持ち出していた。飛び火か。兵の放火か。バチバチとしばらくは火ハゼの音であつたが、やがて天に冲す炎の柱になり出した。——その中天には、寒烈一月十日の、月があつた。

ここわづか天下一統して

朝恩にほこりし月げつけい卿けい雲客

さしたる事もなきに

武具もたしなみ

弓馬を好みて

朝儀、道に違たがひ

礼法、則に^{のり}_{そむ}背^{そむ}きしなど

いつかは

かかる不思議の
出^{いできた}来るべき前^{ぜん}表^{べう}なりけん

とは、古典にみえる浩嘆^{こうたん}であるが——この炎をうしろに、叢山東坂本へと落ち行つた鳳輦^{みこし}の供奉^{ぐぶ}の人々にしても、それぞれの感や反省の傷^{いた}みに、足も心もそぞろであつたに違^いあるまい。

が、かくと知つて、途中からは、追い追いと、お供の人の影なども増して^{いた}いた。

阿蘇^{あそ}ノ大宮司^{これとき}惟時^{うさ}、出雲の宇佐兵衛^{じょう}ノ尉助景の手の者が、まつさきに来て、ご警固に付き、新田の諸侍^{しょざむらい}、千葉、宇都宮、

そのほか戦線から脱落していった軍兵なども、北白川から志賀越えへかけては、ぞくぞく、おあとを慕つて来る。すると、このうちにあつた結城太田ノ大夫判官親光は、なに思つたか、

「いや君のお供をして叡山へ行くよりは」と、急にひとり言ひとりごちして、鳳輦みこしのそばへ走つてゆき、あたりの公卿へこう告げた。

「少々、思い立つたことがござりますゆえ、それがし一人は、ここでおいとま申しあげます。主上へは、よそながら後日にでもよろしく御奏ごそうもん聞おきを」

と、理由もいわずに、元の道へ蹠々ともどつてしまつた。――

親光ほどな侍さえ臆病風か？ と口惜しがらぬ者はなかつた。

瀬田口は依然としている。諸所の守りで官軍は破れたが、ここのみは頑強だつた。

「師もうやす泰」

と、直ただよし義はいま呼んだ。猛攻まる二昼夜の号令に喉のどもつぶれた声である。

副将の高こうノ師泰も疲れきつた姿だつた。すぐそれへ来たが、直義が默然とただ戦線をにらんでるので、彼も腕ぐみを共にしばらく側に突つ立つていた。

戦線は瀬田川の川床かわどこだつた。上流かわみは石山寺辺りから湖水口へ

かけてまで、折々にわあツと 喊声かんせいをあげている。

だがまだ、一騎も対岸へ駆け渡つてはいない。

無数な人馬の屍かばねは、河中の張り繩や 亂杭らんぐいにひツかかつたまま水に洗われており、橋板のない大橋の上にも矢に仆れた味方の死者が、あえなく橋ゲタに伏したり、ブラ下がつて、水面に落ちかかっている。——それさえ収容できぬほど、対岸の高矢櫓たかやぐらや出矢櫓でやぐらの弓陣は、進み出る人影さえ見れば、どつと、矢の乱射を集中してくるのだつた。

「師泰。どうかならんか。何かよい策はないか、何か……」

「さあ。死傷もかぞえきれません。さまざま、手を変えてみるもの」

「くりかえしだな」

「ただ累々の犠牲を河に埋めるばかりで」

「だが怯んでなどいられるか。すでに兄者の軍は大渡を破り、
きのうは八幡、山崎まで進んだとある。直義何をしているのだと
のお叱りが聞えるようだ」

「師泰とて笑われ者、歯ガミを禁じえませぬが、これ以上の死者
を出すのもどうかと考えられます。ま、明朝ともなれば」

「明朝、何が？」

「道誉の船手が、湖上、遅くもこれへ着きましよう」

「その佐々木は、疾くにこの瀬田攻めに参加しておるはずの者。
またも日和見かもしけん。元々、風上にはおけぬやつだ。あてに
ひよりみ

はするな」

先に道誉が味方を救つた二度寝返りの芸などは、いかに大きな軍功であろうと、直義には内心、軽蔑の感しか残されていない。尊氏はとかく珍重しているが、もとから彼には性の合わない男なのだ。苦戦、このさいにおいてはなおさらだつた。

ところがである。十二日の未明だつた。

まだほの暗い湖上を、数十の船影が、瀬田の岸へ寄つて來た。佐々木勢であつたのだ。道誉は、直義に会うとすぐ言つた、

「（ご）苦戦もさぞと、心はせいていましたが、船手の準備に日がかかり、途中敵の舟陣の目をかすめるなども容易でなく、思わぬ日時を費やしました」と。

「いや、むりもない」

直義は怒りもわすれた。正直、百倍の力を得たよろこびだつた。
がしかし、そのすぐ次に、道誉は容易ならぬ情報を彼に告げた。
——それには、船手の加勢をえた直義の強味も、差引き、大きな狼狽を余さずにいられなかつた。

何事かといえば。

かねがね、予測はされていたことだが、奥州の北畠顕家あきいえが、北の精兵七千騎をひきつれ、長途、王軍をたすけるべく疾風迅雷しつふうじんらいのよう西下して、はや不破を越え、今日にも、近江愛知川えちがわには着くであろうとのことだつた。

「なに。——北畠顕家の奥州軍が、今日にも愛知川へ着くという

のか

足の裏から地ひびきでも聞いたように、直義は恐れ慌てた。予期はしていたが、こう迅く！^{はや}とは想像外であつたらしい。

「もしその大敵を背後にうけ、ここもまだ陥ちぬとあつたら一大事ぞ」

と、道誉と共に作戦をねつた。そして遮二無二^{しゃむ}、今日中にはと、水陸から瀬田の敵をおめきつつんだ。

この湖上奇襲はみごと功をそし、直義と道誉の兵が、やがて粟津^{あわづ}の岸を占領してからは、官軍も腹^{ふく}背^{はい}の脅威にあきらかな苦悶^{もろやす}をみせはじめ——またまもなく、正面の高ノ師^{こう}泰^{もうやす}も、瀬田の一角を突破していた。

柵さく、櫓やぐら、幕、陣小屋。たちまちそこは火の海となり、官軍はぞくぞく大津、坂本方面へと退却し出した。しかしこのむりな突破に払つた足利方の損害は寡少かしようでない。直義が行くところ、その戦場はいつも余りに烈しく余りにも血なまぐさい。

時に、この十一日。

一方の尊氏軍は都の西から入洛して、洞院ノ公賢とういんのきんかたの空あきやか館たを、仮の本営とさだめていた。

同日、こんな事件があつた。

尊氏もまだそこへ床几しょうぎをさだめたばかりの混雜きんかた最中さなかに、
「申し上げます。——結城太田ノ判官親光が降参の由を申して、
そのおとりなしを、かねて親しい大友左近将監貞さだとし載まで願い出

ておりますが、いかがいたしたものかと、大友よりの問い合わせに
ござりますが」

と、嘗門の将から伺いを立てて來た。

折ふし——降参ノ輩チユウ、注スルニ暇イトマアラズ——の状だつたが、親光といえ巴、東北の大族結城宗広の子である。またとない者だ。尊氏はすぐ大友に伴つてまいるようにと、いいつけた。

その伝命で、大友左近將監は、すぐ親光をつれて陣所を出た。そして樋口東ノ洞院ひのくわがしとういんの小川ベリづたいに来て土橋を越え渡ると、大友が言つた。

「はや、そこが御門前。法なればお腰ものの刀をお預かり申したい」「こころえた」

と、親光は太刀を外し、鞘の鯉口を左に持つて差出しながら、「年来、そこもととは、武士のおつきあいをして來たが、よも、こんな降参のお扱いを願おうとは思わなかつたな」

「まつたくじや。したが名よりも実だ、今の世は」

「げに、そこもとは氣転がよいな。伊豆三島の合戦に官軍が破れたのは、まつたく御辺と佐々木が寝返りのためであつたと聞く。

——おおツ、人非人！ よくも戦友を売り、君恩を裏切つたなツ」「あツ！」

と、大友は額から左の目へ抜き打ちに浴びせられた半身を朱にし、本營内へ逃げこんで行く。——親光は、阿修羅となり——逆賊尊氏にも見参せん！ 尊氏にも一ト太刀！ ——とつづいて

門へ駆け入つたが、たちまち大勢の白刃に囲まれ無残な死をとげてしまつた。

大友もまた、翌る日、息がたえた。この騒動は日常血ぐさい戦陣での出来事ながら、余りに無節操な降将やら時の人心をいたく衝撃したようだつた。——また前夜、後醍醐に供奉ぐぶしていた叡山落ちの人々も、親光が列を脱けたその折の思いいちがいを、あとではいたく慚愧ざんきしたとやら、これも当時の評判であつたという。

小公子

四明ヶ岳の樹冰、湖水を研ぐ北風。叡山東坂本の行宮

は、寒烈、そんな一語ではつくせない。言語に絶する寒さだつた。
また敗報に次ぐ敗報のうえに、

主上はすでに

大宮の彼岸所ひがんしょに御座ぎよざあれど
未だ参いまさんずる大衆一人もなし

さては

衆徒も心を変じぬるや……

と、あるのを見ても、この日まだ、山門の意向さえも、はつきりしていなかつた形勢であつたとみえる。

おそらくは、山門の僉議せんぎも、

お味方か、中立か

の二論にわかつていただのだろう。尊氏軍の洛中占領も、直義の瀬田陥落も、山上にはわかつていただはずである。いやそこから手をかざせば、洛中洛外の兵火は、一望に見えもする。

「もし叡山が、足利ぐぶがたへ傾いたら？」

これを思うと、供奉の公卿たちは、食べる物も今朝はのどに通らなかつた。

主上以下、皇室の大御家族は、日吉山王ひえさん のう二十一社の“彼岸所”ひがんしょとよぶ空院に、それぞれ一夜をやつと凌しのがれたが、玉座のおかれた一院でさえ、氷の床、冰柱つららの御簾みす、吹き騒ぐ枯葉こようのほかは參さんずる人もなかつたらしい。

まさに、後醍醐御一生のうちでも、この日はもつとも険しい、

そして、あやうい御浮沈の刻々だつた。

が、ひる頃。

はじめて、藤本坊の英憲えいけんやまた円宗院の法印定宗じょうしゆうらが、五百余人の堂衆を後えにつれて、大床の下に来て伏し、「まずは三千の衆徒、臨幸りんこうを厭うとんじたてまつるなどの者は、一人もあるまじきにて候う。一山同心、ふた心はあらじと、ご覗慮くわいりょを安んぜられて、しかるびょう存じあげます」と、奏そうした。

さらに、南岸坊の僧都そうづ、道場坊の宥覺ゆうかくなども、千余の僧兵をひきいて行宮あんぐうをかためにかかつた。また、みかどに隨身して来た將士のためには、坂本、比叡辻つじの坊々や民家の家々に札を打つ

て宿所にそなえ、軍需として、延暦寺からは錢貨六万貫、米穀七千石を提供した。

山上、十禪寺の大鐘は、はやたえまなく鳴りつづけ、ついにここも戦場と化して來た。

およそ戦雲のつばさはどんな法の山だろうが避けてはいない。

——つい嶺の南、大津の三井寺は、由来、叢山とは何事につけても反目していた。幾世にわたつて対峙してきた宗門と宗門だつた。そこへ、尊氏の麾下、細川定禪の軍が、瀬田の直義に代つて、今朝から入つた。——法城を軍城として、坂本へ襲せる氣勢をみせているという。叢山もまた、当然に、城塞化した。

けれど、よく幾日を、ここにきさえられるだろうか。

千種、楠木、新田、名和、それらの味方とこここの行宮とはほどんど連絡もとれていない。寸断され、包囲され、随所で苦戦をおちていた。——しかるに尊氏軍は刻々と叡山一点にその重包囲を圧縮しつつある状だつた。東坂本の下からも、西坂本の方面からも。

「……ああ、^{うしお}潮の中よ」

行宮の憂いは濃い。ただ望みは、奥州軍北畠顕家の援軍が、まに合うか、まに合わぬか、それただ一つでしかなかつた。

奥州軍——

ここでそれの動きを見るには、どうしてもまず北畠顕家の人と

その立場とに一章を割いておかねばなるまい。

こんどの、尊氏討伐の大命が発せられたさい——あの去年十一月二十日のころ——朝廷ではそれと同時に、遠い地の陸奥守顕家へたいしても、

直チニ發向セヨ

タダ
の檄を飛ばし、
げき

郷軍、鎮台兵ノ全力ヲ挙ゲテ、北方ヨリ衝^ツイテ上^{ノボ}レ
と逐次、朝命を急達していた。

しかし、当時としては何しろたいへんな遠隔だつた。

鎮守府の柵^{さく}、多賀城のあつた地は、いまの宮城県宮城郡多賀城町市川、岩切駅の東一里で、仙台から松島へ行く塩釜街道の途中

にあたる小山である。

延喜年間の碑^ひというそこの多賀城碑によれば、

京ヲ去ル、一千五百里

と見え——もちろんこれは古里^{こり}の六町を一里とかぞえる大ざつぱな里程ではあるが——歩いての旅でも、片道二十五、六日といわれていた。

「すわ、御国^{みくに}の大事」

顕家は、勅を拝すなりその遠さにまず胸がつかえた。

鎌倉までとしても半月の余はかかる。彼は父の親房^{ちかふさ}にはかつて、地方政所^{まんどころ}ノ執事、評定所所員、侍所の面々、寺社、安堵^{あんど}奉行までを加えて、国司の議場で大評議をひらいた。そしてその

場ですぐ宣言した。

「案じられる！　このたびの大乱こそ、御國のありかたを決するものだ！　一日のまも猶予はならぬ。わしは今日にも多賀城を立つ。——家の子郎党の糾合きゆう うごうなどに手間取るものは、急いであとより追ッかけて來い。——柵さくの留守には、南部師行もうゆき、冷泉れいぜい家行らを残す。——あとはすべてわしにつづけ。時を逸いつして、馳はせおくれたら一代の不覺だらうぞ」

顕家は時に十八歳だった。

おととし十六の秋に、奥州鎮定の大任を負い、幼い義良親王のりながを上に、父の親房や結城宗広を後見として、この地へくだつて來ていたのである。

陸羽の奥はまだ蝦夷地えぞちのままといつてよい。乱妨らんぼう、反乱、同族の鬭いなど、絶えまもない。——顕家あきいえは二年の在任ですつかり戦陣の起居に馴れた。根は根からの大宮人おおみやびと、任は国司という文官なのだが、いつか純粹花のようなこの童貞の人は、自身を馬上の將軍にきたえていた。

後見の父親房は、あの「神皇正統記」の著者ちょしゃでもあつた。それでもわかるように身を持つことみずからきびしく、神国、皇室、万世一系を緯ひとする主義のほかには生きがいもないかのような人である。顕家はこの人の鑄型いがたに鑄られた理想の子として親の目にも映つていた。

そのむかし、この顕家もまだ十四歳の左中将の若者であつたこ

ろ、北山殿どのの行幸みゆきに、花の御宴ぎょえんに陪ぱいして、陵りょう王おうの舞を舞つたことがある。

よほどその紅顔こうがん可憐かんれんな姿がお目にのこつたものとみえ、みかどはそのごもよく「あの、花陵かりょう王おうはどうしているの?」と父の親房おやぶへままおたずねがあつたりした。——その紅顔の子顯家こうすけいが、今日の国難くにのうに赴く奥州軍の総帥そうすいだつた。思わぬ任地おきじへ来て二年、北国の朔風さくふうに研がれた馬上の子は、その生涯の方向を、いまは誰かに決定づけられていた。

ともあれ、どう急いでも顯家けんけいがその鎮守地ちんじゅぢ——陸前多賀城つちまへたがじノ柵さく——を発したのは十二月半ば頃であつたろう。

みちのくの山はすべてまツ白しらだった。行軍は明け暮れ吹雪ふぶきにな

やまされた。

柵さくの留守いも要る。初め兵は千にも足りぬ編成だつたので、その長途をあやぶまれたが、顯家は、

「行く行く、途中で参陣の約ある者三、四千はかぞえられる。いまは兵力よりも一日でも早く立つほうが、はるか大事ぞ」

と、言つて出た。いかに彼の純真な意氣がなくてを急いでいたかわかる。

軍中には、父親房も交じつてゐる。その親房は、ことし八歳の義良親王を綿帽子わたぼうしにくるんで馬の鞍くらツボに抱いていた。——しよせん、輿こしでは道もはからず、駕輿丁かよちょうの者も、雪の歩行にたえられぬからだつた。

旗は、錦の旗の一旒りゆうをかざし、ほかは弓まで袋にしていた。弓ゆ
 弦づるなども張ツたままでおくと、ピンと凍ツてまま切れてしまう。また不意な雪中合戦が起るとしても、こんな大雪では矢バネも用をなすまいかと思われた。

が、顯家の南下を、

——やらじ

と、さまたげたのは、途上の風雪だけではない。久慈郡の佐竹くじノ楯たて。亘理郡の相馬一族。またさきに尊氏から、奥州管領かんりようの名で東北に派遣はけんされていた斯波家長しばの党などが、

「親王を奪い、顯家、親房を討つて取れ」

と、あらゆる妨害と、またしばしばの奇襲に出た。

しかしました、顕家の軍も、遠からず参会の将を加えて、威風堂々をなしてきました。そのおもなる隊には、伊達だて、南部、結城などの大族があり、やがて白河を越え、雪もうすらぐと、上野こうづけ地方から新田与党の参陣もみえて、兵は五千余騎に達していました。

だが、予想以上な日かずを費やされたのはぜひもない。

何しろ斯波家長らの追蹤ついじょう（尾行してくる攻撃）も執拗しつようなので、鎌倉を横に見捨て、ひたむき、東海道を急いだが、ついにあの——箱根竹ノ下合戦には——間に合わなかつた。

もし、それに間に合つていたなら、足柄あしがら山上から黄瀬川谷へかけ、尊氏の軍はそのとき限り時代の墳墓に埋没され去つていたことであつたろう。——時運の機微、寸秒の作用のふしぎ、それ

らをあとでかえりみれば、人意人力のほかに、また一つの、天意みたいなものがあるのを何としても否みきれない。

こうして、顯家の奥州軍は、年の瀬も正月もなく急いでいたが、都へ近づくほど、官軍方の聞えは悲風ばかりで、足利方の優勢は断然たるものがあり、一夜の宿陣も気が気ではなく、

みかどは如何いかがなされし？

都の姿もどうなつたか

と、奥州出発いらい、およそ二十八、九日めに、やつと近江愛え知川ちがわの湖畔に着いた。いや着くやいな、戦旅の疲れも、鎧よろい虱じらみや泥土を払う暇いとまもなく、

「船はないか。叡山はここから見えるが、瀬田、大津は敵の陣地

だ。一刻も早く、これを彼方の行宮へ知らせたいが」と、またはたとその連絡には当惑していた。

船集めは容易でない。

まして敵地だ。数千の兵馬が着いた日すぐ湖上を渡つたなどは考えられぬことである。おそらくは、顕家が着くいぜんに、先発隊が来てすでに幾日も前から愛知川口えいちに手配をしていたものだろう。

いやそれにしても、湖東や湖南に住む水上生活者の協力がなければできないことだつた。古来、堅田や焼津やいづには、叢山勢力下の船持ちがたくさんに部落していて“堅田湖族”などと世によばれていたし、同様な水辺部族は、湖南の野洲川やすや能登川口のとにもあま

たいたものにちがいない。——おもうに顯家は、後日の報賞を約して、彼らのかくしている“隠し船”を集めさせるに成功したものではないか。

とまれ、奥州軍七千は、湖東と堅田の間を幾往復もくりかえして、十三日から十四、十五の三日間にわたり全軍琵琶湖を船で渡つた。

このさい、陸路では、瀬田ノ大橋が落ちているし、また足利方の占領区域ではあり、どうしても、奥州軍は一兵のこらず水路によつたものと見るしかない。

「おお、援軍が見えたぞ！　援軍が着いた！」

「奥州の猛卒猛将」

「しかも七千が」

「万歳つ」

東坂本はまるで狂氣のあらしだつた。山門の大鐘も金山の衆徒へ、ごんごんと告げ鳴らしている。——これはすでに前日から分つていたことだが、日吉彼岸所における行宮のあたりの色めきは一ぺんに春が来たような騒ぎに見える。公卿侍臣たちは、抱きあつて泣いた。或る者は、展望のきく所へ駈けのぼつて、堅田ノ浜から整然と進んで来る黒い長途からの軍列へ手を振つていた。わけて、俄に明るさの流れていたのは、准後の一院やら、女に御小女房などの密まつていた避難所だつた。

そうしたうちに、麓からは、

「顕家、参内」

の由が行宮あんぐうへ聞えて來た。

お待ちかねだつた。生なまやさしいお待ちようではない。後醍醐は

ここ十数日の憂色も初めて、何処かにほころばせて、

「來たか。——あの花陵かりょうおう王がやつて來たか」

と、お口をついて仰つしやつたほどだつた。

花陵王とは、かつて、顕家が十四のとき、花の御宴に陵王を舞つてお目にとまつたときからの、帝が彼をよぶ愛称だつた。——

その顕家は十八となり、花の將軍となつて、お目の前にぬかづいていた。後醍醐は彼の援軍をえて、再生のお氣もちでもあつたが、

あの小陵王が、こんなけなげな者になつたかというぞ感概なども入りまじり、あらゆるおことばで、顕家の勞をねぎらわれた。

「……」

顕家は感泣していた。かぞえ年の十八はまだ年少な香をもつている。感情の琴線は純で一途だつた。情に極まると子供みたいな咽びを洩らす。

父親房は、やがて親王にお添いして、准後の院へ伺候して行つた。——が、顕家はなお御前にのこつて、宵のころまで御酒を賜わり、その夜は行宮の廊ノ床に、鎧も解かず、宿直寝していた。ここのおよろこびもただならない。しかし、当夜も麓は合戦の火の手やら地獄を思わす人間のおめきであつた。

まだらな残雪に見える。十四日の月のこぼれだ。

顯家は綿のわたごとく疲れていたのにさてなかなか眠れなかつた。

——山風はつよく、麓では遠い兵馬の喧騒が海鳴りに似、夜じゆう、何か事ありげだつた。トロとしかけては本能的にすぐ筋肉が目をさます。

それに吹きさらしな行宮の外廊は、氷に坐しているようだつた。だが、これは彼が求めてしていとのいた宿直どせいだつた。——宵に、親しく御酒をいただいたとき、たまたま後醍醐のおくちから、

「顯家、覚えておるか」

と、元弘元年の北山御遊ぎよゆうのおはなしが出たのである。その平和な一日の楽しさ、尊さ。顯家にも忘れられない。

それで彼は北山殿でも花の終夜、君に宿直したことなども思
い出して、あす知れぬ戦陣の身、これがお名残りになろうもしれ
ずと、独り今夜をここに懐かしんでいたのであつた。……するう
ちに、いつか彼は、長途千里の疲れやらここに着いた安心も出て、
眠るともなく過去層の幻影の中にふと居眠つていた……

——あれは春の三月で、

花を見ばや

の北山行幸みゆきだつた。

中宮を初め、女院の鏡子や瑛子えいこの君なども御一しよであつた。

みかどは寝殿しんでんの階はしノ間まにお茵しどねをおかれ、階の東に、二条ノ道平はし、

堀河ノ大納言、春宮とうぐうノ大夫公宗きんむね、侍従ノ中納言公明きんめい、御みこひ

子左だりノ為定などたくさんな衣冠が居ながれていた。

御遊ぎよゆうは終ひねもす日におよび。

やがて、樂所の御興がくそには、右大臣兼季ごきようの琵琶、權ノ大夫冬信の笛、源中納言具行ともゆきの笙、治部ノ卿きょうのひちりき、琴は宰相ノ公きんはる春など秘曲をこらした。

なお、それにもまさる聞き物は、女藏人によのぐるうどノ高砂、播磨はりまの内侍うちしたち、あまたな女人の合奏だつた。そのころ中務なかつかさの宮も、おん直衣のうしに太刀姿で見えられ、御隨身ともどもどもと一つに、舞謡まいうたの手拍子などに興じ入られると、この日のさまは「増鏡」の“むら時雨の巻”にも眼まにも眼のあたり目に見るようく描かれてゐる——

暮れかかるほどに

花の木間このま、夕日花やかに移ろひて、陵王りょうわう（扮装せる当年十四歳の顕家）のかがやき出でたるは、えもいはず、おもしろし。そのほど

うへ（後醍醐）にも、御引直衣おんひきなほしにて、椅子いすにつかせ給ひて、御笛を吹かせ給ふ。——宰相ノ中将顕家あきいへ、陵王の入綾いりあやを、いみじう尽して罷まかづるを、召返して、前さきノ関白殿、御衣おんぞとりてかづけ給ふ。

紅梅の上は着、二あるの衣きぬなり。左の肩にかけて、いささか一曲舞ひて罷まかん出ぬ。右の大臣、太鼓打ち給ふ……

「ああ、夢よ」

顕家は目醒めた。

しかし、太鼓は夢でない。何が起つたのか。とうとうと麓で陣太鼓が鳴っている。

あの君、この公卿。夢の中の人にしてなお今日も生きている人が何人あるだろうか。顕家の瞼には、一瞬、はかな 嬉い花びらが、水の上の花屑はなくず のように流れ去つた。

「やつ？ 敵の襲来か」

あたりは急に騒然とし、坂本、唐崎からさき の遠くにまで、潮うしお のようなどよめきや飛ぶ火が見えた。

夜すがらな山下のあらしは、明けてみれば、それも味方の吉事とわかつた。

洛内のすみに追いこまれていた新田義貞の手が、敵中突破に成

功して、やつと東坂本へたどり着いて来たものだつた。

また。宇治の手の楠木も、千種、脇屋、名和などもそれいぜんにみな行宮あんぐうの守りに返つており——これに奥州軍の来援もみたこの朝の官軍は、まつたく生色を新たに、

「いまは時措おくべきでない。われから攻勢に転じ、まず三井寺の賊軍を殲滅せんめつして後、尊氏、直義を洛中に囮み、このたびこそは、その首級をあげねばならん」

と、義貞は衆に豪語していた。その日の評定においてである。顕家も加わっていた。

「……ですが」と、彼は年少なので、いと控え目に、「われら、千五百里の道（古里の数）を昼夜なく馳せのぼつて來は

たみちのくの兵馬は何ぶんにも疲れはてております。せめて一日は休息させてやりたいと思ひますが」

「オオ花の將軍北畠殿よな」と、義貞の総大将ぶりも、その人へは眸を和めて「ごもつともだ。途中風雪の御難儀だけでもずいぶんえらかつたことでおわそ。……したが、長途を来た兵馬といふものは、生じ一両日休ませると、かえつて骨がゆるんで物の役にはたたぬものだ。いッそ息を抜かせぬにかぎる。——北畠どの、それが用兵のこつというものです。おわかりかの」

と、訓おしえるような口調だつた。

頸家は赤面して、

「よくわかりました」

といつたきりで黙つた。次いで諸将の発言もあつたが、多くは義貞の意向ですすめられ、みかどのご裁可をみるや、ただちに大規模な作戦活動に移つていた。

おんじょうじ園城寺、すなわち三井寺の炎上を見たのはこの日のことである。この正月十六日合戦は、大津合戦とも当時呼ばれた激戦だった。

「しまつた」

と、尊氏方の細川定禪は、すぐ洛中の尊氏、直義の許へ、火急に！と援軍を求めていたに相違ない。

さきごろから尊氏の命で、定禪の軍は、ここを足場に、行宮あんぐうのおかれてある叡山攻めをしきりに策していたのである。反叡山

の三井寺大衆一千余も、もちろんそれを援けていた。

が、叡山は嶮だし、伝教以来のゆゆしい御山みやまでもあるとして、尊氏がそれの攻略には大事をとらせていたことが、かえつて、今日の遅れであつた。義貞の猛攻撃がツケ入る好機となつてゐる。

義貞は懲りてこいた。

さきの箱根、足柄あしがらの苦杯を彼は忘れ難い。あのときの戦略的な“読ミ”の不足は大将として恥ずべきだつた。だから今はその逆に出た急襲といえなくもない。

はや三井寺には黒煙があがつてゐる。——一番、千葉ノ介高たかた胤ね、二番、北畠顕家、三番、結城宗広。四番、伊達と信夫の連合勢。——ほか楠木や名和の隊も突進してゆき、攻守入りみだれ

て、炎の下のたたかい半日余、たそがれにはもうそこは無残な火か
塵の広場だつた。そして山科から京方面へ黒々と足利兵の逃げな
だれが続くばかりで、ついに尊氏からの援軍は見なかつた。

第五列

洛内はさつそく兵糧に欠乏していた。

首都占領の優位も、大軍勢も、その点では、無条件に楽観して
はいられなかつた。

「円心。
播磨船はりまぶね^きはまだか。糧米輸送の見込みはどうだの？」

尊氏は、赤松円心を見るたびにこう訊かぬ日はない。

昨今、山陽道は杜絶^{とぜつ}していた。楠木の別動隊が淀の水路や河内、摂津口をさまたげておいたためだという。——先に細川定禪の軍を三井寺へやつておいたのも、近江口の糧道抑え^{おさ}が一つの目的だつたのだが、瀬田ノ大橋は破壊され、湖上の輸送はなおままならない。そしていまやこの焦土の洛中なのだ。日々数万の兵が糞するほどな食糧が残されているはずもなく、

「はて、負ければさんざん、勝つてもこの餓鬼のすがた。とかく、戦とは、難しいことがいろいろ起るものだ」

と、尊氏はつらつら痛感していた。——それでも数万の兵が何とか食つておいたからだつた。そのかわりあらゆる軍の悪に目をつぶつていなければならぬのである。彼にはそれが自分の悪行み

たいにつらく見えた。

そして彼のあたまは、朝夕、本陣の床几の前に据えられる敵将の首を見るなどよりも、どうしてもほかへ熱意をひかれていた。わけていま、彼が求めていたのは、性急な戦果ではなかつた。その戦果を確実なものにする戦争名分であつた。

「わからんか。お行方は？」

今日も尊氏は、つい司令部の貴重な一刻を、それの詮議に、過ごしてしまつた形だつた。

彼が求めるものの捜査の主任は、例により一色右馬介が命ぜられてゐた。右馬介はあの雲水姿を便衣として、手下も使い、ここ数日それに奔命していたが、
 奔命 ほんめい

「なんとしても、お一ト方すら分りませぬ。これ以上は叢山にでも登つてみぬことには」

と、毎度のむなしの復命をまたくりかえしていた。

「ではやはり……」と、尊氏も今は半ばあきらめ顔に。

「持明院統じみょういんとう」の後伏見ごふしみ、花園の二法皇から新院（先帝、光嚴）の君まで、すべて過日の内裏落去のさい、共に叢山の上へ、いやおうなしにお座所を変えを強いられて行つたものと考えるしかない

か

「必定ひつじょうは」

介も、さじ投げ氣味で。

「それに相違ござりますまい。およそ御避難ありそうな先は、く

まなくお捜し申しあげましたこと。……が、なお、望みはないで
もございません」

「さはいえ、叢山では、近づきまいらせる手もあるまい」

「いえ。持明院統の臣で、去年の騒動こぞうどう、西園寺公宗きんむね（北山殿）
の一件にからみ、以来、剃髪して寺にかくれている公卿こうけいがありま
すそうな」

「たれか」

「日野資名卿すけなきようです」

「日野？」

「はい。むかし、佐渡ヶ島の配所で、あえなく亡くなられた資すけと
朝とも卿の弟御。てまえとも、まんざら縁なきお方ではありません」

「それは絶好なお取次だ。資名どのを捜し出せ。資名を介して、
持明院統の院宣を請おう。——軍はここまで勝つてきたが、院
宣を持たねば、遂にさいごの実は結ぶまい。その者ならば、居所
は分つてゐるのか」

「いえ、まだ……」と、介は首を振つて。「これから捜すわけで
すが、しかし、手がかりもないではございませぬ」

「はやくいたせ。——もはや今日の戦いは、足利と新田のいくさ
とは見せようがない。この尊氏は朝敵とみられておる。我に名分
がないのは、軍に旗がないのにひとしい。——大きな弱みだ。一
日も早く、持明院統の院宣を請い奉つて逆軍でない証を示さぬこ
とには」

「は。きっと、急ぎまする」

「して。その日野資名の居どころを、どこに搜すの？」

「戦前ですが、仁和寺の尼長屋に、佐渡で亡くなられた 資朝
卿^うの後家の君が隠れ住んでおりました」

「む。資名には、あによめ嫂ぎみにあたるお人だな」

「そうです。その後家_君^{ぎみ}の許に、ご存知の、小右京の君も一つに身をよせていましたゆえ」

「おおあの、小右京か」

「おそらくはこの戦乱で、尼長屋の人々もどこぞへ散り去つたかもわかりません。……けれど仁和寺のあたりへ行けば、知れぬことはござりますまい。また資朝卿の後家_{ぎみ}に会いさえすれば、

しぜん資名どのの居る所も分ろうかとも存じられます」

はしなく、小右京の名を聞いて、尊氏は、この大きな世の波濤に会つてその姿も見せなくしてゐる無数な弱き者——磯べの貝殻のような力なきもの——^{めしい}盲の覚一やら草心尼などの安否もふつと思い出されていた。

が、そのとき、陣外は急に騒然としていた。

「黒煙が望まれる！」

「園城寺だ、三井寺の方ではないか」

尊氏は、さすがすぐ床几を立つて、さつと陣幕とばりを出て行つたが、また戻つて来て。

「介」^{すけ}

「はつ」

「いくさの勝敗はまだいずれともわからん。しかしそちに命じておいたことは目前の一勝一敗にかかわらぬ大事中の大事だ。はやくそちはそちの使命に向つて吉報を持つて来い」

「では、後刻また」

追われるよう右馬介は笠をかぶつて巷ちまちへ出て行つた。

その巷は、狂奔する兵馬以外には、ただの生業たつきのかけらもなかつた。——三井寺の味方危うし——の声が高い。山科、四の宮あたりには、高ノこう師もうやす泰や石堂、仁木などの味方が陣していると聞いていた洛中兵は、

「なあに、大丈夫さ」

と、尊氏の本陣とにらみ合せてたかをくくつていたが、たそがれ近くから模様は妙に険しく変り出していた。

尊氏の陣営内へ入つて行つた直義ただよしや今川範國のりくには、いつまでもその幕舎から姿をみせず、やがて、外に現われた直義は、何か、兄とまた激論でも交わしたらしく憤然と唇をかんでいた。そして俄に鞍馬口にあつた自陣を三条河原へすすめたが、すでに三井寺から敗れ落ちて来た衆徒やら細川兵は、さんざんな態ていで、粟田口のへんに吹き溜められていた。

「後手だ。ざまはない！」

直義はくやしがつた。

「またしても、兄あに者じやの念入りが、敵に虚きよを突かせたわ。せつか

く勝つていた戦をよ。三井寺はもう奪り返せまい！」

後手を取つた。

と、直義が切歎^{せつしやくわん}扼腕したのもむりでない。

たしかにわずかな時間差だつた。洛中の足利方は、みるみるうちに、その優位を逆転されて、苦しい守勢を余儀なくされた。

だが、立場をかえていえば、新田勢を中心とする官軍方のこの迅速な巻きかえは、まつたく義貞の捨て身な勇が人の予想をこえていたもので——彼は箱根、足柄で舐めた不覚な教訓をここに生かし——敵の橋頭堡^{きょうとうほ}ともいえる三井寺を攻めつぶすやいな、まだその炎もさかんなうちに、

「この勢いで、洛中へ突きすすめ！」

と、はやくも次の段階へ指揮を振るツていたものだつた。
そして味方一同の勝ち誇りにも、

「まだ、早い」

と、勝鬨かちどきも揚げさせていなかつたほどなのである。

が、諸軍はとにかく、北畠顯家の奥州勢は、ここの行宮あんぐうに着いてからさえ、休息なしに参加していた長途の兵なので、

「余りにも……」

と、その疲労を思いやる声もあつた。けれど義貞は、

「いや、ここで弛むより、洛中の一ヵ所を占領して後、ゆるりと草枕に休むがいい。逢坂越えはあと一気ぞ」

と、耳もかすことではなかつた。またすでに暮ぼしよ色の頃なので、

兵に腰こしがて兵糧を摂らせようとする諸将もあつたが、
 「すべて次のさしづを待て。もし飯を食つてなどいる間に、洛中の尊氏、直義が大挙してこれへ来たら、三井寺の一勝も、またたちどころに水の泡となる。この勝ちを、勝ちときだめるまで、少々我慢せい」

と、これをすら無視して、全軍すぐ前進に移つていた。だからその迅さには、山科やましなにいた高ノこう師泰もうやすの一陣さえ、ひとたまりなく一掃いつそうされてしまい、三井寺の崩れの中へ、さらに敗走兵を大きく加えて、ごつた返しに、三条口までの坂道を、黒い流れが、逃げおめいて行つた。

「保たもつツ、瓜うりゅう生たもつ保つ」

と、義貞はそれの追撃に躍り逸^{はや}ツている馬上から後ろを見て—

「瓜生の勢^{せい}はちよつと待て。そちの隊は何人いる?」

「百五十人がやや欠けました。およそ百二、三十人、あとに駆けつづいておりまする」

「よしつ。その者どもの笠^{かさ}印^{じるし}をみな脱^とつて捨てさせろ。そして、敗走する敵の中へまぎれ入り、偽わツて、敵陣の中へ敵兵となつて潜り込め」

「あつ。心得ました」

瓜生隊の中には忍者組織があつたのである。同様な第五列に馴^なれている者は、越後新田党の羽川一族や烏山一族にもある。

義貞は、それらの乱波隊らつぱたいにも、むねをふくめて、ぞくぞく、敵の潰かいらん乱状態のうちへ味方の第五列を送りこんだ。

宵はすでに暗かつたし、三井寺衆徒のうちには、正規の僧兵のみでなく、服色一様でない土民兵もたくさん交じっていたことでもある。——そのうえ細川、高こう、仁木、西条など、けじめもつかぬ泥なづンこな兵ひょうどもが、われがちに三条河原を逃げ渡つて、対岸の足利陣地内いのちへ混こんみ入つたことなので、尊氏、直義の帷幕いばくでは、まったくこの手には気づかずいた。

三井寺の失墜などは、いわば一橋頭堡の争奪にすぎず、それへ主力をうごかすまでのことはないと、たかをくくつていた尊氏も、「なに」

と、耳を疑い、

「着いたばかりの奥州勢も加え、敵は義貞以下、総勢をあげて、三条口へ出て来たのか」

と一驚を喫したようだつた。——が、それはまだ宵のくちのことで、——あわてて彼もその本陣を三条北の河原から悲田院址へかけて押しすすめていた。

そして偵察を放つと。

義貞は、自己の陣地を、粟田口から十禅寺ノ辻の辺に占め、楠木勢は、祇園林ぎおんばやしへ下がつて潜み、最勝寺の森には千種ちくさ、名和。
——また吉田山周辺には、北畠顕家らの奥州勢——結城ゆうき、伊達、
南部、幾多の陣が、加茂川の一水を前に、たとえば碁石ごいしをつらね

たように望まれるとある。

「さすがは」

尊氏はその手際を聞き、

「義貞は戦上手よ」

と、淡々としてつぶやいた。そして、

「義貞は元来、平場（平地）の駆けを好み、またそれが得意の騎馬隊が中心なのに、前に川を当て、後ろに山を負つた布陣は、どういう腹か」

と、すこし無気味な感を抱いたふうでもあつた。

おもえば、百余年来、郷国を隣にし合い、代々確執かくしつをつづけ、和解また不和をつづけて来た新田と足利とは、ここにその総決算

をつけるべき宿命を、長い月日にかけて作つてきたものかもしけない。と、ひしひし、闘志に胸を打たれながらも、

「すべてはわが大望の素地したじだつた。そして義貞もまた、この尊氏つちもの士持ちしてくれた一人とすれば憎くもない」

尊氏は苦笑をたたえた。

だがこの夜、彼の不敵さ以上にも敵を呑んでいた者は、義貞であつたろう。義貞にはすでに必勝の算があつた。悠久、その夜は休んで朝を待つた。

十七日、夜は矢さけびに明けた——。両岸の矢いくさに始まり、やがて加茂川河原の上下にわたつての接戦となつた。くわしい一騎打ち合戦はここでは省く。はぶ——が、ただ乱軍中突とつとして、新田

方の第五列が尊氏の中軍に大混乱を呼び起したことだけはのぞきえない。——このため、足利軍は総敗北におち、一時、北野から七条、九条へ遠く退いた。

しかし官軍側も、追撃また追撃にまかせすぎて、あまりにその力を分散させ過ぎた嫌いがある。これが司令者の一失であつたことは、その晩のうちに証拠だてられた。

いちど総退却した足利勢は、夜半からふたたび活動をおこし、全市の路地にくたくたとなつて 駐ちゆう うとん屯とん していた官軍へ逆襲さかよせをかけてきたのである。

まつたくの暗闇合戦で、この市街戦では、新田の重臣、船田ノ入道義昌が戦死し、千葉ノ介高胤たかたね、由良新左衛門なども、巷ちまたに

仆れた。

総じて官軍は、わけて義貞の旗は、派手な敗れ方をして、きのうの戦果も、いちどに画餅としてしまつたのだつた。

ぜひなく、官軍は川の東へ、総ひきあげを呼び交わし、加茂の上流、糺のへんへかたまつた。そして徐々に、叡山山麓の西がわ——西坂本、雲母坂——へかけて厚い布陣をみせ、なお次の新手を翌日には加えていた。

このさい。俄な新手が補強され出したというわけは、先に、洞と院ノ実世さいよを大将として、信濃へ入り、やがて義貞の本軍と会合すべき計画だつた東山道軍の七千が、

「主戦場は都へと変つた」

「いまは引つ返せ」

と、遅れ走せながら、前夜、行宮の下に帰り着き、そしてすぐ前線の配備へと廻されていたためだつた。

これに、三千の僧兵も、向きを変えて、叢山の布陣は、すべてここに、

山の東側から西側へ

と、まつたく移つた。——そして以後の十日間——正月二十七日までは、両軍共に、次の大決戦にのぞむべく、その陣立てや整備に過ごし、物見同士の小ゼリ合いのほかは、たいして見るべき戦もなかつた。

状況は、いわゆる四ツの相撲になつたのである。

もしこの期間に、尊氏が期するところの、

持明院統の三皇

に接近するの機会をつかみえていたなら、なんらかのかたちで、彼の軍旗の上に、それが^{せんめい}闡明されていてあろうが、ついにその様子はみられなかつた。——一色右馬介そのほか、尊氏の秘命をうけて戦陣もよそに八方奔命していた者どもも、いまだになお、目的への暗中摸索をつづけているに過ぎないものか。——とにかく尊氏にすれば心ならずも賊軍の名の立場のままで、ついに二十七日合戦の大戦争へ突入するしかないものとなつていた。

しかも彼はこの日の戦いで大敗した。

賊軍、逆賊、不逞な反軍と、口にまかせて敵が罵る声々をあび

て彼の部下は総くずれに崩れ立つた。——錦の旗の前に脆かつただけではない。——洛中の食糧不足に足利勢の兵色がとみに痩せ飢えていたことがその敗因であつたと言いうる。

すでに、洛中占領の当初から食糧政策には欠けていた。いや皆無であつた。都へ入れば食糧はあるものときめ、兵たち個々の心理までおなじだつた。

ところが、官の廩倉も公卿の私物もほとんど他へ移されており、疎開民家ときてはなおさらで一ト釜の粟すら残してはいなかつた。したがつて足利勢数万は、入洛以来、勝手な食い漁りによつて生きていたのである。軍律がよく行われるはずはない。また“軍の悪”を伴わずにそれのできるわけもない。

「悪兵は用をなさず、か」

大敗した尊氏はすぐそのことばに思い当つていた。

それにもしても、この日の惨敗はみじめ極まるもので、主戦場となつた下り松から糺河原のあいだでは、彼が若年以来のまたなき相談相手だつた叔父の上杉憲房を敵の圍中に亡くしてしまい、また、味方の大名、二階堂道行、三浦貞連、曾我ノ入道などをも、随所の激闘で、あえなく討死させてしまつた。

「だめだ！ もはやここでは」

気がもろい。というよりも彼にはすぐ先の見通しがついてしまう。しかし、勝負は時の運、最後の最後までは――としているのは、いつもながら強気な弟直義の血相だつた。

彼はどこまで 眞きょうしょう 将しょう 直義の風を失わない。二十七日合戦の挫ひる 折ひれにも怯ひるまず、

「戦下いくさべた手

の兄者はとかく指揮しげをあやまる」

と、尊氏を後陣に庇かばい、自分が中軍の総指揮そうしげをとつた。

直義の督とくせん 戰せんとなると、麾下きかの將士はみな死神の鞭むちを聞くよう

に、武者肌ぶしゃはだをそそけ立てた。かならず、死人の山を越えさせるからであつた。

「退くやつは斬るぞ」

その叱咤しつたを、振り向けもしないのだ。兵は発狂状態をやがておこす。——二十八日合戦は、こうして加茂の一角で勝つた。

これに満足する直義ではない。天まだ暗い翌暁からさらに攻勢

を烈しくして、

「もうやす師泰と、下り松を占れ」

と、号令していた。

こう高もうやすノ師と泰すどうみちつね、首藤通經らが先陣して、午ごろ、そこの敵しゆうも一蹴しゆうし去つた。

すると、どこからとなく、

「——敵は大原から龍華りゆうげご越えして、北国街道へと、徐々に逃げ
退いている」

と、聞えた。

義貞も、また行宮あんぐうも、叡山えいざんをすてて、一時北陸へ避ける用意

らしいという風聞なのである。

「それみろ。味方が苦しいときは敵もまた苦しいのだ。兵力の底はつき、叡山の兵糧も乏しくなつたに相違ない」

と、直義は誇つた。

が、その見解を、甘い見方として、

「いや、敵の偽計だ。おそらくは乱波らつぱの流布るふ？」

と、いさめる声も多かつた。石堂、荒川、仁木、畠山などの部将らだつた。

こんな乱軍中の浮説が、いかに危なツかしいものであるかの実例には、つい十日前の闇夜合戦のあとでも、

「敵將の楠木正成と脇屋義助が昨夜討死した」

と、その首まで拾つて来て立ち騒いだことなどある。もとより

それは偽首にせくびだつた。が、偽首と分つたあとの空々そらぞらしい敗北感はいつまで後味わるく尾をひくものであつた。

果たして。——官軍方の北国落ちなども、その日の夕には、第五列の流言とわかつた。しかし、そのときもう直義の軍は深入りをしすぎていた。敵は、山に拠り、夜を待つていたものらしい。

雲母坂きららざかにいた山法師の一軍、赤山明神下の洞院ノ実世さねよの七千人。これが一時にうごき出すと、鼓こを合せて、白川越えの上や鹿ケ谷たにのふところでも山を裂くような武者声がわきあがつた。新田義貞、義助の一万余騎だ。

そして、山科から栗田口へかけても、北畠顕家の奥州勢が、とつぜん、直義のうしろを通つて、いきなり二条の尊氏の本陣へ、

突進していた。

形からみても、足利軍は、四分五裂のほかなかつた。

そのうえ、楠木、名和、千種などの、昼から陣旗をひそめていた部隊が、五条、七条を渡河して、

「逆賊、のがさじ」

と、尊氏の退路とみられる所へ、所かまわざ火を放^つけた。

尊氏の旗本は奮戦した。明け方まで市街の辻でふせぎ戦つた。

——が、驚くべきことが起つた。二引両の足利旗の真ん中に墨を塗つて、急に、新田旗の一引両の旗に揃え直して持ち廻つている隊がたくさんある。——早くも寝返りが続出していたのであつた。

尊氏の行方、直義ただよしの生死、それすらも諸説紛々ふんぶんで、かいもく、一時はわからなかつた。

が、あれほどな足利勢も午頃ひるごろには洛中ろくちゆうのくまぐまにさえ一兵も影をみせず、遠く丹波境の山波の彼方へ没し去つていたことだけはたしかであり、さらには、まだ諸所の屍かばねもかたづいていないこの生々しい戦塵せんじんの中へ、はやくも後醍醐の還幸さえ見られたのだつた。

その日は正月の三十日で、尊氏の洛中没落も、園太曆えんたいりやく、元

弘日記裏書、建武三年記、どれもみな同日の事としているのをみ

れば、天皇には、「——尊氏、退く」と聞き給うやすく、叡山の行宮あんぐうをひきはらつて、

「都にあらでは」

と、即日、御座ぎよざを洛中かえへ還されたものとみえる。

まる一ト月の余であつた。宫廷すべての大御家族を連れての御動座どうざでもあつたから、一日もはやく元の御所へと願う女によしょう性たちのせがみも容れての還幸いではあつたろう。しかし、敗退したといえ、なお丹波境には、足利勢の蠶しゆんどう動かえも充分ありうるのを見こしながら、その日すぐ御座を洛中かえへ還すなどは、よほどなご確信のないかぎり、よくなしうることではあるまい。

しかもである。

「内裏は一時どこへおく？」

と、御隨身以外の者はそのおちつく所もまだ知らなかつた。——なぜなれば去年こぞお立退きのさい、二条富小路の内裏はすでに焼けうせている。——そして元々の大内山は大内裏造営工事の工もいまだ半ばのままで、しょせんお入りあるにはたえない。で、一時、鳳輦ほうれんは、

成就護國院

へ入らせられたが、ここも手ぜまやら御不便となつて、あくる日すぐまた、

花山院亭

へお移りになつた。

いかに難に屈しない御性格のみかどであつたことか。翌二月二

日には、はやくも仮の政庁にたつて諸政や軍務にたずさわつておられたのだつた。過般來の合戦にぬきんでた功のあつた人々への御感の軍忠状には、ままこの二月二日付けのものが多い。わけて北畠顯家あきいえ、結城宗広ゆうき、その一族、田村の莊司しょうじらへの感状には、

遠路をしのぎて

たちまちに参さんらく洛し

おん大事に会ふの条

御感ななめならず……

という特別な叢慮えいりょも辞句にはいつていた。またそれに徴してもこれ以外のあまたな將士にもそれぞれ何かのかたちで嘉賞の沙

汰が一せいにおこなわれたのはいうまでもないだろう。

洛中はこうしてさかんな凱歌にわいた。この声につられて山野の疎開者もたちまち元のわが家へ帰つていたろう。すなわち、一日のまもおかなかつた還幸の急は、洛民へのそのねらいが第一であつたものとおもわれる。

一方。——一時は戦死説までつたえられていた尊氏、直義のふたりは、途々、みじめな残軍をかきあつめては、これをひきつれて、丹波の篠村しのむらへ落ちのびていた。——こここの篠村八幡は、彼が弱冠じやつかんのときの曾遊そうゆうの地。また、彼が反北条の旗上げをした地。——思い出多い三度めの宿命地だつた。

九死に一生をえてたどりついた篠村八幡の森は、尊氏に再生の

思いだけでない何かをさらに誓わせていたにちがいない。

ここには、かつて自分が旗上げの日に籠めた願文がんもんがおさめられてある。——一には世のために、二には朝家のため、三にはわが源家再興のため——と素志そしを天にちかつた願文だつた。そしてついにそのどれもまだ達していないのみか、かえつてこんな蹉跌さてつからみじめな惨敗をみてしまつた。

「直義」

「は」

「いたか」

「途中、何度かお姿を見失いかけましたが

「つかれたなあ、さすが」

「茫として、つかれた感じすら今はわかりませぬ」

「そんなことではならぬ。まずおちつけ。こここの御堂は尊氏にとつて、何かといえば峠の茶屋のような憩いの場となつてゐる」

拝殿へむかつて礼拝らいはいはしていたが、ことばどおり彼はここを峠の一床几しょうぎとしているのだろう。階きざはしの一端に腰をおろして、さて？

とここまで帰結やこれからの方に向にしばらく思案顔だつた。そして旗上げ当初は何もかもが順調であつたが、さいごへ来ては事すべて、自分の布置ふちや考えとくいちがつてむりな戦をあえてしてきた手際のまづさに思いいたらずにはいられなかつた。

「直義、妙源はいるか、引田妙源は」

「ついに見えませぬ」

「師もうなお直は」

「師直、師泰の兄弟も」

「いなか」

「ほかの道へ落ちたものとみえまする」

「道誉はどうした?」

「神樂かぐらケ岡おかの合戦までは見えましたが、さて、這奴しゃつのこと、いか

があろうかわかりません」

「では、近江路かの」

「おそらくは、道誉もまた、味方の敗北と共に、二引両の間を墨で塗りつぶした旗をかつぎ廻った組の一人ではありますまいか」
そこへ宮司が見えた。尊氏は宮司のあいさつをうけたのち、さ

つそく兵たちに食わせる炊出しの手当を依頼したので、ここまで共に落ちてきた人員を点呼てんこさせてみると将士あわせてわずか二百余人にすぎなかつた。

ほどなく土地の内藤三郎兵衛道勝どうしょうも来て大釜で粥かゆを煮に、兵の飢えはしのがれたが、尊氏はなお、腰糧こしががて三百人分を道勝の手に託して、

「こよいは休み、ここは、明朝立つ」と、ふれさせた。

あくる朝、ここを立つさい、彼は篠村八幡宮へ佐伯ノ莊さえきしょうの一部を寄進して、所願成就しょがんじょうじゅの祈りをこめた。そのとき今川範のりくに国こくが、

「（）先祖義家公にも、奥州征伐のみぎりには、ただ七騎とならせ
給うた例があります。はじめの負けは御当家の佳例かれいかと覚えます
る」

と、なぐさめた。

尊氏は、大きにさようだと、うなずいて、

「負けもよし。ふかく思えば、きのうまで勝つてばかりいたこと
のほうが、むしろ不吉だつた」

と、左右へ言つた。

その朝（二月三日）の情報によれば、官軍は西山峰ノ堂から大
江山ぐちまでは追つてきたが、以後は見えないとのことだつた。
さらば行けと、尊氏は裏丹波を西へさして行つた。

尊氏の行くての先は兵庫であつた。山陽道と四国をむすぶ兵庫を無視して勝目はないとしていたからだ。

その兵庫への道を、彼の落ちてゆく残軍は、裏丹波の三草へとつた。この道は寿永じゅえいのむかし、源義経がひよどり越えを突いて出たときの間道である。おそらくは尊氏、直義、敗残の将士、たれの胸にも、なにかの感慨がなくていられなかつたろう。

いま向ふかた方は明石あかしの

浦ながら

まだ晴れやらぬ

わがおもひかな

尊氏の歌である。

彼が三草みくさ越えの途よで詠んだ歌として歌集「等持院殿（等持院は尊氏の院号）百首」のうちに載つてゐる一つである。おもうに三草の山間のまだ残雪もまだらな道を疲れた馬にゆられつつ行く途中でふと矢立の筆をとつてたれかに示したものではないか。

だが、この歌の意味は、どうにもとれる。

大望の道、まだまだ遠し、とする心にも。

または、やるかたない敗軍の将の断腸だんちょうの思いとも。

あるいは、家郷をも失わせて、ちりぢりにさまよわせている子や妻や愛する者たちへのつぶやきかとも解いて解かれることはない。

もしたれかが、

「さようなお歌の意にございましょうな」

というとしたら、尊氏は「うん」とうなずいて、わが意をえた
りとしたろうか。おそらくはそのどれへも笑つてうなずいたかも
しれぬ。けれどもわが意を解いたものとはしないだろう。——彼
のむねに、まだ晴れやらぬ、思いをなさしめていたものは、逆賊
尊氏の汚名を着たままやぶれ去つて行くことだつたにちがいない。
篠 村八幡しのむらへこめた願文がんもんにも、彼は国内平安と朝家の御為を
うたつている。家の名をはずかしめずともいつている。また彼の
思想からも元々、逆賊叛臣ほんかいが本懐ではない。やぶれは時の運と
観じ去つても、それだけはなにか拭いきれぬような——晴れやら
ぬおもい——となり、口でいえぬ歌となつていたかにおもわれる。

「介は、どうしたか」

彼が、切望に切望していた持明院統のじみよういんとうお一ト方による院宣いんせんはついにこの日までまだ手にすることができなかつた。

右馬介をして、序戦のうちからそれの宣下せんげをいただくべく、八方、奔走させていたことではあつたが、ついにまだなんの音沙汰も今日までない。

日野資名と行き会えないのか。小右京の行方もさがし出せずにいるのか。あるいは、後醍醐の大覺寺統だいかくじとうの警戒の目がきびしく、後伏見、花園、光嚴こうごんのどなたにも近づきまいらすことができず、にいるのか。

「……さても」

と、彼にはそれが成るか成らぬかの便りだけでも待ちびさしかつた。万が一、事が絶望とでもなればいかにせんと、行くての明石の浦すらも暗い未来におもわれてくるのだつた。

道は播磨へ入つた。

山路を降り、明石の大蔵谷へ行きつくと、この方面、垂水、須磨、兵庫へかけては、たくさんな味方が落ち合つてしているのがわかつた。高ノ師直こう もろなお、師泰もうやす。赤松円心。細川定禪じょうぜん。——吉良、仁木、石堂らの一族。そして佐々木道誉もまたそれらの敗退軍のうちにまじつていた。

「おお御無事だつた」

桃井直常、引田妙源らが、まつさきに来てよろこびあい、

「どれほどおさがし申したことかしれませぬ。すぐ味方じゆうへ」と、これを兵庫から播磨境までの諸所へわたつて触れわたした。明石の陣は、一夜にすぎず、尊氏は次の日さつそくその陣所を兵庫（現・神戸市）へすすめた。——港にちかい逆瀬川さかせがわの川ぐち、魚見堂を本営地として、ここに敗軍の再編成と再挙反撃の床しよをさだめたものだつた。

兵庫は建武の初年いらい楠木正成の勢力範囲にはいつている。が、正成の代官もここに見えなかつたのはいうまでもない。生田、和田ノみさき、会下山えげさん、湊川、見えるところの山野は、期せずして先おどとい頃からこの地方へ逃げ集まつて来た足利方の兵馬だつた。

「兄上」

直義ただよしはすっかり意氣をもち直していた。

「なおこれほどなお味方はのこつています。そのうえに今朝、鞆とも
ノ津つからの早馬もありました。それによれば、かねて御教書みぎょうしょを
発しおかれた周防すおうの守護、大内長弘ながひろ、長門ながとの守護、厚東こうとう一族
らが兵船五百そうの帆を揃えて、もうつい播磨沖まで、ご加勢に
近づきつつあるよしにございまする」

「おう」

と、尊氏も眉をひらいた。これも待ちに待っていたものである。

「大内や厚東こうとうの船手がみえて來たとあるか」

「ご安心なされませ。つづいては九州の大友、相良さがら、島津らの後

陣も馳せさんずるにちがいなく——それにこの地にあれば兵糧の憂いもないこと。兵馬にはここ幾日かを休養させ、ふたたびの御指揮あらば、義貞の勢せい^{ぞうき}をけちらして、洛中をとりかえすことも、なんの造作ではございません」

だが、直義のいうようなものでもない。その事実はまだ軍の裝備や編成まつたも完からぬうちに、ここへはひんぴんと入ッて来た破竹はちくな敵の大軍の情報によつても分つていた。

いわく。

八幡やわた、山崎の線を死守していた武田信武は、ついに官軍の大兵にもみつぶされて、多くは官軍へ降参し、大将信武は、いまのところ生死も不明——と。

また、二次の報では。

楠木正成は、神崎川から難波の浜をひだりに御影街道へ急進をしめしており、脇屋、宇都宮の二軍も伊丹野から西へうごき出で、さらにそのうしろには、北畠顕家の万余の兵、新田本軍の義貞朝臣あそんが旗じるしなど、霞かすむばかりな厚さをなし、その兵数もちよつとつかめぬほどだという。

尊氏の床几をめぐる性急な軍議では、

「この不揃いな装備のまま打つて出るのは如何なもの？」

と、ひとまずは、受けて守るが利とする説が多かつた。

「すぐうしろには摩耶山まやさんの險がある。摩耶とこことはわずか五十町。よろしく御大将と御舍弟とは、摩耶をとりでとして、そこへ

ご籠城ろうじょうがよろしからん」

という意見なのだ。

すると、佐々木道誉が、笑つて言つた。

「それはまずかろう。いちど大負けに負けているうえ、両大将が山城やまじろへ入りこんで、および腰な御指揮とあつては、士気が立ち直れるはずもない。また遠方にあるお味方への聞えも悪い。始終の利こそ大切と思わるる」

道誉というと、たれもが蔑さげすむ。しかし尊氏はうなずいた。そしてすぐ断をくだした。

「よくいった。道誉の言はただしい。攻勢に出るとしよう」

ちらと、直義に不満がみえた。自分がいたかつた主張を、道

誉に先せんを越された不快さかもしなかつた。が、尊氏は、気づいていたかどうか。

「直義、異議あるまいな」

「ありませぬ」

「ではすぐ布令ふれいしろ」

「は」

「先陣には、細川、赤松」

「いや私も」

「よし、直義もまいれ。次いで尊氏も馬をすすめよう。道誉はわしの中軍に付け」

そのほか、指令をうけた各将は、すぐ軍議の場から散つて行つ

た。そしてこの日もう六甲のふもとや御影附近みかげでは物見隊の衝突があつた。

いかに官軍側の急追が怒濤の急であつたかわかる。またすでに、敗残の賊軍などただ一掃いつそうのみとしていたかもわかる。

その官軍の先鋒は、西の宮に陣していた楠木正成の手勢だつた。——いまはこの人も河内、和泉の守護職である。——その勢力もかつての南河内の一土豪にすぎなかつた頃の比ではない。そして千早金剛ちはやこんごうで鳴らした往年の勇名だけはなお生き生きと全土の武者の記憶にふかくのこつている。——だからそれに直面した敵は、

菊水の旗と見れば、

「ぬかるな」

「計られるな」

「めつたに出るな」

と、かたくなつて、つねに手固い対陣になりやすかつた。

御影^{みかげ}の前哨戦から二日後、両軍ははやくもこの 膠着こうちやく 陣形に

おちてしまつた。いや、「菊水の旗も、鬼神の魔符まふ^{とつかん} ではあるまい。

正成、何ほどのことやある」と、あえて 呐喊とつかんをこころみた細川阿波守の弟頼春が、序戦をし損じ、自分もまた重傷を負つて仆れてからの膠着だつた。

ところが、どうしたのか。

菊水の旗は、一夜のうちに、どこへか見えなくなつていた。前線から後陣へまわされたふうなのである。——或る説では、河内

へひきあげてしまつたなどの噂すらあつた。

しかしそれは事実でない。足利方の乱波の探しでは、三日にわ
たる膠着戦もとが因もととなつて、正成と尊氏とのあいだには微妙な黙契
があるらしい、どうたがわれ、両者は款かんを通つうじてゐるものだ、と
の声が官軍内にばつとさかんになつたことが、その第一の原因ら
しいと、尊氏の床几へも、さつそくな密報がきていた。

「そうか」

尊氏は、誰へも言つていない。じつは自分がやつたことをであ
る。

彼は正成をきらつたのだ。正成とは戦いたくない。むしろ味方
に求めたい。他日を待つても彼とは共に天下済世さいせいのはかりもじ

つくりはなしてみたい。

だから避けたのだつた。尊氏は、正成宛ての懇ろな書簡を書いて、それを兵の肌に持たせ、わざと捕まるように、昆陽野方面の敵中へ放したのだ。伊丹には義貞の弟義助が陣している。義貞は疑いぶかい、勇将だが、惑いに弱い質まどたちである。かならずや、正成を観る目に変化をおこすにちがいない。——そう考えてほどこした計だつた。そのため、おそらくは義貞と正成とのあいだに、一紛争がおこつたものと想像されうる。

「だが、正成には氣の毒」

と、ほくそ笑みにも、ふと惻隱そくいんを抱く尊氏だつた。

ひろい六甲の山野から打出ヶ浜の長汀ちょうていへかけて急なうづき

がみえだしていた。

正成の菊水旗きが後陣へ消え、代つて、脇屋義助の軍が、武庫川むこがわのかみから急下してきた朝からの緊迫した鳴動だつた。

「賊軍の息のねをとめる」

となす総攻撃の開始か。

新田義貞の本軍と、それの左翼をなす北畠顕家の万余の兵も、すべて、昆陽野こやのから芦屋へと、前進をみせている。

いや、足利方にとつて、もつと脅威的なものは、有馬越えから六甲の中腹を通つて住吉川へ出て来ようとする一軍の敵もみえていたことである。——これが越後新田党の精銳だとわかつたときは、さすがの直義ただよしも、

「しゃツ、一大事だ」

身の毛をよだてずにいられなかつた。——もしその猛兵に破綻はたんをゆるせば、御影から西の宮までの味方は——敵のふくろの中の物になつてしまふ。

「もうやす師泰、師泰。山の手へ向え。おおつ、細川定禪も、住吉、岡本の辺を踏んまえて、有馬ぐちの敵をふせげ」

彼は声をからした。

そして直義自身は、赤松円心の手勢とがつちりくんで、浜寄りのなぎさと、昆陽方面こやひらとから西進してくる敵へむかつて、その陣を扇なりに展いた。——あらゆる形勢、また条件からも、勝敗は、今日じゅうのものとみえてきた。

この急迫を見ては、はるかうしろな尊氏の陣といえ、戦ぎ立たずにはいられない。

尊氏のまわりには。

高ノ武藏守師直、吉良左兵衛さひょうえノ尉じょう、桃井修理亮しゅりのすけ、大高伊予守、上杉伊豆、岩松の禪師らいし頼有らいゆう、土岐彈正、おなじく道謙どうけん、佐竹義敦よしあつ、ほか三浦、石堂、仁木、畠山などから老臣今川範国までがかたずをのんで前線との伝令をとつていた。また佐々木佐渡の判官入道道誉もこの中の一人だつた。

刻々の戦況をききながら、尊氏はこのうちの将を引き抜いては、「繁氏しげうじ（細川）。山の手の助けに行け。三河ノ三郎（吉良）。

なぎさづたいに御影みかげの後ろうしろ詰めづめに駆ける」

と、しばしば、応援をおくり出していた。

——するうちに、この日、明石の沖あいに、大小数百そうの兵船群が列をなして見えてきた。これがわかると陸くがでは兵庫から生田、御影へかけて狂喜の歓呼かんこがうねりのようにつたえられ、「長門ながと、周防すおうの兵船五百がここへ着くぞ。大内、厚東こうとうがお味方なるぞ」

と、歓呼しあつた。

けれど次にはやがて大きな失望と戸惑いが諸陣の兵の顔を吹いた。——兵庫島へ着いた兵船も多かつたが、うち二百余そうの船影は、足利方の陣を横にみながら官軍方の旌旗せいきをさがして西の宮の南へ着け、ただちに兵をあげて、義貞の指揮のもとに就いた

のだつた。

あとでは分つた。

四国の宮方、得能とくのう一族や土居どいの軍勢だつたのである。それが海路の途中ではしなく足利方へ加勢におもむく船団とぶつかつてしまつたため、海戦には出なかつたが、相互、微妙な牽制けんせいをしあい、また、日時もよけい費やして、同時にここへ着いたのである。そしてすぐ敵味方の岸へ別れたものだつた。

官軍方へも海上の新手が参加し、足利方の兵庫島にも周防すおう、長門の大船団が加わつたので、たたかいはいやがうえにも大きくなつた。そしてまた、その日は勝敗もつかずに暮れてしまつた。

あすこそは――

と前線の直義からは、尊氏のいた摩耶山麓へ、意氣さかんな伝令があり、

——きっと勝運をひらいてみせます。大内、厚東の新手の勢も参着したよし。ねがわくばなおぞくぞく、新銳の隊を、前线へおくり出し給わりたい。

と、いって来た。

よし

と、尊氏は答えに附して、なお、かんたんに、

さあれ、義貞は戦上手、わけて平場^{ひらば}は彼の得意だ、勢いにつられて深入りすな。特に兵力を分散するな。

と、注意をさずけて、伝令を返していた。

尊氏は夜すがら寝もやれぬふうだつた。彼の待ちかねていたこと（持明院統の院宣）はもう絶望にちかい。直義をはじめ奮戦の中にある諸将はすべて強氣だが、いくさを意氣だけで勝てるとする単純にまではなりきれぬ尊氏もある。あすの勝敗にかかるらず、彼のあたまは大局から万ーのときの副線へも思いをいたさずに入れなかつた。

やがてのこと。——道誉がそつとそこへ呼ばれていた。尊氏のあたまの氣泡が何かその一つをかたづけておこうと、急に思いついたものらしく、

「ほかでもないが」

と、声をひそめた。あたりは夜嘗寂^{せき}として、陣幕を透す外の篝^{かが}

り火が、かすかな明りを二人の間に見せて いるだけだつた。

「道誉。事にわかだが、御辺はここを脱けて、近江へ帰つてくれ
まいか。摩耶まやの裏を越えて、丹波へ出れば、敵にも出会うまい」
「ほ。……？」と、一驚のいろの下に「またこの道誉へ、寝返れ
とでも仰せあるか」

「いや、同じ手は二度効きくまい。しかし、たたかいも七分は勝目
なしとおもわれる。朝敵の名を負つた不利いかんともなし難い。
よし一時は勝つても、官軍の義貞には、いくらでも後詰ごづめがつづこ
う」

「さては早やお見通しか」

「尊氏は身一つのみのいくさはしておられん。多くの者の運命を

にのうておる」

「近江へもどれとの御意はそれか。伊吹には越前の前（藤夜叉）^{ぎよい}
と御一子不知哉丸いさやまるとが残してある。お気がかりよの」

「されば、尊氏がここに敗れて、しばらく京師みやこも踏めぬからには、
御辺の保護の下に、二人を頼みおくしかない」

「こころえ申した。したが千寿王どのや御台所は」

「三河においてあればこれはさして後顧こうこの要もない。万が一にも、
危うしとなれば、舟で落ちゆく島もあろうというもの」

それからも、両者のあいだには、たれ知らぬ密談が交わされて
いた。そして道誉はこの深夜ひそかに一族一隊をつれて、摩耶まやの
裏越えから戦線を脱落し去つた。

すると、すぐそのあとのことである。——夜の戦野から拾つて
来たと称して、物見組の一将校が、二人のかよわい者を連れ、お
そるおそる尊氏の陣幕とばりへそれを告げに来ていた。

尊氏はおどろいた。その物見組の一将校が語るのを聞けば——
「されば、有馬街道から西の野末のすえでございました。ひるの合戦に、
そこらは馬のかばねやら兵のむくろが算さんをみだしております。

しかるに、歩みも遅ちち々と、夜風の中をさまようている不審な人影
が見えますゆえ、馬をとばして行き、何者かと呼びかけますに、
逃げもせず、新田殿の者が、足利どの内かとたずね返します。
——おおよ、おれどもは足利方だと言つて聞かせますと、ならば
御陣所へ連れて行つて給われと、母子おやこして訴えるではございませ

ぬか」

「で、伴うて来たわけよな」

「はつ」

「草心尼そうしんにとはいわなかつたか。ひとりは、覚かく一法師とも「やはりお心あたりのある者で?」

「む、ちと有縁うえんの者だ。すぐこれへつれて來い」

有縁どころか、尊氏には叔母にあたるひと、また、いとこにあたる覚一なのだ。それにせよ、どうしてこんな戦場の夜をさまようていたものか。

まもなく丘の下から兵にともなわれて来るたどたどしい二人があつた。尊氏は陣幕とばりの内に入れて敷物を与え、そちらの将士をし

りぞけてから、自分も櫛たての上に胡坐あぐらした。

「尼前あまぜではないか。どうしてこのようなあぶない所へは」

「オ、尊氏さま」

と、草心尼は、旅のわらじのまま居住居をちよつとかえて。

「おもいがけなくお目にかかり、またお変りもあらせられず、こんなうれしいことはございませぬ」

「いや尼前あまぜ、六波羅にいた頃とは、大変りだ。其許そごたちの目から見たら、今の尊氏のすがたなど羅刹らせつのように見えようがな。……生きるか死ぬかだ。はははは」

と、自嘲して。

「が、われらは是非もない。これや宿業しゆくごうだ。したが、何も知

らぬ其許そこたちこそ、世の大波に、さぞや憂き目を見つらんと、ひそかに案じておつた。さるを、なぜ洛中を出て、戦場などへ」

「いえ、洛中こそが、居るところもない修羅地獄でございました」「おおそうよの。洛らくの北山も東山も、あの大戦では」

「あなたこなた、逃げさまよい、火にも追われ、ぜひなく、明石の知る辺をたよつて、淀の西をまいる途中、新田殿の御陣に捕まり、きのうまでは、御陣について、歩き暮れておりました」

「では、義貞のそばに」

「はい、むかしの世良田殿も、いまはいかめしゆう、総大将の陣座にわせられ、尼前あまぜよ、心配すな、そばにおれ、いくさはすぐにする。必定ひつじょう、尊氏は自滅か斬り死のほかあるまい。さあれ、

其許たち母子は、朝敵のとがに連なる者とはせぬ。——安住の地を与えてやろう、これにおれ——と仰せてはくださいましたが、なんぼうにも居耐え難うて」

「では、無断でそこを去つて出たのか」

「とは申せ、盲めいを連れていること。行き暮れておりますうちに……」

⋮

言いながら、尼は、うしろの覚一へいたいたしい目をやつた。

背の琵琶を重たげに、覚一はさつきから、墨絵の中の者みたいに、うつむいたままでいた。

覚一はやつれていた。

あわれなほど、草心尼にもそれは見えるが、若くして若さの影

もない覚一の瘦せは、ただの憔悴しょうすいともみえなかつた。心の減ほろびとたたかつてゐる苦悶に肉を削そがれている若者の頬骨だつた。

ひと言こと、ふた言こと……

尊氏は彼へはなしかけたが、たちまち目をそらしてしまつた。

何か、この盲法師が、無言の責めを尊氏へ責めているように思われたらしい。

しかし、覚一は、そんな片言も言つてはいない。人のしている戦いくさを、この地上の業ごうを、むしろ彼は、自分の罪業みたいに身のうちで憂悶してゐるにすぎないので。ただ理解しがたい人の世の相そ剋うごくぶりが彼には悲しくて恨めしくて、つい尊氏へも、多くをいわず、うつむきがちな姿になつてゐるものだつた。

「して？」

と、尊氏はすぐ、

「明石の、何処へ」

尼へことばを向けかえた。

「明石の浦に、うた和歌のお師、冷泉為定さまの古いお家があります
ので」

「はて、為定どのは、とうに亡きお方だが」

「いえ、幾たりとなく、歌の同門たちが、早くから戦を避けて住
もうております。わたくしたちも、覚一がお覚えをうけた東宮
の御門や女院さまにおすがりすれば、身の無事はえられましよう
が、覚一はそれを好みませぬ。またふと、ちまた巷で行き会うた右馬介

も、明石へ行くことがよいとすすめますゆえ、ならばと、思い切つて都を出て來たわけでございました

「なに。巷で、介すけに行き会うたとか」

「はい」

「いつ、どこで」

「つい都を離れる前の日ごろ。嵯峨野さがのの辻で」

「介のおる所を、その折、どこか聞かなんだかの」

「双ヶ岡ならびおかのさる法師の家にいて、小右京さまと共に、誰やら申す

元お公卿の僧を、懸命に毎日さがし歩いているとのことでございましたが」

「ああ、まだ日野資名どのに会えずにあるのか。……いや何」

と、急に語尾を消して、陣幕とばりの上にうすらいで来た空明りへ顔を上げた。

「おう、はやまもなく朝が来よう。朝ともなれば、たちまちここは戦場のちまた。そこ其許たちのいる所でない。……止めおきたいが置かれもせぬ。……妙源おらぬか。妙源」

「はつ。おめしで」

引田妙源の姿を、とばかりの裾に見ると、尊氏はそれにいいつけた。

「この二人を馬に乗せ、兵庫の魚見堂まで送らせ。そして、よういたわり取らせたうえ、さらに二人のたずねる明石の冷泉殿の家まで兵を添えてとどけてやれ。心ききたる兵数名をつけて、過

ちのないようにな」

「かしこまりました。では」

「おおすぐがよい。尼前あまぜ、覚一、また会おう。再会はまだ先の日遠いかもしれぬが、きつと会おう。その日まで、つつがなく暮しておれよ」

尊氏は何か、急に、心せわしげであつた。そしてこの二人を見送るとすぐ、薬師丸という小姓武者を、陣の内からよびよせていた。

未成年者は一様に童武者わらべむしゃとよばれている。

十三、四から六、七歳の年少もかなり軍中にいたことは事実で、うちには寵童もまじっていたといわれるが、尊氏には美童を愛し

ていたようなあとはない。その多くは将座に侍して、総大将の雑用をなすいわゆる“小姓組”に配されていた。

薬師丸もまたそのひとりで、可憐な童体だつた。髪を稚子輪に結い、朱胴しゆどう朱おどしの小具足き足を着、尊氏によばれると、

おん前に——

と、かたのごとく、いつもの恰好かつこうでひざまずいた。

「薬師丸か。もそつと寄れ」

「はい」

「そちはたしか、熊野山の別当法橋道有ほつきようどうゆうが乙子おどこ（末子）であつたな」

「はい」

「日野殿のお家と其許そこの別当家とは、浅からぬ所縁しょえんのあいだではなかつたか」

「母は日野家から輿こしい入れされたお方にちがいありません」

「そうだつたなあ。御一門の一家、日野 資すけとも朝ともき卿ようは、正中ノ乱に与くみし、大覺寺統の今上に忠誠をしめして佐渡ヶ島の配所で死んだ。……が、その御兄弟、資名すけな、資明の二卿は、持明院統につかえられ、例の、西園寺公宗きんむねの北山事件に連座して、いまはいづこかに蟄居ちつきよの身とか聞いておる」

「…………」

「いや、そのようなわけがらはいま申すにも及ばん。要は、そちの所縁がたのみだ。尊氏の旨をおびて、その資名、資明二卿のい

すれかに、いそいでお会いできる工夫はないか。わしに代つてだ。
どうじやな、薬師丸」

「できぬことはございません。おいとまさえいただけば」

「もとよりすぐ都へ立たねばなるまい。したが、右馬介以下十人ほどを、京にのこしおき、八方おさがし申すといえども、いまだに梨のつぶてなのだ。薬師丸、そちらなればどこを尋ねる？」

「まず醍醐だいごの三宝院へ行つてみます。あそこの僧正も日野家から出たお方です。それでも分らなければ日野ノ莊の萱尾かやお明神や、法界寺や、日野ノ里をくまなく訊けば、わからぬはずはございません。いづれは由縁ゆかりへお身を潜めているものと思われますから」「む！　たのもしい」

尊氏は俄に一縷の光を見いだしたようだつた。自分の待ちかねてゐる——いや絶望さえしかけてゐる——持明院統の皇の院宣をどうしてもその日野殿のお手から奏請して欲しいのだ——ということを、この薬師丸へ、熱意をこめて、いいつけたものだつた。
ならびおかの法師といえど、あの兼好にちがいない。右馬介がそこの庵に寝泊りして、八方、院宣の入手に奔走しておるよしを、たつたいま耳にした。……薬師丸、そちが介を案内して、日野どのにまみえ、首尾ようまち一日もはやく、院宣をくだし給わるよう、いまより急いでここを立つてくれい」

童体の一小武者に、このような大秘事を託して、二次の追つかけに洛中へやつたなどをみても、尊氏がいかにそれを急ぎまた重

要視していたかもわかる。一説には、これは赤松のりむら則村（円心）のすすめだともいわれている。

大覚寺統の君がたどしい皇統なら、持明院統の君もまたまぎれない皇統であることぐらいな常識は当年のどんな武者でも持つている。

だから赤松円心ひとりでなく尊氏帷幕いばくの老将たちも、その献言はみな尊氏へしていたにちがいなく、それも諸将の心に余裕があつた日のことだろう。

ところが、後醍醐のご警戒きびしく、当時、持明院統のおかたも、みな叡山へ移され、近づきまいらせる手がかりなどはまつたくなかった。——そしてやがて御帰洛を見たころには、足利方は

総敗北——洛外遠くへ没落の日であつた。

だから「梅松論」や古典「太平記」も、尊氏が院宣を請うための、薬師丸の派遣を、すべて三草越え以後のこととしているのである。さんざんに敗けいくさとなり、もうほかに手段もない切迫つまツての思いつきから、

このたたかひを

皇と皇との

お争ひになさばや

と彼が言つて、急遽、薬師丸をみやこへやつたという態に作らていれててしまつてゐる。

しかし、後にはこれが南北両帝分立の正因にもなるのである。

ここらは大いに熟考を要しよう。

かりにもそんな大秘事が、敗北のすえの土壇場へきて、俄に思いつかれたなどは、信じられぬはなしである。——尊氏の政治的才能からみても、それはすでに義貞を追つて、海道を馳せのぼつて来たころから——そして洛中合戦のあいだにも——四六時中彼の心にあつた重要政略の一つではなかつたか。

——けれど万事は休した。

その院宣はついに、西の宮、御影みかげの再起戦でも負け、完膚なきまで、官軍にたたかれたさいこの日まで、彼の手には入らなかつた。

「いまは」

と、彼はワラをつかむ気もちで、薬師丸まで追ッかけの使いにやつたが、しかしまだ元服前の一童子武者である。それへ大きな望みは望んでみてもムリだつた。

しかも戦況は、その日頃をきかいに、悪化の一途をたどつていた。今はすこしでも味方を損じまいとして、尊氏はしきりに退却をうながしたが、直義は頑がんとして退かず、細川、赤松らも遠くたたかつて伝令はまま切斷され、ために退軍の令もほとんど思うようにおこなわれなかつた。

これが救出のために、尊氏も馬を出してついには乱軍中の人となつた。

後世、伝承された“尊氏馬上像”はこのときの彼の奮戦像であ

るという。——ようやく、負けいくさの手勢を合^{がつ}して、兵庫の魚見堂へ、一族の諸将が落ち合つたのは、乱軍四日めのことであり、魚見堂伝説として、ここでは尊氏および直義が「——腹を切るべきか」「いや生は大事、死を急ぐべきでない」と、諸将共々、論議があつたなどともつたえられている。が、もとより尊氏には、自刃の意などは毛頭なかつたものと、断言してよい。

「これまで」

と、尊氏は見切りをつけて、ついに船へ移つた。いや逃げたと

筑紫びらき
つくし

いう方がここではただしい。

ただの陸地における総退却にしても、いわゆる“負け引き”には非常な危険がともなうといわれている。ましてこの折の足利勢がまたまた、大混乱におち、おびただしい犠牲を浜のなぎさに捨てたのはぜひもない。

かねて大小の兵船三百そうの用意はあつたが、

「すわ、大臣には海上へ移られたぞ」

と、おめきあつて、われがちに船へなだれこんだ一ときの騒ぎは言語に絶していた。うしろには早や官軍がせまつていたし、殿軍んがりとともに、すでに戦意はくずれていたことだつた。

溺おぼれ死ぬもの。あるいは、敵に捕われる者数千。余りに一そ

の内へ人や馬が混み乗つたため、満載のまま、くつがえる船さえあつた——と古典はその惨状を写すに文字を惜しまずつかつている。

尊氏もいまは、非情に、

「つづく者はつづいて来よう。わが船よりまづ帆をあげて西へ急げ」

と、船手の者を、せきたてた。このさい、時をかせば、官軍方にも四国の兵船二百余そうがいたのである。海上で包囲されるおそれも多分にあつたのだ。

それゆえ、掩護えんごの船列も布いたろうが、とうてい、秩序のある船出などではない。さきへ行く尊氏の船を目あてに、あとあとか

ら、帆に帆を慕つて行つたことだつた。——ために陸へとりのこされた残軍はまた残軍で、陸路を西へ、離々^(りり)続々、落ちのびて行くのも見えた。

もしこの機に、官軍方が、陸上の顧慮を一切おいて、

「今こそだ。足利一族を海のもくずに」

と、すぐその戦力を四国船隊の上へ移して、海上、さらに追撃をつづけていたなら、おそらくは尊氏もついに逃げきれなかつたかもわからない。——が、なぜか義貞はそれを敢行しなかつた。

野戦の驍将^(ぎょうしよう)も海には自信がなく、ふとためらいを抱いたのか、でなければ、

「これほどに打ちたいたこと、尊氏とて、もはや再起はおぼつ

かなかろう」

と、敵を見くびッての、驕りおごりであつたとしか考えられない。もつとも、官軍側には、公卿大将も多かつた。そして古来、堂上の制としては、

宮闈きゆうけつの下もとのほか

畿外きぐわい諸国しょくこくの動乱は

これを追捕つあぶの任となし

追捕は武士を以て任ず

というのが朝廷の本則だつた。だからいまや海に陸に逃ちようさんする離々たる敵影を見た公卿たちは、この習例をよい口実に、

「あとは、義貞まかせ」

とし、義貞もつい、

「まずは兵馬を休めろ」

と令して、みすみすここに長蛇ちようだをみのがしてしまつたものではなかつたか。

なにしても、ここは尊氏の僕ぎょうこう僕こう といふしかない。——彼の

乗船、およびそのほか大小の兵船は、乱離な影を明石海峡にみだしながら、ひとまず播州室ノ津ばんしゅうむろづの港へさして落ちたのだつた。

僕こう僕こうといふば、海上での風向きも、その日は、尊氏に僕さいわいて、「梅松論」には、

お座ざふね

辰ノ刻たつこく（午前八時）に出さる

俄に、西風吹きけり
これ
是はたつと云つて

追手なりければ

寅ノ刻（翌・午前四時）

ばかりに室ノ津へ御著

とあり、また。

もし順風なくば

一期の御浮沈たるべきに

ひとへに

神仏の御加護也なり
とて

下御所（直義）には

渡海のあひだに
舍利ノ御剣を

龍神へ向て海底に沈らるしづめ

と書いている。これでみても尊氏以下の兵庫脱出の困難さが、いかにあぶないものだつたか、想像以上なものだつたろう。

それとまた、あの不屈な直義すらが、その僥倖に感謝するの余り、自己の一剣を波間はかんへ投げて、船上から龍神を拝おろがんだという一事などもおもしろい。

新田義貞が鎌倉攻めのさいに稻村ヶ崎で剣を龍神へむかつて投じたという、いわゆる“龍神伝説”は、その地形条件などからも、つとに否定されているが、これによると、当時の武将間には（い

や、民間一般にも）ひとつつの龍神信仰といったようなものがあつたことだけは是認しなければならなくなる。

また、すでにそうした伝承心理が一般のあいだに根ぶかくあつたとすれば、その心理を兵法に利用して、士気を振るわすなどのことは、兵家の常套手段でもあつた。義貞もしたろうし、直義もまたこのさいは、意識的にそれを演じて、

「われらの武運はまだつきぬところぞ。心落すな人々」
と、大いにその偶然を奇瑞きずいとして唱うたつたことであつたにちがい

ない。

けれど、これの半面には、脱落者が多かつたことも証拠さうだてられている。——おん船に従ひ奉る船三百余艘さうなり——とはあるが、

べつの箇所では

さるほどに

おん供つかまつ仕つるべき大将共

その中の七八人は

京都へ赴ゆくあり

後日、降参かうさんとぞ聞えし

などの記事もあるのだ。

このとき一方の旗頭たる大将たちが七、八人も降参洩れしていたなどは、決して少ない兵数の減少ではない。

——当然、たたかい破れて落ちてゆく船上には、落莫な感、悲痛な顔が、おもたく口をとじ合っていたことだろう。そしてこう

いう中に在る日こそ、その全体の上にある首将の人間そのものが、微妙に、末端の一兵士にまですぐ敏感なひびきをもつて映つてゆくものだが、その点でも、尊氏のすがたにはなんのとげとげしさも沈痛な氣色もなかつた。さっぱり日頃とも余りかわりのない彼だつた。

「やれ、着いたか」

と、彼はまもなく船上を立つた。そしてまだほのぐらい室ノ津むろのつの静かな朝をながめ廻して、

「浦うら人ひとをおどろかすな。ここに合戦はないとすぐ布令ふれいておけ。

赤松、案内をたのむ」

と、赤松円心の人数を先に、室山むろやまの城へその朝入つた。

室ノ津は室の遊女でも知られている古い脂粉^{しふん}の港だが、時ならぬ軍勢の上陸に、町じゅうは戦慄を暗くしていた。

が、尊氏の軍令で、ほどなく、日頃以上な生業の活気に返つた。室山の城へも湾内の兵船のうちへも、多くの物資や食糧が買上げられ、ここ両三日、小さな軍需景気を見たのであつた。

「まずは筑紫^{つくし}（九州）までも、海上、物に困らぬだけのお支度は、ととのい終つてござりまする」

こう
高ノ師直からこう尊氏へ報告があつた。

出航の奉行は、彼と、赤松一族の信濃守範資^{のりすけ}（室山城主）とが協力でしていた。——これら播州^{ばんしゆう}の沿海はあらまし赤松円心の勢力下である。——尊氏が創痍^{そつい}の舟軍をひきつれて、ひとま

すここへ寄港したのも一に円心のすすめであつた。

「円心。忘れはおかんぞ。赤松一族の助力なくば、尊氏も今度はどうなつていたかわからぬ」

「仰せられな」と、円心入道は猛気な人だが、尊氏の前ではつねに低目であつた。「お味方であるからには、あたりまえなこと。あくまで大御所と喜憂も共にの所存でおざる。一に君の御人徳と申すもので」

「はて、まずい戦ばかりしつづけてきた尊氏に、なお、何の人徳などがあるだろうか」

「いやあの佐々木すらも、さように申しておりました」

「道譽が」

「失意のときこそ、総大将の人間のまことがわかる。この敗軍で、つくづく、足利の宰相さいしょうの御器量が一そう大きく眺められた、と」

「はははは」

笑い消して。

「負けいくさに感心するやつもないものだ。道誉らしいわ」

そこへ直義が迎えに来た。

城中の広間に、はや一同が顔をそろえ、出座をお待ちしているというのである。この日、さいごの評議をすまし、そしてこよい、尊氏はここを出航、筑紫へさして行くというかねてからの計画だつた。

もとより敗戦は予定していたものではない。しかし、いついかなる変で、都落ちを見まいものでないとして、尊氏は、とうから腹に副線を持つていたらしいかたちがある。

ゆらい、九州の武族は、強豪な聞えが高い。尊氏はまだ六波羅のころから、筑紫の少^{しょう}式^{しき}や大友の族党へはいちばい恩義をかけていた。そのほか、蒔^まいておいた胚^た子^ねも多い。で、彼の九州落ちは、あてなき落^{おちゆう}人^{ひと}の漂泊とは違い、ひそかに期するところもあつたのだ。

その期するものとは、いうまでもなく、捲^{けん}土^ど重^{じょう}来^{らい}、大挙して、都へのぼる日のことでしかない。——それにそなえるべく、今日最終の室ノ津会議で、万端の手はずもきまつた。

すなわち。

この播州地方には、赤松円心一族を防ぎにのこす。

また、備中には今川頼貞、頼兼の兄弟を。備前には、尾張親衛り、松田一族を。

さらに安芸あきには、桃井、小早川一族を差し置く。周防すおうには大島義政、大内豊前守。長門には守護の厚東こうとう一族を。

そして四国は、細川阿波守や細川定禪の軍で固め、山陰にも仁木、上杉の族を配しておくなど、すべて後日のための考慮がなされた。

すべて他日のための布置ふちだということは誰にもわかる。尊氏のさしずにもその遠謀にも寸分、余すところはない。

「……したが？」

と、諸将は不安をのこした。

やがて衆座のうちから、大内豊前守義弘がすすんでその疑点を
ただした。

「おそれながら、おうかがいつかまつりますが」

「豊前か——」と、尊氏は眼をやつて「何事よの？」

「仰せのように、山陽、山陰、四国へまで、こここの御軍勢を分け
て留めおかれましては、筑紫へ渡らせられる宰相のおん供には、
どれほどな兵力がお付添いできましようか」

「さ。……どれほどあとに残るかな。直義」

訊かれた直義はまた、かたわらの師直を見て。

「師直。千五、六百人程はひツさげて行かれようか」

「いや、とんでもない」

と、師直は首を振つた。

「その半数にも足りますまい。せいぜい、筑紫落ちのおん供は五、六百人に過ぎぬかと存じられます」

「それでいい！」

と、尊氏はためらいなく二人の横から断をくだして。

「手勢は五百もつれておれば充分。尊氏の兵力は行く先々においてある。——が、師直はいま何と申したか」

「はつ。……？」

「筑紫落ちといつたな。たわけめ。尊氏の下向げこうは、敗れたりとは

いえ、落人おちゅうどの身隠しなどとはわけがちがう。いうならば、筑紫びらきと申せ」

「これは、師直の失言でござりました。平におゆるしを」

「余人ならともかく、執事のそちが知つてないはずはない。かねがね筑紫の武者どもへは、他日のため、何くれとなく手を打つておいたことぞ。尊氏はその刈入れにくだ下るのだわ」

こう師直を叱つておいて、尊氏はそのおもてを全体の武将たちへむけ直した。そして筑紫入りにいたずらな大兵は要すまいという見解に次いで、

「むしろ、瀬戸内の海路こそ、あとの大事。もし沿岸の国々が敵手に落ちたら、わが再上洛もむずかしくなるだろう。尊氏の先途

を案じるよりは、各 はそれぞれの国元にいて、尊氏が二度の上京を 鶴首かくしゅして待て。その日は決して遠いさきのことではない」と、説明もし、またことばづよく励ました。

大勢のうえに、どよめきと明るさがただよつた。敗戦のただよい以来、やつと、よみがえつてきたいささかな活気であつた。——筑紫びらき、ということばが諸将の口からしばしば談笑になつて流れたりした。

軍議の席はそのまま酒宴の夕となつた。晩には、赤松一族をこの地にのこす以外、みな船へ移つてそれぞれの国へさして別れ去る——。その別宴でもあり、またこれは、筑紫びらきの門かどいわ祝いであるぞ、とも誰かが言つた。そして、かたちばかりの茶碗酒に

他日をちかいあつたのだつた。

しかもまた。この宵、久しく、尊氏へも消息を絶つていた一色右馬介が、折も折、早馬でここ室ノ津へいま着いたと、城門からの知らせが入つた。

「何。すけ介すけがいま着いたと」

待ちに待つていた者だ。しかし尊氏はなぜか諸将のいる座をついとはずして、べつな一室へ移つて行つた。そして、これへと侍に命じ、そこで介を待つたのだつた。

おそらくは、ひそかに、事の不成就ふじょうじゅを、胸にえがいていたのではなかつたか。

もしこのさい、ここへもたらしてくる介の報告が、かねがねの

切望を裏切つて——持明院統の皇きみによる院宣いんせん陛下の不成功を告げるものであつたら——どうなるか。それは、はなはだまずいものになる。

時も時だ。大きなうつろを味方にまねき、ひいては、他日の結束にも亀裂きれつを生じまいものではない。「と、なつては一大事」として、尊氏もそこで介を待つ間は、吉か凶かに、脇骨あばらもいたむような胸騒むなざいをいだいていたにちがいなかつた。

「……」

やがて侍の声がし、介だけが、そつとそこへ入つて来て、平伏した。

例の雲水姿である。だが髪もひげも伸びに伸びて、乞食僧の

うんすい

ように疲れはてた影は、尊氏の目もいたむほどだつた。

「おう、すけ介か」

「申しわけもございませぬ」

「なに、申しわけがない？」

「余りにも日時をついやし、それに今日まで、何らのお便りもつかまつらず……」

「あの乱軍つづき。しかもそちは都の中だ。いちいち仔細の連絡がとれぬなどは仕方もない。それよりは、結句、どういう情勢か。……持明院統の方々へ、ちかづきまいらする手づるは得たのか。また駄目か」

「およろこびなされませ。首尾ようお志（シテ）は院へ聞え上げられまし

た

「えつ。かなえられたと？」

「はいっ」

「では院宣の御みくだ降みくだしはあるのだな」

「しかと」

「……が、その御みつかい使つかいは」

「すぐてまえのあとよりこの室むろノ津つへお着きあるはずでございま
する」

「そうか」

尊氏は初めてその胸をのばして大きく呼吸した。そして介の旁すけをいたわると、介は、

「いえいえ。てまえのはたらきなどは微々たるもので」と、恥じて言つた。

「こうさつそくに、事のはこびがついてきましたのは、まつたくお差向けの薬師丸ならびおかが双ヶ岡へ見えたからでござりまする」

「お、薬師丸が、そちの許へたずねて行つたか」

「されば、その薬師丸のみちびきで、資名どのの弟御、三宝院の僧、日野 賢けん俊しゅん御坊にお会いできたのでございました」

「ではその賢俊より院へ」

「はい。その間かん、朝廷方のきびしい御監視をくぐるため、ことばにも現わせぬ苦心は数々かずかずござりましたが」

「ム、さもあろう」

「が、賢俊御坊には、これぞ持明院統の時節到来と、必死な御助力でございました。そこでついに光厳上皇の御院宣を拝受いたし、それを肌身に秘めるやいな、てまえが京を立つ日と同時に、賢俊御坊と薬師丸のふたりも、讃岐さぬきへもどる干魚船ほしかぶねの船底へ身をかくし、淀の口より海へのがれ出たはずにござりまする」

宿望の院宣はもうお手に入るばかりなのだ。

尊氏がどんなに狂喜するだろうかを、介は、期待していたが、案外その人にはなんの表情もうごいてこず、かえつて、介のことばのはしに、ふとおもてを曇らせて。

「相違ないのか。介」

「逐ちく一いち申しあげたことに、何の相違がございましょうや」

「しかし、院宣の御使みつかいが、はたしてこれへ御着ごちやくあるやいなや、そちのはなしでは、ちと心もとなく案じられる。——讃岐さぬきがよいの干魚船に潜んで海へ出られたということだが」

「や。申しおくれました。まつたくは佐々木道誉の計らいによることでございました」

「道誉の？」

「病のため、兵庫から御陣を離れて、近江へ帰るのだと申す道誉が、途中、ならび双ヶ岡おかの法師へ使いをよこしましたので、さつそく彼の屯たむろへまいって行き会いましたような次第で」

「む」

「聞けば、病とは表向き、云々しかじかで帰国するとのうちあけばなし。

で、じつはこなたも、極秘の院宣を、いかにせば無事におとどけ
 なしうるか、御使みつかいの賢俊けんしゅん御坊も、おなやみの最中と、事を
 割つてはなしますと、思案のすえ、ならば供のうちに、備前飽浦あくら
 の佐々木党の一人、加治源太左衛門安綱がおる、これは海上の案
 内にくわしい侍、その者の才覚におまかせあれとのことだつたの
 でござりまする」

「では、源太左衛門安綱が、御使の賢俊と薬師丸を、送つて来る
 のか」

「さらに道誉の家臣、田子大弥太も干魚船の水夫かことなつて、淀を
 まぎれ出で、海上これへまいる手はずとなつています」

「そちはなぜ、べつに？」

「万一のさいには、誰がわが殿へこれをお知らせいたしましようか。それも思い、また一刻もはやくと、てまえは陸路をムチ打つて先にまいったわけでござりまする。八幡^{はちまん}、天の御加護もありますよう。今明中には、御使の一舟が、沖へ見えるに相違ございません」

ここまで聞くと、尊氏は初めて高い感激に体じゅうを耐えられない程なものにした。幼年からの愛臣介^{すけ}のことなので多くは口に出さないが「よくぞ。よくやつた！」と見ている眼が、介へも映つてかつと彼の心を熱くさせた。無言のままで二人はつい涙ぐんでしまつていたものだつた。

が、すぐ尊氏はたちあがつて、

「幸い、こよいここを別れ去る諸国の大将どもへ、さつそくこの吉報を披露しておこう。またそちはただちに港の船をひきつれて、御使の迎えに行け。播磨灘の沖あいまで」

と、言いのこして去つた。

やがてしばらくすると、彼方の広間なる大酒盛りの席が、一瞬しいんとひそまつた。それからである。尊氏のことばによつて、じみょういんとう 持明院統の院宣いんせん ここにわれらへ降るくだ——と、満座へ発表されたものであろう。室山の城もゆるぐばかりな歓声が突然わつとそこで揚がつた。

「それつ、船を出せ」

「御使に万あつては」

と、その席からも、ただちに、数人の将がどやどや駆け出し、
介もまた、人々と共に、港のほうへ駆けていた。

つづいて、尊氏以下、諸軍もみな城を出払つて、室の港からそ
れぞれの船へ乗りわかれた。

こうしたうちに、

「おう、見えた」

「御使の迎えに行つた船がもどつて来るわ」

と、港いっぱいに蕩とうよう揺してゐる無数の船影のうえに、どよめ
きがわいた。

まさしくそれであろう。この夜は二月十六日であつたから雲間
にはまろい月があり、鱗うろこのような波光のうちを、その一舟とまた

一群の船列ふれつどが、近づくほどにあざらかとなつて来る。

院の御みつかい使つかいの船は、まもなく、尊氏の乗船の横へ着いた。すぐ右馬介の介添かいぞえで、自船から大船の上へと移つた日野 賢俊けんしゅんと薬師丸の影は、一とき湾内の者の視線を肅しうくとあつめていた。

はやくも大船の胴どうノ間までは、むしろを清めて、尊氏が座をただして御使ごしを待ち、直義とほかの諸将も艤ともへかけて身を一樣な敷しきなみ波にして平伏して、いた。

「あなたが足利の宰相尊氏さまどでおわされるか」

賢俊のことばであつた。

個人的な応答と察して、尊氏がしかる由ゆをこたえると、賢俊もまた、

「拙僧は三宝院ノ僧正賢俊と申すものですが、つい先づ頃までは、
院のお側近そばう仕えたてまつっていた中納言日野の資すけ明あきにおざり
まする」

と、その身分を一応あきらかにしたうえで。

「このままでは世はどう成りゆくことでしょう。永劫えいごう、乱に亂
を見ねば相なりますまい。かねがね、後伏見、花園、光嚴の三院
におかれましても、深くおむねを傷められていたところです。そ
こへ、はしなくあなたからのお働きかけでした。身を僧門に隠し
てはおりましたものの、この賢俊とても、同憂でない者ではござ
いません。——御密使の介すけと薬師丸から委細を聞くやいな、よろ
こんで、いや身命を賭して、このお仲立ちに当つた次第でござい

まする」

「……」

「足利どの」

「はつ」

「同慶のいたりです。ここに不肖賢俊を以て、すなわち、光厳上皇の御院宣を、足利家へお降くだしあらせられました。つつしんでお受け申されい」

陣中、三方の用意もない。

賢俊はそれの奉書ほうしょと、それに添えられた錦の旗の一巻ひとまきとを、両の手に持ち添えて、すこし前へ身をすすめる。尊氏は無言のまま拝受してあとへさがつた。そして、もいちど奉書を押しいただ

いた上で畏る畏るひらいてみた。

月のひかりに紙の白さがなお白かつた。光厳（先の帝）の綸旨には、

義貞と与党一類を誅伐して

天下平穏の來らん日を

一日も早かれと

汝の忠誠に待つ

という意味のものだつた。

これによれば、相手は大覺寺統でもなし後醍醐でもない。義貞こそが当の敵だ。そしてこの綸旨に敵対する義貞は、やはり朝敵逆賊の名をまぬがれえないことになる。

尊氏も、ここに錦の旗を持った。すでに名分においては同等な立場となつた。ただ錦の旗と錦の旗。天下の人心が、そのいづれを選ぶかだけにある。

「直義」

尊氏は、そばへ呼んで。

「賜たまわつた院宣は、そちも拝讀しておくがよい。そしてすぐ全軍の船へつたえろ。終つたらすぐ纜解ともづないて、筑紫へくだるぞ」

直義は、かしこまつて、親船のみよしから大音声だいおんじょうで味方へ告げた。

「聞けよ人々。新院光嚴こうごんの御使みつかいより、ただいまわが足利党へ、天下平定の綸旨りんじがここで降くだつたぞ。——義貞一類の徒を誅伐して、

世のため、忠誠をぬきんでよとの院宣だ。——そのしるしをここにかかげる。仰ぎ見ろ味方の衆」

と、一人の郎党に命じて、長い竿を持たせ、そのさきに、錦の旗を解いて、月の空へ高々と振らせた。

声は船から船へ、一ときのまに、つたえられてはいた。夜日ながら錦の旗も月影に見たことだろう。やがて港じゅうが沸騰したようにわああッという武者声を捲きおこした。そしてすぐそれは勇ましい櫓ひびきや水砲と変じて、

「さらば後日」

「さらば、またの再会に」

と、呼びあいながら、かねての謀し合せどおり、船列の端から、

続々、沖へさして別れ出て行つた。

尊氏の船も、この夜、室ノ津を離れて西へ去つた。多くは、それぞれの自國へさして一たん帰帆きはんして行つたが、あらかじめ覺悟のとおり、尊氏の船列には五、六百の兵しか扈こじゆう從つしていなかつた。

その中に、日野賢俊もついて行つた。

彼はそのまま陣中僧として、尊氏のために犬馬の労をとり、後、室町幕府成立の日にいたツては、その枢機すうきにまで参加した。

元々、日野家は貴族中の名門でもあり、これが機縁で後には足利家とも通婚した。そしてかの東山殿（足利義政）の妻として、利殖に長たけ、政治内争をみだし、ついに応仁ノ大乱の一因にもな

つたといわれる日野富子という室町型の一女性なども、この日野家から出たひとだつた。しかしそれは、はるか後代になつてのはなし。

ここでは、尊氏にせよ賢俊にしろ、明日の運命すら何でよく知りえようか、である。——わけて尊氏はまだ茫洋な感だつたろう。行くての九州に、なお何が待つかも、予知はできない。

味方の一将、石橋和義かずよしを、途中の備前で下ろし、備後とも鞆ともノ津に半日ほどいて、またすぐ西下をつづけた。

そして、長門にとどまつた。

すると月の二十五日。

筑紫の少弐貞經の子、頼尚よりひさ兄弟が大宰府だざいふから一族五百余人

をひきつれて、

「筑紫びらきの御案内に」

と、迎えに来た。

これへの迎えも、来るのは容易ではなかつたのだ。九州諸党の多くは朝廷の召しに応じて京都へ出ていた。——大友貞載さだとし、上島惟頼これより、阿蘇惟時あそこれとき、菊池武重——みな宮方として早くから義貞の麾下きかに付いている。

そのうちの大友だけは、海道箱根ノ合戦で、道誉や塩治高貞らと共に、足利方へ寝返つていたが、なお他の九州宮方は健在なのだ。——月のすえ二十九日、尊氏は頼尚の案内で、海路、赤間ケ関から筑前芦屋あしゃノ浦へ渡つたが、それは薄冰はくひようを踏み行くよう

な敵地上陸にことならなかつた。

こうとう
勾当の内侍

ちようど、尊氏の流亡軍が、筑前芦屋あしやノ浦へつき、ここに初め
て九州の地をふんでいたころ――

その二月二十九日。

都では、改元の令があつた。爾今じこん、年号を、

えんげん
延元

と改められ、前さきノ大納言花山院亭の仮内裏かりだいりでは、發布の神事
がおこなわれていた。また同日を期して、このたびの大戦大勝の

賀をのべる貴顕きけんの馬やら車やらが混み合つて、三条洞院とういんの四ツ辻に、仕丁しちょうたちの間で“くるま喧嘩”が起るほどな騒ぎだつた。

やれ、車をぶつけたとか。

車のあるじが礼を欠いたとか。

車くるまぞい副ふくの侍から、牛うしがい飼わっぱの童おごまで、みな気が立つてゐるのである。そしてみな戦勝の驕りに酔つてゐるのでもある。

なにしろ、尊氏の筑紫隠れは、大きな反映をこの洛中へ投じていた。それを「尊氏退散」ときえいって、ふたたび、花の都が地に降りたような景観を俄にしていたのだつた。

しかし、ほんとの姿にはまだまだ遠く、いたるところは焼け跡だらけな洛内なのだ。——その中へ過日來の兵庫からの凱旋軍が、

何万となく入りこんで、各 勝手屯だむろに、空地や 空あき館やかたを占めて
ごつたがえしているし、日が暮れると婦女子は一人で歩けぬよう
な戦勝の都である。——だが内裏へ参内するほどな人々は、公卿
といわば、武将といわば、相見るたびにこう祝福しあつていた。

「やあ、おめでとう」

「いや 同慶どうけい、同慶どうけい」

ここにたれよりも百戦の功を燐さんと身にあつめていたものは新田
義貞で、きのう今日の彼は稀世の名将みたいにあつかわれていた。
——ソノ日義貞アソン朝臣ノミンニハ、天下ノ士卒ノ將トシテ、降カウ人ニン
後シリヘ二召シ具シ、花ノ都ニ帰リ給フ——と彼の凱旋をたたえた古記
はそのまま義貞の風采と見てもよからう。年は三十のなかば、元

々の美男でもある。

そのうえこのほど官位も、

左近衛さこんえノ中将

に昇のぼされ、弟の脇屋義助わきやよしすけは、右衛門うえもんノ佐すけとなつた。

彼の得意時代が今や来たかのようである。今日も親しくみかどに召されて「以後、山陰山陽十六カ国^{きよ}の事を管領せよ」との朝命を拝して御座ぎょざのあたりをさがつて來たところだつた。

近く、義貞はまた、尊氏追討ついとうの軍をもよおして、再び西下さいかし

なければならぬ。山陰山陽十六カ国にわたる軍令權のみゆるしは、その拳きょにあたつていちいち都へ使いを往返おうへんしていてはまにあわないのですべてをゆだねられたものではあつた。けれどこれもま

た左中将義貞の名をいよいよ三軍のうえに重からしめるものであることは言をまたない。

「……七日以内に」

と、義貞はその発向の日どりまでを今日はおちかいして来たのである。一族将兵たちの休養もだが、自身もまた去年いろいろの血臭い生活をこの日に少し憩いたかった。……で、君からいただいた賜酒に染まつて、頬にはほのかな色が出ていた。憩いの色といつてよかつた。

「お。……左中将どの」

すると、一簾の蔭からさし招くものがあつた。たれかとみれば、これも近ごろ勲功の臣として、内裏でも、また外でも、かく

れない羽振りの人、千種の頭ちぐさノ中将忠顕とうあきだつた。

「左中将どの。一度折入つて、おはなし申したい儀もあるが」「うけたまわりましよう。ここでよろしければ」

「いや、ここではちと」

千種忠顕は間まを措いて。

「尊氏追捕ついぶのために再度の御発向もおひかえあること。お忙しさは察するが、貴邸へ伺うてはいかがであろうか」

「お待ちする」

「今宵にでも」

「けつこうです。ただ近来家中も急増して手ぜまのため、旧居は弟の義助にゆずり、それがしは高倉ノ辻にいますが」

「御新亭の方か」

「いや新居などではありません。もと足利直義のいた旧館をそのままつかつているわけで」

「ならば人目も遠くてなおよい都合だ。じつは自分のほかに、もひとりお連れしてまいるお方もあるしの……」

「あなたのほかに」

「む。それは、女性（によしょう）のお方とだけを、ここでは、おうちあけ申しておこう。くわしくいつてしまふては色も香も浅くなる。ま……いずれ晩に」

忠顕も忙しげだった。右弁官（うべんかん）の局から迎えにきた蔵人（くらうど）と袖をつらねてすぐ立ち去り、義貞はそのまま退出して、高倉ノ辻へ

帰つた。

私邸に帰れば彼を待つ客や軍務はここにも山とつかえていた。
 “時の人義貞”にまたたく春の半日は暮れてしまう。「所用あ
 れば、あとの時務は一きい明日聞く」と表方へいいわたして、湯
 殿の湯けむりに浸つたのがもう約束の宵だつた。そろそろ千種忠
 頸が見える頃である。

「折入つてとは？」

千種とは、刎頸ふんけいの仲なかだ、悪いこととはおもわれない。

それよりも、その千種が連れてくるといつた女性とは誰なのか。
 そのことのほうが彼には昼から気がかりだつた。思い当りがない
 でもなく、あるいはと、心が浮いてくるからもある。

左近衛さこんえノ中将じよに叙す

との恩命に接したのは、さきごろ兵庫合戦でまだ在陣中のことだつたが、凱旋の日、さつそくそれのお礼とご報告とをかねて参内し、たいそう面目をほどこしたのみならず、宮中の慣例にもないほどな、おもてなしを賜たまわつたことがある。

後醍醐は御酒がおつよい。諸卿はみな知つているが、義貞は正直におあいてしていたので、ついに酔いつぶれてしまつたらしく、やがてふと気づいたときは誰もみえない臚おぼろよ夜の一段でんだつた。のみならず、目をさますとすぐ楚々と藥湯そそ やくとうをささげて来てやさしく気分を問うてくれた一女性がある。

更衣こういとか典侍てんじとかよばれる深宮しんきゆうの女性にちがいない。いよ

いよ恐縮して、義貞は半ば夢心地で薬湯をおしいただいたが、あたりの花明りに、ふと、そのひとの顔を見たせつな、

あ、草心尼？

と、叫びかけて、おもわずはしたない驚きの目をしばらく彼女の花顔から離しえなかつたものだつた。それほど彼女の眉目は若き日のかの草心尼に似て美しく眩まばゆくもあつた。

忘れかねて。

そのご、このことを忠顯にもらすと、忠顯がまたそれを、みかどのお耳へ達したらしく、みかどのおことばとして「——左中将がそれほど忘れかねる女なら、左中将へつかわしてもよいの」と、仰せられたということだつた。——それもまた煩惱ほんのうの身には、

忘れかねるみことばではあつた。

まさか。

よしんば、帝がほんとにそう仰つしやつたにしろ、女を賜うなどとは、かりそめのお戯れにちがいない――

それとは義貞も心で打消してはいたが、やはり多少はそぞろめて、その折、千種忠顕から女の名やら素姓などは訊きさぐつてみたのであつた。――で、知りえたところによると、彼女は一条行房の妹で、宮中での御所名は、

勾当こうとうノ内侍ないし

と呼ばれているという。

内侍ぎよしあるからにはもちろん御寝はべに侍る御息所みやすんどころや更衣こういにな

らぶ女性のひとりにちがいない。高嶺たかねの花だ、訊かぬがましであつたよと、義貞はなおさら失望したものだつた。

けれど、栄達と名声と、彼の昨今には、彼を満みたすものが充分だつた。さらには、尊氏追討のもう一段階もひかえている。彼の失意も空洞うつろとまではならずに忘れかけていた。そうして、せつかく忘れかけていたものをある。またも思い出させるなどはあの忠顯も罪がふかい。——彼が言つたこよいの同伴者とは誰なのか。

——それに代るべき女でも連れて来る気か。でなければ、まつたく何かべつな用か。

「……」

湯ぶねのうちで、義貞はうつとり思おもい耽ふけつていた。外はおぼろ

夜らしく、湯殿の窓にも花の影がサヤサヤあつた。

ふるさとの花、世良田せらたノ館たちの桜もふとおもい出されてくる。恋が成つても破れても、男には忘れえぬ女が生涯に一人はかならずあるというが、それが自分には草心尼くさみにであつたかと、義貞はいま知つた。

その人と、勾当くとうノ内侍ないしとは、瞼まなこのうちで、けじめもつかぬほどよく似ている。まだ髪をおろさぬ若後家わかごの草心尼くさみにと――。

いや草心尼くさみにといえば。つい先頃も彼には妙なことがあつた。

摂津の戦場で、兵に捕つかわられて來た旅の母子おやこがあり、見ると、それが彼女と覺おぼ一だつたのだ。

しよせん尊氏は亡なきびる。尊氏を頼たのつて行つても行くすえ頼たのむ人

にはなるまい。自分の陣にいたがよい、と——それはもうむかしの美しさは褪せた尼なので色恋などでなくいたわつてやつたものだが、無断でいつか見えなくなつてしまつていた。おそらくは、以後の戦場にまき込まれたか、路頭に迷つていることだろう。

「……殿。……殿」

湯殿の外の声だつた。

「新兵衛か」

「は。新兵衛にございますが」

「いま出る。いますぐ」

「お耳へまでちよつと」

「千種どのが見えたのであるう」

「さようで」

「いいつけておいたように離亭のほうへお通し申しあげておいた
ろうな」

「はい」

「おひとりか」

「いえ、女性によしょうの御方と」

「老女か。お若い方か」

「み車を降りさせ給うたとき、よそながら拝しただけでございま
すが、花うるしのきらやかな女御車によごくるま、おん姿といえ巴、夜目に
さえ膚ろうやかなお方のようにぞんじられました」

「ふ……ム」

義貞は内で体を拭いていた。壯者のゆたかな肉塊は、拭くそばからまたすぐ汗になつてくる。

用意されていたことなので、主客はすぐ酒になつていたが、義貞はまだ、忠顕ただあきの来意がとんとわかつていない。客は忠顕だけで、連れていると聞いた女性は、この場には見えないのである。

「いや、おひきあわせはあとにいたそう。その前にちとすましておかねばならぬおはなしもありますから」

と、問わぬ先に忠顕のほうから言つた。そのひとは、どこか別室にでもおいて、まず用談を先にとしているらしいのである。

「仰せください」義貞はさいそくした。「——」ここは離亭はなれです。

呼ぶまではたれも来るなど、家臣どもも遠ざけてござりますれば

「じつはの……」と、語氣を凝らして「佐々木道誉の降参についてじやが」

「ほ。そのことなら義貞も聞いていました。さきごろ大江山より道誉が使いを出して、あなたの御門へ、降参のおとりなしを、すがつて來たとか」

「いやこの忠顯だけに來たわけではない。准後(じゅんごう)（やすこ）のおくん許へも懇願の使いを出して、るる、恭順(きょうじゅん)のこころを陳べ、前非(つい)を悔いておる態(たい)なのだ」

「はははは。およしなさい、およしなさい」

義貞は手を振った。

「あの道誉が、いまさら前非を悔いたなどとは、笑止(しょうしせん)千萬(せんばん)。」

なんで真顔に耳が仮せましようか」

「なるほど。左中将どのには、あくまで御反対と聞いていたが」「されば宮中にも御内議ありとうかがつたせつ、義貞は強う不本意でござると、申したことはたしかです」

「お嫌いかの。あの人物は」

「さような感情からではありませぬ。去年、海道諸所の合戦では、二度まで這奴しゃつは寝返りをやつておる。およそ廉恥れんちを知らぬ男でしようが」

「しかし彼のみではない。いまの武将は」

「いやいかに道義すたが廃すたつた今でも彼のごときは全く稀まれな鳩ぬえです。箱根合戦の後陣ごじんから裏切つて、この義貞を死地にお

としたのも彼の才覚。またぞろ尊氏の非運をみるや、尊氏をして兵庫から脱陣したものの、京を通らねば近江へも行くことならず、途中の大江山で立ち往生をしているのでしよう。……そしてくるしまぎれに、准じゅん后こうへすがり、またお気のいいあなたをだまそうとしているのだ』

「さ。それで困る。元々、佐々木道誉なる者は、元弘げんこうの年、みかどが六波羅の獄から隠岐へ流され給うた日の出雲路いずもじまで、その御警固にあたっていた人物だ。——さるがゆえに、みかども准后の御方も、彼は情けある武士よと今もつて信じておられる。また深くそのせつの道誉の忠義をお憶おぼえあらせられて、ここは助けとらせよとの覩えいりよ慮りょでもあるらしい」

「……」

「ところが、左中将には御不服との聞えがある。いま御辺につむじをまげられたら、これまた朝廷のみならず宇内うだいの大事といわねばならん。そこで忠顯とくがたれのおきしづというでもなけれど、ま、篤とくとお胸をうかがつてみたいと存じてまいつたわけだが」

「ご苦労でした」

義貞は冷たい杯を手に挙げて白く笑つた。

「申しおくが」

義貞は、あらためて。

「准后じょうのおぼしめしは情じょうとしてわかりますが、義貞の不服は一切

私心ではござらん。ただ軍いくさのためを思うのみです。せつかく、戦

勝の瑞氣にわいている今日、道譽のことき二タ股者、いや三ツ股者の降参をゆるすなどの過誤を冒してはと

「が、人には功罪いずれもある」

「道譽に何の功がかぞえられましようか」

「まだ北条の勢威もさかんだつた正中しょうちゅうの頃から、彼のみは、幕臣でありながら公卿方に交わり、探題たんていの彈圧がくだる日も、蔭で宮方をたすけておつた」

「日和見ひよりみ者の打算、それなど、功というには当りますまい」

「いちがいに打算とのみは言いきれん。笠置落城後、あまたな公卿は斬られ、みかどは六波羅ノ獄に囚われ給うなどの日においてさえ、彼は北条の目をぬすんでまで、みかどにお尽し申しあげた」

「それはある」

「また、隱岐護送のおん供の途次においても」

「すでに最前うかがつた」

「さらに、みかど還幸かんこうの日となつても、建武の御新政始めには、
御内帑ごないどのくるしさ、ひと方ならず、楮幣ちよへい（紙幣）を發兌はつだいして、

おしのぎあつたほどだが、そのおりもまた道譽は、私財をかたむ
けて、宮廷の御費用をおたすけしておる。……いやこれを知る者
は、准后じゅんごうの御方だけだが……いまとなつては申してもさしつ
かえあるまい。准后のお暮らししなども、ずいぶん彼によつて、当
時は息をつきになつていたものだそくな」

「千種どの」

「ム?」

「あなたもまた、彼にみつがれていたお一人だつたのか」

「受けんとはいわぬ。彼のみつきをうけぬ大官はまずないからの。
 なんとなれば、道誉の佐々木支族は、南海から出雲地方にまでおよんでおる。それらを通じて、彼は海外との交易をやらせ、およそ都に見られる唐物からもののすべては佐女牛さめうしの門から密々市いちさばへ捌さばかれていた物といつてよい。そして朝廷の大官は日本政府の名による印可符いんかふ（許可証）を彼の交易船に貸していたというわけでもある」「お待ちください。それは商人あきびとのすること。商人の功かは存ぜぬが、軍功ではありますまい」

「軍功ではない。しかし軍功にもつながるものだ」

「義貞は武人、軍は論じますが、商論はぞんじません」

「元々、道誉は純な武将とはいいかねる。半商半武人とも申すべ
きか。そうした人物も経世の面ではまた要なしとせぬ。まずは彼
の旧領を助けおいて、後日、その能才を得意な方に働くぐら
いな寛度もあつてよからう」

「はははは。ご熱心よな。仔細の商論は伺つた。お取引はご随意
に」

「それではこまる」

「と申されても」

「はて。このままでは二人の仲もついに論争の物別れになりかね
ん。左中将どの。もう止よく。こよいは酒など酌み給え」

「酒はすでに酌んでいる」

「いやお連れしてまいつた御方を加え、なごやかにと申すのだ。

お待ちあれ……」

何思つたか、忠顕ただあきは離亭はなれを出て、ふと何処かへ立つてしまつた。

義貞は独り酌ついでは飲んでいた。忠顕が去つたあとのうつろは、いやおうなしに彼に自分を考えさせてくる。

道誉の無節操を罵のつたが、義貞といえ、北条遺臣の中先代軍からいわせれば、主家に弓をひいた離反者のほかではなく、天下の武門あらましも寝返りの前科者であらぬはない。

「つまらぬ強情を」

と、義貞はかえりみて、忠顕との論争もやや後悔されだしてきた。それは即そく、准后の廉子やすこへたてをつくことにもなるからだ。

おそらく忠顕のおどずれは、廉子の命で来たものだろう。——とすれば、彼が連れて来た女によしょう性つけというのも、あるいは、准后つぼね腹心の局きじのひとりかも知れぬ。

「目をつぶろう……」

義貞は自我をなだめた。准后と事を構えて争うなどはおろかである。また争つて勝てツこはない。現朝廷の姐だつき己にょそである。いつかは女によそ奏なんの難に会おう。そのとき、腹をたてて弓をひけば、自分もまた道譽の無節操と似た者となるしかない。

すくなくも自分の忠誠は現帝の御理想へささげているのだ。道

誉の^うごとき男、尊氏の^うごとき者と、同列であつてはならない。産^う
 土^{ぶすな}の神も照^{しようらん}覧^{あれ}あれ願^{がんもん}文^{ぶん}の誓いはきつとつらぬいてみせよ
 う。——ここにただ尊氏をさえ滅ぼしてしまえばだ。道誉一人の
 存否などは問題でない。どうにでもなる。そのどうでもいいこと
 に、准后の^うごときげんを損じ、忠顕と気まずくなるなどは、愚であ
 つた。おろかしさよと、ようやく、彼の酒氣が身のうちでほのぼ
 のと色を醸^{かも}しかけていた。すると、そのときである、
 「……お召しあそばしましたか」

と、どこやらで声が匂^{にお}う。

きれいなせせらぎの階音にも似た声音^{こわね}には氣のせいか覚えがあ
 つた。

「たれだ？」

「わたくしです」

「わたくしとは」

「……」

答えにつまつて、そして羞恥らつてでもいるような気配が朧な
 勾欄こうらんのあたりでしていた。その間には、細殿すの簾すだなが垂れている。
 義貞はもどかしくなり、われから立つて、簾を押しはらつた。簾
 の目にたかっていた花の幾ヒラが舞つて、その下に手をつかえて
 いたひとの黒髪にもハラとこぼれた。

「や、そなたは」

「勾当こうとうノ内侍うちしでございまする」

「……これは」

義貞はあきれた。茫然と口もきけなかつた。

声で、もしやと思わぬでもなかつたが、あまりに欲^{ほつ}していたものが余りにたやすく目の前におかれた驚きの反作用が奇異な戦慄にもなるのであつた。

「はて、人の悪い」

義貞は、胸の戸まどいを、ふとそんな咳きにして。

「では、千種どのが、こよいお連れあつた女性というは」

「私でございました」

内侍は、どこかに怯え^{おび}の翳^{かげ}を持ちながらかすかに答えた。

「お召ゆえ、この離亭^{はなれ}へ罷^{まか}れと仰せなので、まいりましたが」

「いや、義貞は呼んだ覚えはない。ないどころか、連れがそなたとも知らなかつた。して千種どのはどこに」

「はやお帰りになりました」

「えつ。帰つた？」

ふしぎな行為をするものだ。なんでこんな謎めいたまねを彼はするのか。

義貞には、忠顯の腹が、彼の腹芸みたいな行為が、

「妙な？」

としか考えられない。何かウラガ？ とさえ疑われてくる。

しかし残された勾当ノ内侍が、ひとり残つていることをすこしも疑つていなければ一体どういうわけだろう。義貞がそのことを

ただすと、彼女は消えも入りたげな姿をみせてやつと答えた。

「どうぞおそばにお置き給わりませ。内裏のおいとまも今日を限
りに、いまよりはお館にいるようにとの、仰せつけかしこを畏んでまい
りました。ふつつかな者ではございますが」

「仰せつけ？……はて、たれの？」

「もとよりお上うえの」

「みかどのおことばだと仰つしやるのか」

「くわしいことは千種さまから、はやお耳かとぞんじますが
「いやなにも聞いていない」

「まだ、なにも」

「まつたくなにも」

「……」

彼女は初めてうろたえの色をあらわした。しづかでいた眸よりは、心こころ噪さわがしい眸のほうが一いちばい美しさを増していった。とつぜん意中の者同士がなんらの前提もなく密会の機にめぐまれたようなときめきをすら義貞はとたんに覚えた。

ともあれと、彼はべつな小部屋へ彼女を誘いざない入れた。

「内侍。そなつのいうに従えば、そなたもこのままいることを、承知のうえで今宵いとこれへ参つたように聞えるが」

「はい。もしお厭いといなくば」

「それがわからぬ」

「どうしてですか」

「みかどのお心も」

「でもお上には左中将との一約、ぜひもなければと私へお言いふくめでございました」

「約束と仰せられて」

「はい」

「……約束とな」

あとの呴きはほとんど口のうちだつた。義貞は心のちぢむ思いがした。忠顯から洩れ聞いていた叡慮とはやはり一時のお戯れではなかつたのか、と。

どうしよう。急に彼は惑まどつた。むかしには源三位頼政げんざいりょうが菖蒲あやめノ前まえを主上から賜わつたというはなしはある。が、自分の上にそん

な僥倖がめぐんで欲しいなどとは思いもしていなかつた。——忘れかねるという想いを率直に忠顯へ洩らしただけのことである。もしこの勾当の内侍がみかどにとつて寵ちようこう 幸こう もただならぬ愛妃あいひ であつたとしたら、それをねだつた自分はいとも罪深い者になろう。恐懼きょうる といつても言い足りはしない。ただただ申しわけないかぎりである。

彼のそうした容子がふと内侍を不安にさせてきたのかもしけなかつた。急に、つきつめたその眸に涙さえ差しぐんで。

「左中将さま。居てもよろしいのでございましょうか」

「居てもとは」

「おそばに」

「そなたさえ居る心なら」

「わたくしはもう……」

と、彼女は思いきつたようにあふるる涙と共に言つた。

「ここへ来て、眞実ほつといたしました。内裏という火宅かたくをのがれ出てきたような思いがして」

義貞は内侍のことばをあやしんだ。内裏も火宅同様とは。
 煩惱ぼんのうの炎ほむら、その中の業苦遁ごうくのがれ難い人間の三界住居すまい。——それが仏典でいう「火宅」と彼は承知している。

内裏の後宮もまたそんな所だろうか。勾当ノ内侍は、問われて袂を濡らすばかりだつたが、やがて、とぎれとぎれに語りだした。いまは義貞にゆだねるしかない女の一生と、どこかで観念のみえ

るものあわれであつた。

彼女の生家は公卿中での名門である。とくに兄の一条頭とうノ大夫たゆう行房は、隱岐配所おきはいしょにまでお供をして、始終、帝とあの一ト頃の艱苦を共にした侍者の一人でもあつたから、還幸の後は、みかども、いちばい行房にはお目をかけられ、末の妹の勾当ノ内侍も後宮に入つて、あまたな妃嬪ひひんのうちでさえかがやく寵幸ちようこうを身一つにほこつていた。

これだけならば、彼女になんの不足があろう。後宮を茨の園と恐れにおののくわけもない。

が、やがて彼女は、みかどの寵幸が厚うなればなるほど、准后じゅんごうの廉子やすこの監視がたえず身にそそがれているのに気づいた。廉

子ときけば、后町の局々きさきまち つぼねつぼね、あまたな寵姫ちようきも、みなお姑しゆううとめのようにおそれ憚はばかつてているのである。それに内侍はいつか帝のおたねをやどしていた。

身をいとしんで、珠の御子みこを産めと、彼女は実家やどへさげられた。すると或る日、兄の行房が来て、ひそかに妹へ「おろしたがよい」とすすめた。「……兄がこの目で見た小宰相こさいしようノ君のような例もあるからのう」と、恐ろしいことを咽ささやいて聞かせた。

かつて、みかどが隱岐脱出のさいには、なおまだ三人の妃ひがおそらく仕えていた。廉子、大納言ノ局、小宰相の三名である。ところがそのうちで身ごもつていた小宰相ノ君だけが、伯耆ほうきノ地に上陸後には、いつのまにか見えなくなつていた。

……ふびんや、過ツて船着きの折、海へ落ちて。

と、廉子は後日、傷ましげに奏いたしてそういたが、じつは追手にせまられた混乱中、その廉子が船上から波間へ突きおとしたものであつた一瞬を、運悪く行房だけがふと見ていたのだつた。——いら行房はどうかしてこの悪夢を記憶から打消そう打消したい——と念じて今日にいたつて來たが、妹のそちがおなじ立場になつてみては黙つておれぬ。——語るのは、いま初めてだが、ゆめ、准后のおねたみを受けてはならぬという兄の注意なのだつた。

世にそんな恐ろしいことがと、疑われもし悲しまれて、内侍はそれをしおに病といつて後宮へはもどらずにいた。しかし、みかどからは「……いかにせし?」と、そのごも再三なお召めしである。

で、ついにまた入内^{じゅだい}をやむなくしたが、前にもまして廉子^{こわ}が恐く、また廉子の目もなんとなくほかの寵妃^{ちようひ}を見るのとちがい、自分へのみはすさまじく思われて仕方がない。そして、ひとの秘密を知つたことの恐ろしさがついにはわが身の悪いとまでなつていた。

これにはまた、みかども常々お悩みらしくあつて、近ごろはとみに自分への寵幸^{おとろ}も衰えぎみとなつていて折……はしなくも「義貞へ嫁け」^ゆとの御謡^{ごじょう}であつたという。——内侍はそう語り終つて、しんそこ、ほつと息をした。

世間は暗かつた。洛中、一種の鬼気が深夜になるとただよつてくる。

義貞には体でわかる。

狛貅（戦いを好む猛獸）数万の者が、このところ刀鎗の血をぬぐつて、いささか休息のため人間社会の中へ返つてゐる。そして戦いなき夜を眠つていた。いやなかなか眠りもしていまい。乾き切つた意欲が女を漁り酒を追つて、百鬼夜行図さながらに、罪の香を嗅ぎあるいているに相違なかろう。

なにしろ兵は野性だ。将も人間である。本能やりばなき、血のなかのものを、義貞もいま、三条高倉邸の離亭の一灯に照らして、みずからの身に見ていた。

おれも**狛貅**の一匹

と覺らざるをえまい。——目のまえの勾当の内侍は、ともすれ

ばただうつむきがちだつた。あれから義貞はそこへ酒をはこばせてしきりに酔いをいそぎ、そして内侍へも、

「飲まぬか」

と、すすめていたが、ふたりの仲はたやすく美酒うまざけのごとく釀かもされては来なかつた。——天皇から賜たまうた女と、賜わつた男とである。いわばまたその初夜だつた。——人はやはり品ではない。溶けきれないもどかしさを徒いたずらにふたりはいつまで心の外側にむかい合つていたままだつた。

「……そなた、武者むさの家の生活くらしはまだ知るまいがの」

義貞はふと、こんな緒いとぐちをみつけて言つた。ひとつの話がとぎれると、あの話題も彼がもちだすほかないのであつた。

「ええ……」と、内侍もやや頬のほぐれをみせて「武者のお家はお

ろか、世間のことも、何一つようぞんじてはおりませぬ」

「さいぜん、内裏は火宅じやとの嘆きだつたが、武者には武者の業ごうがある。ここもまた火宅とあとで悔いねばよいが……」

「いいえ、人誰もの苦患くげんはわきまえております。ましていまのような世の中。それを憂い辛つらいとは申しませぬ。……ただせめて、人の眞情まことがほしいのです」

「眞情とは、男の」

「もとより女でございますから」

「内裏にはそれすらないか」

「みかどはおひとりでいらせられます。かしづく後宮の私たちは、

廉子さまはじめ二十人の妃嬪で御寵を競つていました。どうして真実が生れ出ましよう

「真実になれば燃えよう」

「そのような炎と炎は、おたがいを喘ぐ火宅とするほかのものではありません。それがあの怖ろしい後宮という所です」

「ここならば」

「でも、殿のお心はまだわかりませぬ。この私というものは、恩賞の品代りに、みかどから殿へ下されたもの。私は人形です。自分の気もちを余り言つてはいけないのでした」

「いやそなたは奴隸ではない。誇れ、義貞の想われ人だ。義貞がおせがみしていただいたそなたなのだ。人形のたましいはわしが

入れてやる」

義貞は杯を横へ拋^{ほう}つた。——投げると見えたほど朱の杯は輪を描いてころがり、そしてとつさに一匹の**貅**^{ひきゆう}貅^{ゆう}は、その盲目的な勢いとたくましい体の下に勾当の内侍をねじふせていた。裳のみだれ、黒髪のふるえ、彼女に与えられるたましいとは彼女を窒息^{ちつそく}息させるほどなものだつた。

今朝。

春^{シユン}眠^{ミン}、暁^{アカツキ}ヲ覚エズ

——の春の朝でもあるが、義貞はすかつとした上機嫌で、近侍にたいする語調まで快活だつた。

「なに。義助（脇屋）や貞満（堀口）らが、はや表^{おもて}の間に詰めて

待つてているというのか。待たせておけ、待たせておけ」

いちど、書院に姿をおいたが、こう言つてまた対たいノ屋やの奥へ遠くかくれてしまつた。きのうまではなかつた部屋の色彩いろどりや物の香が、美しいあるじを持つて、春の日影までを新たにしていた。

「内侍、さびしかろ」

「どうしてですか」

「こわらしき男ばかりだ。内裏のさまとは、おそらく余りな違ひ方」

「それがかえつて、そぞろにうれしゆうございます。人の中に立ちまじつて、自分も世間のひとりになつたことかと」

「いまに街も見せてやる。輿こしにかくれて、仁和寺へも行つてみい。」

清水の春もよい

「いえ、ただもうこうしているだけでも」

そのあかるい黛まゆが、ふと義貞に、ゆうべのある一ときひそに聾ひそめた黛を思い出させた。たましいは人形にうちこまれ、彼女は人間に返つてゐる。彼女もまた今朝のひとりの男を自分の生涯のそとにおいては眺められなかつた。

「内侍、したくは」

「お待ちしております」

「妻めと朝餉あさげをひとつにするなどは、義貞、ほとんど忘れていたことだつたな」

中ノ坪を前にした一室へ移り、給仕人もしりぞけて、ふたりだ

けで膳についた。内侍にしても、このような朝餉のためしは宮中ではなかつたであろう。ひとと女の幸福感を箸に持つた彼女の姿には、もう何らのくらい翳かげもなく、やかた館のあるじの想われ人おもびとになりきつていた。

「それにしても……」と、内侍はさつそく今朝の噂にしていつた。
 「……おかしな千種さま。どうして昨夜は黙つて、帰つてしまわ
 れたのでございましょうか」

「いや、忠顯どのの腹、准后のお胸、いぶかりはみな解けた。そ
 なたは何も知らぬままがよい。義貞もまた、彼に会うても一切知
 らぬ顔で通すつもりだ……。そして、道誉降参の一件なども」
 「道誉と仰せられますのは」

「佐々木道誉だ。いや、わざらわしい。そなたがきいてもせんな
いこと」

次の部屋へ近侍が来て いた。

ふたりの声がとぎれると。

「殿。……江田行義、篠塚伊賀守などが、明日先発のうちあわせ
とかで、さいぜんよりお表の間までお待ち申しあげておりますが」

「いま参る。しばし休息しておれといえ」

義貞はつい起つのが惜しまれてはそう言つていた。久しい戦陣
の飢渴が花野の露にでも逢つたようで飽かない心地なのである。
するとまた、青侍の足音がして、思わぬ客の来訪を告げた。

「……誰だ。客とは」

「河内守正成どのでござりまする」

「楠木が。……？」

いちど、黙考してから。

「また来てもらおう。今日は播磨へ発向の先発をえらび、かたがた、軍議に一日を要する。御用あらば、また明日にでも来給え、と申してやれ」

路頭の子

たそがれ、正成は、京での居宅、六条油小路の門で、駒を降りた。

ひる、義貞を三条高倉の邸におとずれたが、会えなかつたので、
 玄惠法印げんえいをたずね、また、二、三の知人を訪うてもどつたのだが、
 彼の行く先はみな時流の外にある僧や学究の家だつた。好んで今
 を時めく権門を避けているような彼にもおもわれる。

「お帰りなされませ」

帰れば、いつもまつ先にとび出してくるのは、しゃがんはくはつ 赤顔白髪の

老臣恩智左近で、

「やれやれ、さぞやお疲れで」

と、正成の手から駒のたづなを取るとすぐ、正成の顔を読んで、
 その出先から胸のうちまでを、ちゃんと見てしまうのも、この左
 近であつた。

油小路の邸は、正成が和泉河内の守護をかねて、摂津昆陽野のこやの代官を管理する身となつてから賜わつたいわゆる「在京公務所」だつた。だからどこにも私邸らしさはない。

ただ恩智をはじめとし、妹聟の服部治郎左衛門元成、一族の松尾、南江、和田のともがらや、郷土の若殿ばらが、黒い板じきにすらと並んで、

「お帰り」

と一様ような姿を見せ、それにたいして正成が、

「何事もなかつたか」

と、一顧いつごをみせて通るのが、せめてここにある彼の家族的なくつろぎといえばいえる。

総じて、彼の位置は、官職にしても大きく昇進したはずだが、暮らし方はいぜんむかしの河内の一豪族とさして変った風もなかつた。あたかもこれを家憲としているかのようにである。

そこで公卿たちのあいだには、

河内のつくね芋殿

などという蔭口がまま聞かれた。どろくさいという意味だろう。正成自身もそのことは知らなくはない。

しよせん自分は地中の鈍根

と、みずから自己の性をどうしようないとして、世事の毀誉褒貶などは一こう氣にもとめないふうだつた。

しかし昨今、上下とも、戦勝気分にわきかえつてゐる洛中にあ

つて、ここ一門だけが、何とも例外におかれた感で、正成はともかく、老臣若党ばらは、忿懣ふんまんやるかたないものを鬱々うつうつ々と抑えているにはちがいない。

過ぐる兵庫合戦の日においてである。——打出ヶ浜から御影みかげへかけての大事な一戦の日に——理由なく後陣ごじんへさげられ、そのまま不面目な帰洛を余儀なくされていたのだつた。

もちろん、総大将義貞にすれば、理由はあつたことであろう。それは尊氏の筆になる正成宛ての密書だといわれている。

しかし、嫌疑はすでにれてはいるはずだつた。それが尊氏の偽計であつたことは、降参の将の談話で、そのご証拠ごしゆくだてられており、検断所の公卿裁きでも、

ほかからも同文の書があらわれたゆえ、あれはおかしい——
 といわれているのだ。にもかかわらず、義貞だけは、その訂
 正も声明していざ、さらには、二次の発向にも、ここへは何らの
 沙汰さえまだ来ていない。

次の尊氏追討は、当然、山陽九州への出兵なので、すべて命は
 武門の大将一司令下にゆだねられる。楠木といえ義貞の命によら
 ねばうごけないことなのだ。

「左中将どのへ、今日は親しくお会いなされましてござりまする
 か」

やがて室に灯を見ると、左近は案じ顔の下から、正成へそつと
 たずねた。

「いや、会えなんだ」

と、正成は、これは正成のもちまえだが、口おもたげにぽつんと答えたのみだった。

——これはまずい、と爺の左近はすぐ覚^{さと}ると正成の氣色^{いろ}を見てたちまち話の穂をかえ。

「——そうそう。ひる、おるす中に、常陸^{ひたち}からのお飛脚^{ひき}がまいつておりますが」

「久慈^{くじ}の正家からか」

「は。御状をたずさえて」

「見ようか」

「お夜食は」

「あとにする」

東国くじの常陸久慈郡くじへは、一族いっしやくのひとり楠木正家くぬぎまさいえが彼の代官だいかんとして年暮くわから下向げこうしていた。そこからの一便びんらしい。

長い書面しょめんだった。

見終ると。

「飛脚ひきょうの武士ぶしを呼んでくれい」

「お会いなされますか」

「ム、東国くじの事情じごうを訊きこう」

「あちらの形勢けいせいなど深い事情じごうは余りわきまえぬかのような走り下はしりし
部もべにすぎませぬが」

「それでもよい」

この話がまた長かつた。訥々^{とつとつ}、素朴きわまる飛脚武士なのである。正成はそれをつかまえて、物の値段^{ねだん}をきいたり、去年の作物の刈入れをたずね、また東国のことしの正月はどんな？――などとそれからそれへ雑談を求めて倦む^うこともない。

しかし彼にすれば、正家の書状の内容とあわせ観て、何かうるところがあるのであるのだろう。やがておそらく寝所へ入つた。

枕は彼の憩い^{いこ}でなく、枕は近來彼の憂いをさらに研ぐ一座の思念石となつてゐる。枕につくと、彼には日本じゆうの物音がその石から聞えてくるのだ。坐ながらでなく寝ながらにして世の人心まで映つてくる。

「せんない憂いを」

と、彼は思う。

一個の力などではどうにもならない限界と、滔々たる世の趨すうとう勢うせいが彼には觀えた。

それは誰も見ていよう。そして人の目で見得る範囲と深度だけを人と同じように見ているほど氣の安いものはない。けれど正成の悪いは、人以上に世が愛かなしまれ世の行方や人心が觀えるところにあつた。智恵学問から持つていたものでなく、天性の彼の感受性といつてよい。——たとえばである。

世間の目一般は、天皇軍対尊氏だけにとらわれ、はや北条遺臣軍の、信濃、越後、裏日本へわたる蠢動しうんどうなどは、消えたものと思つてゐる。

ところがそうでない。

奥州も、てんやわんやだ。北畠顯家あきいえが留守となつた東北の乱脈さなどわけて想像に難くない。さらに思いが筑紫つくしに飛べばなおゾツとした。——彼のさぐり知るところでは、尊氏は、持明院統の皇の院宣きみいんせんをにぎつてゐる。

さもあらば。

みかどとみかどの争いだ。

二つの日輪がせめぎ鬪うて全土の上に燃え狂うときは地上も寸土をあまさぬ血に染まるだろう。

……正成は寝返りを打つた。老人のように、その肩は温ぬくもつていず、その背はまろい。

「……そうさせては」

ならじ！ と彼は寝つつも寝られず体を硬くするのだつた。さきには大塔ノ宮のあえなき死を、人皆も見ているのに、と痛憤に似たものが涙をすらふとついてくる。

「が、正成ひとりでは」

と、無力の感がげつそりと彼の疲労を誘つてきてやがては自然眠りにおちた。その間だけ彼は救われた寝顔を持った。

「なんだ？」

祐筆の安間了現。
ゆうひつのやすまんりょうげん。

朝の役宅へ入つて行つたばかりだが、また門へひつ返してきて、

六条油小路の往来へ首を出していた。

門外では八尾ノ新介、富田正光らの若侍から組頭たちまでたちまじつて、しきりに「道誉が」とか「佐々木が」とか言い騒めているのだつた。

訊けば。近くの佐女牛さめうしの一邸へ、佐々木道誉の手勢二、三百人が今曉から帰つて来て、久しく空あけていたやかたが俄に賑わい立つてゐるというのである。

「それやいぶかしいな」

了現は、さらにたずねた。

「這奴しゃつは、足利方の一将、この都へ、帰つて来られるはずの者ではなかろう」

「それが帰つて来たのです」と富田五郎正光は、ゆゆしい椿事ちんじと、ふんがいして。「おそらくは、尊氏の敗戦で脱陣したものでございましょう。さきごろ來らい、大江山に立ち往生して、進みもせず、もどりもせぬ一陣の兵がいるとは聞いていました。ところがその佐々木道誉、ぬけぬけと、山を降りて、佐女牛へおちつき込んだではございませぬか」

「たしかなのか」

「見てきたのです」

「ふうん？ ……」

「わけがわからん、なんとも、このごろの世態や武門は」

「この了現も、なんの沙汰も聞いておらぬ。みかどへ降こうを乞うた

ものなら、すぐ左金吾（義貞）の沙汰なり 窪所（武者所）の門も
觸れが廻るはずだが

「道譽の、またぞろな降参など、それこそ沙汰のかぎりでしよう。
よもやいかに、しつ腰のない左金吾殿でも、また、みかどのおう
ちにしろ」

「ばかげたことだ」

たれかが呟いたしおに。

「やめろ、やめろ、こんな往来評議もこけのひまつぶしでしかな
いわ。はははは」

正成がこれを耳にしたのは、やかたの奥で爺の左近のかしづき
を受けながら、外出の身支度をしていたときだつた。

「……道譽がの」

と、彼は笑つた。そして、

「いまさら不審がるにも当るまい。彼は彼の道をあるいているのだ。もそつと、べつな所には表に見えぬ醜事や奇怪事が数しぬれずひそんでいよう。世はいぶかしいことだらけよ。……爺、爺はさようと思わぬか」

ともいつた。

この日も彼は左中将新田義貞の高倉の亭をおとずれに出たのである。が、きのうの約もむなしく会えなかつた。「——弟、義助でよくば」との伝言だつたが「また」と彼は辞して去つた。

事実、門前には播磨へ先発する軍兵が屯たむろしていて、正成が求め

た二人だけの懇談などに応じられなかつたのもムリはない。とは思われたもののまた、

わたくし
「私の訴え事と取られたのか」

と、それが少しばかりは残念だつた。彼にはいま、これ以外に世を救うみちはない、と思いつめている一信念があつたのだ。ついてはまずたれよりも義貞とじつくりはなしあつてみたい。そう考えて二日通かよつたのだが、時めく左中将の威風を門に見ての帰りにはそれも絶望のほかなきものとあきらめたようだつた。

この思い。

これしかないと正成が思いきわめている考えは、義貞に会い、とくと義貞の大度量と理解とを求めるしかない問題だつた。

かく
秘れてすれば陰謀になる。

およそ陰謀などは彼にない才覚だし、よしまた義貞に会いえても、得意の絶頂にある今の左中将の耳には、正成が抱いている考えなどは、とうてい、善意にうけられそうもない。

「はて……」

帰路の馬は路頭に迷つた。

義貞がだめならば――

千種忠顕ちぐさただあきに会つて逐一胸のうちをはなそくか。

いやいや、千種は義貞と親しい仲、すぐ義貞へ通じるだろう。直接でなく人かいを介した意見となれば、いよいよ義貞が素直に容れる可能性はすくなくなる。

「ならば……」

正成は心のうちで他をさがす。

洞院ノ実世卿はどうか。

力がなさすぎる。やつと一方の公卿大将たるのが関のやまの人で、大局の動向を察したり勇断をもつ人ではない。

在京の鎮守府將軍北畠顕家の名もかれの胸にうかんでいた。

すがすがしいほど純で忠誠一筋な人とはおもう。けれど多くの日をみちのくに送り当時の複雑怪奇な時局を知れといつてもムリである。かたがた年も若く、それに父北畠親房卿ときては、地位、学問、階級などに左右される意識が濃く、気位がたかい。またついぞ、河内守正成などいう者が朝臣の端にいることすらお目のす

みにある風ではなく、禁中などでも目礼一つ返されたことはなかつた。

「……語る相手はたれもない」

ひるの京洛は人間で息れていた。

辻々は黒山な庶民。隊伍をなして西へ行くのは、播磨の赤松攻めへさす諸家の兵であろう。ひがしの方へ行く軍隊もみえる。それは尊氏一族の本国三河を席卷せつけんして、尊氏が秘かくしていいる妻子や母を召捕る戦略だとか聞いている。また宮門へむかつて牛にムチ打つ車、もどる輿こし、じつに人は多い。しかも正成が心をかたるたれひとりこの都にはいなかつた。

彼の心は路頭をさまよう子に似ていた。

こんなとき、むかしからの賢人なる者は、山林へ去つて行く。
世をすてて隠遁する。

だがそれのできる正成でもなかつた。名利に恋々たるので
はないが、彼も一族の族長だ。乱世の権化みたいな熱血そのもの
の輩やからも多くかかえている。弟正季まさすえがしかりである。いやいや彼
の自由をもつと狭い立場に追いつめていたのは彼にはどうしても
軽く持てない自責じせきだつた。長としての責任感だつた。

もしこの重い業ごうをのがれたいのであつたら、そもそもは、元
弘こうの初め、笠置かさぎからの天皇のお招きをお断りすればよかつたの
である。しかるにすんで勅かしこを畏んだ。そのときすでに平和の民、
南河内的一族有縁うえんの女子供にいたるまでの運命はこの正成が業ごう

輪廻に巻きこんでいたものだつた。長としてのその原罪を、彼はみずから性格のためにごまかしきれない。

しかし、拒んだら、のがれえたか。平和の民があのまま平和でいられたろうか。

むずかしい。考えられない。

でも正成の責任はそれで消えぬ、この正成の……と笠置の過去をかえりみたとき、彼ははつと、いまの衷ちゆう心うしんを訴えうるただひとりの御一人を胸のうちに見つけていた。

正成はその日、六条へもどるとすぐ、祐筆の安間了現に願書をもたせて、宮廷の大納言おほのうぶノつかさ（職局）へ使いにやつた。

「——何とぞ不時ふじノ賜しえつ謁あつの儀をおはからい願いたく」と朝ちようへ手続

きをとらせたのだつた。

「戻りました。——折よく閑院ノ権大納言さまにお目通りを得、仰せには、はからうてやる、お沙汰を待てとのこと。まずは御ご許きよあるものとぞんぜられます」

了現の返事であつた。

大納言のつかさは「天下喉舌こうぜつノ官」ともいわれる局きょくである。聖旨を下達し、下の善言も納いれる機関となえがあるのでそんな称となえもあるたとみえる。

「そうか」

正成は安堵あんづのていで、

「閑院の侍従しとしゆがお扱いくださるとあれば——」

と、やがての沙汰を待つた。

この日いろいろ、どこやらに腹のきまつたとも見える姿が彼の一
 両日を長閑のどけくしていた。——河内守左衛門しとうじよノ少しょう尉じよという一
 朝臣あそんの身は五位ノ官位にすぎず、単独で主上へ拝はい謁えつをねがい出
 るなどは、おこがましく、おそれ多いとも万々わかっていたが、
 やむにやまれぬ果てであつたらしい。が、そこまでのつきつめた
 憂いも、帰結を心に観てしまうと、低てい雲うん一過か、あとは迷うこと
 なく暢のびのび々としているのも彼にきわだつている性情の一面だつた。
 ちょうど正成もそのいささかなおちつきにあつた間のことであ
 る。——一族の楠木弥四郎や和田弥五郎など十騎ほどの従者にま
 もられて、正成の一子正行まさつらが、郷土南河内から、

「母ぎみのお使いで」

と、これへ父を訪ねてきた。

元服を去年すまして、幼名多聞丸たもんまるを正行まさつらとあらため、ことし十四をかぞえる正行だつた。もとより重大な使いならこの正行をよこすはずもない。去年いらい、正月も帰郷していない正成であつたので、ここわずか戦陣も休止の都と窺うかがつて、おそらくは母から「……そつと父上にお会いして、御容子を見ておじやれ。そしてお国元の幼い者から皆も無事息災にありますと、そなたからよう申し上げてもどるがよい」といわれたか、あるいは、父の顔見たさに、正行自身「何でも行きたい」と、せがんで来たかの、どちらかにちがいなかつた。

「——とは、正成も察している。そして正行が、
「これは、母ぎみからです」

と、父の前にかしこまつてすぐさし出したのを披^{ひら}いて見ても、
まずは何事もない妻の久子の手紙だつた。その文中には、

……去年の冬から初春^{こぞはる}へかけて、都の御陣は、やごとなきあ

たりからあなたさまやら郎党たちまで、矢たけびのなかに明
け暮れのおすごしとあるのに、河内の奥は何事ものう、正月
は正月の真似^{のぞ}びもしたり、この頃の麦踏み唄にも、近年にな
い百姓衆の長閑^{のび}かな励みが見られるなど、みなお蔭によるも
のと、もつたいう存じて、ただ朝夕の蔭膳へのみ、一日も
早くと、御世のしずもりを祈つてゐるのが、私たちのせめて

もな力でしかございませぬ——

などと見え、そのあたりの文字には正成もふと瞼を熱く持つたことだつた。しかし彼の後顧の安心と家族への張合いもそれ以外なものではなかつた。

正行は母に似て小づくりだつた。おもぎしも父の自分よりは母^は御似^{ほに}だとよく他人はいう。

「……十四となつたか」

正成はこの正月もついに家郷を見ずにしまつたので、いま、妻の手紙を巻きおさめながら、その妻の手塩の愛を——可憐な小冠者姿^{やすがた}に限なく持つて——ちよこんと目の前に畏まつた正行^{まさづら}にどこか急に大人びて來たものすら覚えて、

「……正行、大きくなつたな。しかしよう母がそちを手放してよ
こしたの」

と、男親の幅のひろい目でゆつたり眺めた。
正行はかたくなつていた。

だが、恐いからではなく、ふくら雀のように、満足感にみちた姿であつたのだ。——それほど、この長い乱世下におかれた武門の家では、子と親とが、或る日を無事で一つにいることも稀れだつたからではあつた。

「はい。お願ひしても、初めなかなか母上のおゆるしが出ません
でした」

「そうだろう」と苦笑して——「めつたに、ゆるすはずはない。

世上は殺伐^{さつばつ}、子を遠くへは出すなど、この父がかたく申しつけておいたのだから」

「ですが父上。河内の奥にばかりいると、無性に正行は遠くが知りたくなつて来ます。居ても立つてもいられなくなつて来て」

「どうしてだ」

「日本じゅうが戦争なのに、河内の奥で自分だけがこんなにしていていいのかしらと思うのです」

「悪いことを、母がさせておくはずはない。あいかわらず觀心寺の御坊の許へ通つて、勉強はしているのであろうが」

「はい」

「それでいいのだ。そもそも世を案じるなら、学問に精出して、今

の世情などにはわき目をふるな。すぐそちたちが、いまの大人に代つて、その乱脈な世になう時が来る」

「でも、叔父君ぎみは、そんな世間見ずではいけない。正行もはや十四、初陣ういじんもすべき年ごろなのに……と再三、母上へお手紙を下さいました」

「正季まさすえがか？」

「はい。四天王寺の御陣所からです。……それでじつは、叔父君を四天王寺にお訪ねして、京へ廻つて來たのです」

「ははは……。さては母がゆるさぬので、正季を頼んで出て來たわけだの。して正季はそちに、何を教え、何を見せたか」

「四天王寺を中心に、難波なにわ、住吉を二日ほど見て歩くうち、こう

仰せられておりました。……和泉、摂津の浜は、なべて楠木勢の持ち場だが、欲しい船がたくさんにはない。やがて足利尊氏との会戦には、どうしても、海上の力が要る。ところがお味方には用意がないのだ。——お父上にお会いしたら、ぜひこのことを、左中将どのへ御献策あるよう——正季が申しおりましたと

「正季の言伝ことづてか」

「ええ。それから……正行も来るべき次の戦いくさには、ぜひ初陣きたしたがよい。叔父からもお父上へようお願いしてやると仰つしやつても下さいました」

「ふム……」

と、正成はあいまいな顔してまた笑つた。

「いけません？ 父上」

「従軍の望みか」

「叔父上のおことばでは、たとえ一時は筑紫へ逃げた尊氏でも、いまにきっと大軍で攻めのぼつて来るぞ、と仰つしやつておいででした」

「それは必^{ひつじょう}定^{じょう}だ、かくごしておかねばならん」

「ですから」

「ははは、単純だの。正季もその程度か。しかしな正行、覚悟はいるが、日はわからぬ。いつの日尊氏がそう出て来るか——」

「でも、それを待たず、左中将どの以下、みな播磨から西国へまで、攻めてくだるのでございましよう。そのいくさへ、正行もお

供させてくださいませ」

「まあ待て」

と、正成は子の一途いちずを、いささか持てあまして。

「男おの子この初はじ陣じんとは、元服以上大事な日だ。初めて烈しい世へ
出て、世の大敵と渡りあうこと。——悔いのない相手と正義の戦
場をえらばねばならん」

「今のいくさは正義ではないのですか」

「さてさて、そもそもなかなか口賢くちさかしゆうなつて來たな。人はた
れも正しからんとし、正しいと号してゐるのだ。みずから邪惡の
軍と思つてゐる者はいない。……だがそれがまま邪軍となり魔行
をほしいままにし出してくる。大本は忘れやすく、人は大昔の獸

に返りやすい。いくことはそんなものなのだ

「……」

「いや、こんな話、まだそちには、ちと難しかる。とまれこの父はの、元来が今様いまようの武人でないのじや。それゆえ、ただ功名我慾の首狩りのような戦に、わが子のそちを初陣させる気にはならぬ。……連れてゆくときがあれば、そのときは連れてゆく。……かまえて、それまではただ学問に精出しておれ」

「はい」

正行はききわけた。これ以上は、叱られることを知つていてる。

また叱言となればきびしいことも知りすぎていた。

正行がここにいたのは、わずか三日ほどだつた。——滞京中に

は、服部治郎左衛門に連れられて、洛中を見てあるき、東西の市いち
 ノ棚たなでは、弟たちへの土産に、獨樂こまを買った。また、母やら卯木うつぎ
 への土産も買って、やがていそいそ、従者十騎と共に河内へ帰つ
 て行つた。

折ふしました、正成へは、同日、大納言のつかさから、

カネ
 予テノ願ヒニ依ヨリ

エツ
 特ニ謁ヲ賜ハセラル

ミヤウ
 明、未刻ヒツジ（午後二時）

ナリ
 参内アルベキ也

との通達があつた。

待ちぬかれていたことである。そのため、正行の訪れも、國の

便りも、じつは心の外だつたような容子がなくもなかつた。事実、彼はこの参内と、そして、めつたにはめぐまれえない天子直々の拝謁を機に、或る一期の覺悟をして いたらしい。

早朝から正成は身淨めして自室にこもつていたが、やがて五位ノ尉じょういの衣冠みぎよをただし、供にも南江正忠、矢尾ノ常正など、いつにない列伍をただして出て行つた。定刻、花山院の仮皇居へつくようである。——それを爺の左近は、さすが何か、ただ事ならじと察したらしく、六条の門から不安そうな眼まなざしでいつまでも見送つていた。

豆と豆がら

やがて定刻が来ていた。

母屋の玉座^{ぎょくざ}には御簾^{みす}がたれ、お胸のあたりが仰がれる程度にそのすそは巻かれてある。

一だん低く。

正成は“廊の床”^{ひさしゆか}にひれ伏していた。

もとよりここは花山院の今内裏^{いまだいり}（仮の皇居）だが、天皇のおわすところ、どこでもそこを清涼殿^{せいりょうでん}と呼ぶのが慣わしなのである。で、左右の公卿列座もすべて清涼のかたちどおりであるが、ただどこか狭くはあつた。そして玉座と謁^{えつ}者^{しゃ}との距離も、まつたく間近^{まぢか}であつたから、正成の姿も、咫尺^{しそき}の畏れを、いちばいそ

の背に平たくしていた。

「廷尉」

「はつ」

「直々じきじき、奏そうもん聞もんにおよびたいとは、いかなる儀か、それにて申しのべたがよろしかろう」

一公卿の声だった。

侍座には坊門ぼうもんノ清忠、洞院とういんの公賢、近衛、三条など、上卿たちの顔も見える。そして、正成がそもそも何を訴え出たのかと、彼らひとりへ視線をそぞぎあつていた。

「時局、容易ならぬときに入りましたのでござりまする。……そのうえに、叡えいりょ慮りょをわざらわし奉るは、まことに、恐きょうく懼ようくにたえぬ

とはぞんじますなれど

「む……」

と、後醍醐のおうなずきが洩れた。

後醍醐も、この功臣を、おわすれでは決してないが、なにぶん、群臣あまたな中である。とかく家柄の低い一廷尉正成をとくに日頃お召というわけにもゆかない。……折ふし正成からの願いだつた。……何かは知らぬが、きいてやろうという優渥なお気もちは、充分、御簾ぎよれんのうちからもうかがわれた。

「正成」

「はつ」

「遠慮なく申せ、なんぞ軍いくさについての意見もあるか」

「さようにござりまする。もし今をおいて、このまま推移いたしましては、悔いを百年におよぼし、また、せつかく建武の御新政を見て、ここ三年の聖業も、ついには、いかがなろうかと、昼夜、案じられます余りに……」

「要は？」

「正成の存念を、直言つかまつるなれば、なにとぞ、いまを以て、
御軍みいくさをやめ、公武一体のすがたをお取りあらせられ、ひとまず、
すべてを御政事に帰きせられたしとねが希ねがう次第にござりまする」

「公武一体とな」

「は」

「解げせんことを申す。尊氏をおいてか」

「いえ。勅を賜うて、足利尊氏をなだめ、親しくお召あらせられなば」

「では、尊氏へ、和を請うようなものになる」

「なんで天下の目に、さようなことに映りましようか。御軍は兵庫に大捷を博はくしており、尊氏は遠く筑紫つくしへ落ちのびている敗軍の人。……さればこそまた、いまが絶好なときでもござりまする。一たんの勝利をば、ここでゆるがぬ御勝利といたさねばなりませぬ」

「しつ」

と、そのとき、公卿列座の中の一つの顔が、正成の注意を衝ついて、こう言つた。

「廷尉。不吉な言はつつしまれい！」

「…………」正成は、そのためちよつと絶句したが、しかし姿勢
は御簾ぎょれんを仰いだままで、それへ眸をそらしたわけでもない。根を
ふかく土にかくしている巖いわみたいに、今日の彼は、いつもの正成
ともみえず何かうごかぬものをその姿にもつていた。

「勝ちは負けの始めとか。まことに不吉な兆きざしは、勝者の陣にすぐ
あらわれるものにござります。勝つことだけを知つて、勝ちを收
めることを思わねば」

「待て……」

後醍醐が仰せられた。

「そちが憂いとは、つまり後日となれば、軍いくさはわが方の負けにな

る。それゆえ、いまのうちに尊氏と和して、公武合体とやらの工夫をしたがよい、というに尽きるな」

「御詫^{ごじょう}、さようにござりまする。しかもその時機は今をおいてはありませぬ。……もし時移せば、筑紫の尊氏は、須臾^{しゅゆ}のまに、西国の諸豪を手なずけ、四国、山陽山陰の与類^{よるい}をあわせ、おそらく年内には、大挙、ふたたび闕下^{けつか}へせまつてくることは、火を見るよりも明らかとおもわれまする」

「正成。……それはそちの案じすぎぞ。筑紫にも誠忠の士は多い。四国、中国とも同様。そのうえに、義貞もくだつてゆく。何条、尊氏の意のままになろうや」

「……あいや、申すも畏れ多くはありますが、建武の制として、

新たにお示しあらせられた御政事の主旨は、かならずしも、武士どもの心から迎えているものでございません」

「尊氏一類の徒にとつてはさもあるう。さればこそ、と擊うたではおけまい」

「しかるに、尊氏には同調しても、聖慮かしごを畏まがざる武士の方が、全土にはいかに多いか知れませぬ。……かつは左中将どのの不人望と、尊氏の衆望とは、これまた、くらべものになりません」

「義貞はそれほど諸武士に氣うけが悪いか」

「人の蔭口に似て、申すも憚はばかりなれど、ここには公卿方も御列座あること。あえて明言つかまつります。……もし左中将どのに、よく人心しゅうじん 収攬うらん のご器量があるものなれば、さきに鎌倉を陥し、

また勅宣の御軍みいくさをひきいて治平の帥すいにあたりながら、今日まで天下の諸族を、いまだにこんな支離滅裂にはしておきますまい。

——ひるがえつて尊氏をみれば、賊名をうけながらも、またいくたび窮地に立ち、いくたび破れながらも、なお彼の筑紫落ちには、あまたな武士が、付き従うなど——尊氏が赴くところ、何せい、

衆和と士氣の高さがうかがわれまする」

ぎよれん
御簾のうちには、なんのお声もなくなつた。

おそらくは、おん眉をひそめておわすに相違ない。わけて公卿くげ座に居ならんでいる顔、顔、顔……のすべては、みな、にがりきつて正成を見すえていた。

ちよくげん
直言にも程がある。

時の人、左中将義貞をさして、こんなにまで無遠慮に評価し切つた者がほかにあるだろうか。公卿たちは、正成の正気をさえ疑つて、ただあきれるのみだつた。

しかし後醍醐はさすが、帝王の寛い御分別ともいるべきか。正成を観るにも、彼らの冷蔑や氣色ばみとは、はるかにお心の在り方がちがつてゐる。——これは容易ならぬ正成の決意——と、みそなわせられたらしく、御簾をとおして、彼の姿へいちばいな凝視を垂れ、

「正成」

と、呼ばれていた。

「はつ」

「そちは、尊氏が何者なるかを、わきまえておるのか。あきらかに、彼は幕府を立て、おのれその幕府の上に臨まんとする者だぞ」「御詫^{ごじょう}。そのとおりとぞんじられます」

「しかるに、そちは言つたな。君臣一和、公武合体の制をこれとか」

「はい」

「ならば、王政一新の実はどこにおくか。幕府を廢^やめ、政を古に回^{かえ}すなどは空名になる」

「さは相なるまいかと思ひまする」

「どうして」

「上^{かみ}おんみずから、親しく諸政をみそなわす儀は、うごかざる政^{まつり}」

の大本たいほんとして、その下における武門の統御とうぎょのみを、尊氏におゆだねあらせられるぶんには」

「それ自体、幕府をみとめることではないか」

「いや、頼朝いらい、幕府の害、また思いあがりは、朝政にくちばしをいれ、皇統のお世嗣よつぎをさえ、意のままにうごかし奉るなどの僭上沙汰にありました。その牙きばをだに与えなければ。……そして武門は武門の分を守らすに止めおけば」

「さような制を、武家が守れるはずはない。わけて尊氏めは、おのれ第二の頼朝にならんと、望んでおるものを」

「まこと、御宸念ごしんねんのほど、ご無理はございませぬ、が、もし正成にみゆるしを給わるなら、正成自身、即刻、筑紫へ下向いたし、

尊氏に会うて、きつと古今の弊^{へい}を論じ、また、おろかなる戦乱の
はか
果なきを説き、かならず恭^{きょう}順^{じゅん}を誓わせ、無用な戈^{ほこ}は、これを
おさ
収めさせます」

「して、義貞はどういたすか。義貞の同意なくして」

「されば、左中将どのの許へも、自身二度もお訪ね申してはおり
ました。——しかし左中将どのが、やすやす、御同意あろうとは
おもわれません。ぜひなくば、新田はこれを討つ、とするもまた
やむをえぬかと考えられます」

「新田を討つ？」

「まこと、よんどころなくば」

「そうしてまでも、尊氏とは、たたかいを避けろというのか」

「皇統の長き御未来のため。大きくは、民ぐさのためにも。……聖慮におん曇りなきよう、正成、伏して、かようにおねがいつかまつりまする」

「ばかな」

ついに、逆鱗げきりんのみけしきが、御簾ぎょれんをゆすつた。

「ならん！……。さような進言なれば聞くにも足たらん。正成、そちはどうかしたか」

「……ただただ憂いのみにござりまする。いまや尊氏の許には、持明院統じみょういんとうの皇きみの院宣ひそも密かに降下されておること。——君と君との血みどろを、臣として、何で心なく見ておられましようか」

低すぎるくらいな声で、声の表に感情は出ていない。彼の悪い

方の片目のまぶたとひとしく静かに抑えられている。それでいて正成のことばは、公卿列座のすべての者の肺腑をドキッとさせたようだつた。

——申すことにも事を欠いて。

——聖慮もばばかりず。

と、みな色を失い、彼ら衣冠のつつしみぶかい眸も、せつな、こぞつて御簾ぎよれんのうちの御氣色みけしきへ、思わずうごいたほどである。

しかし、そこも龍淵りゆうえんのごとく溟めいとしていた。しばしは何の御詫ごじょうもなかつた。そしてただあの大きなおん目を凝こらして、じつと正成を見ていらつしやるのみである。——まだかつて、これほどなことを直言したやつはない——、ふしぎな男かなと、後醍

翻は、むしろ逆な御寛度に返つて、もつと正成にいわせてみよう
としておられるのかもしけなかつた。

ややあつて。

「正成……」

と、御諫、おもたげに、

「いかにもそちの申すがごとく、持明院統の院宣が、尊氏の手に
渡つたとは、ちかごろ四国中国の武士どもが、しきりと揚言する
ところとは聞いておる……。が、それはまことではない。風説に
すぎん。朝廷での調べでは

「あいや、おそれながら、正成が知るかぎりにおきましては、か
なしいかな、虚伝きよでんともおもわれませぬ」

「なにをいう。たとえ尊氏が光厳こうごん（持明院統の先帝）をそそのかして、そのような物を手に持とうと、すでに廢帝たる院の院宣などは反古ほごにひとしい。天に二つの日輪があろうや」

「げによき御言葉みことばにこそ。——天に二日あらせてはなりませぬ。さるがゆえに正成、微臣に過ぎぬ身にござりますが、ここ昼夜、肝囊かんのうを病むばかり世のすえ案じられてまいります……。ひとえに、皇統の破滅のみならず、その下における、あわれ民ぐさ、千万の精靈しょうりようも、みな戦士に喘ぎ哭かねばなりません」

このとき、ついにたまりかねたように、公卿座のうちから、参

議坊門ノ清忠が、

「廷尉！ 廷尉」

と、制止して、

「なにさま、其許のそこ奏そう上じょうを伺つておると、其許は時局を思い病む余り、ちと氣鬱きうつの症にかかつておられるようだ……。いたずらに、病者の進言などは、畏れ多い。むしろお耳わざらわしかろうぞ」

と、言つた。いや叱つた。

「は。……重々じゅうじゅう」

と、正成は、ほんのこころもち、その膝を、公卿たちのほうへ向けかえて。

「——不遜のつみ軽からずと恐懼きょうろくしてはおりまする。なれど、ことは国事です。上方のみならず下億衆しもおくしゆうの地獄か楽土かの

わかれ、その今を坐視してはいられませぬ」

「では、あくまで其許そごは、朝廷と尊氏と和せというのか。そして、
その御使みつかいには、自分が尊氏を説きに筑紫つくしへ行つてもよいとまで
望むのか」

「一定じよう、それしか、世を救うみちはなしと信じます」

「さてこそ、先頃じゆうの噂も噂ではなかつたわい。……かねて
より尊氏と正成とは、よほどよほど、ねんごろな仲であつたとみ
える。……もはや、何をかいわんや。はははは」

侮辱だ。聞き捨てはなるまい。と公卿たちにさえ、清忠の言は、
「ちと、言い過ぎ」

と、おもわれた。

意見の相違はともかく。正成の誠意はたれにもわかっている。

その必死な諫奏を「——尊氏と親しいからであろう」などとは、嘲弄ちようろうもまた、はなはだしい。さすが正成も、カツと逆上するのではないかと、みな、目をこらして、正成を見まもつていた。

けれど、正成は、清忠の嘲笑を浴びると、じぶんも共に、その面に、うつすらと苦笑を持つて、

「おからかいを……」

と、かろく危険な一瞬を交わしていた。

そして、自分は尊氏を、世の敵としては憎むが、わたし私の敵とは憎んでいない。むしろ当今武門のうちでは、第一の人物とおもつている、と率直に言つた。

世の敵と、憎む理由は、これまで尊氏が、朝家に弓をひき、逆賊の名を負つても、なおその野望をかえるふうもなかつたからであるが、その彼が、朝家のおん一ト方の院宣を持つて、われも廷臣

足利も皇軍

と名のるからには、手のくだしようもないではないか。

また、世上沙汰さるる如く、

「このいくさを、君と君とのお争いにせばや」

と彼が謀はかつて いるものなら、なおさらのこと、彼の術中に陥ちるなどは、現朝廷の極力避くべきところではあるまいか。

正成は怯ひるみもなく言つた。——そしてなお、坊門ノ清忠の姿を

中心に、公卿ばらの方へ、その膝をきつと向け直しながら、
 「およそ何が浅ましい、何が忌わしいといつて、おなじ血の同胞はらか
 が、憎しみあい、墜おとし合い、また殺し合うなどの惨さんを見るほど、世に情けないものはありません。畜生道です。いや禽獸きんじゆう
 にすら見られないこと。なぜか人間だけにかかるつている人間業にんげんごう
 です。これを、凡下ぼんげが演じるならまだ知らず。——朝廷おんみず
 からやつてどうなりましようか」

と、一人一人の胸に訴え。

「持明院統もただしい皇統。また現朝廷の大覺寺統もひとつ皇統。
 いづれが帝血ていけつに非ずというものでありません。——としたら同じ帝血のお争いです。そして、ひとたび骨肉相剋そうこくのたたかいと

なれば、うらみも憎しみも、他人以上、解けがたいものとか。必然、百年はこの地上に修羅地獄の血を見なければ止みますまい」

と、痛嘆した。

さらに、その弁も訥々とつとつではあつたが、倦まず、熱意をこめて、「正成ごときが申しあげるまでもなく、ここには博識な方々のみ。つとに御存知と拝察しますが、このさい御一考として、かの異朝きょうの詩人、魏ぎの曹そう植しょくが作つたと称される“七歩の詩”を思いあわせていただければ幸せです。それは正成の百言よりも、はるか勝るかとぞんじます」

と、御簾ぎよれんへむかつてするとおりに、公卿へも、平身低頭して言った。

「なに。七歩の詩？」

人々のあいだに、小さい 思いをひそめ合うらしい容子だつた。
七歩ノ詩とは。

——みな沈黙におちたが、訊きかえす公卿はない。

正成も説明はしなかつた。なまじな説明はかえつて反感をかう
だろう。異国ぶんそうの文藻や学問なら人後に落ちぬとする誇りは公卿
の誰だもが持つている。

魏ぎの文帝の時代だ。

文帝はかの三国志中の梶きょう 将しょう、曹操そうそうの子であり、父曹操の
帝位を受けたひとであるが、弟の曹植は、素質性行、兄とはまる
でちがつていた。

つまり風流子といふものか。諸般の芸事には通じ、詩藻しそうゆたかで、文学の才華はなみならぬものだが「——戦はごめんだ」と、つねに言つて、軍事は嫌い、政治にはそつぽを向き、兄の文帝とも事々うまく折合わず、その人生観でも兄弟はまったく両極の人だつた。

だが、世は戦雲の下。呉は蜀と同盟して、魏の洛陽らくようを衝かんとし、曹操の建業も一朝いつちょうの間まかとあやぶまれていたような秋ときである。いかに自分の弟だからといえ、詩ばかり作つて超然と逸人つけじんの境きょうを独りたのしんでいる曹植を、諸臣しよしんのてまえ、文帝もついにはこれを黙視してはいられなくなつた。

或るとき。一閣の内に弟を呼びつけて。

「植（しょく）。きさまは父帝の遺業をわすれたか。今をどんな時だと思う。今日かぎり詩作はやめろ、筆を捨てて剣をとれ」と、いいわたした。

「やめられません！」と、曹植はひざまずいて、涙の目で兄を見あげた。「——私。ほかに能（のう）もなく、ただ文学だけが生きがいなのです。詩を作るなど仰つしやられても、自然と詩が心にうかんでくるのでどうしようもありません」

「ああ、きさまというやつは……。しかし群臣の目、軍紀（ぐんき）のてまえ、そんな気ままはゆるしておけん。どうしても、詩を止めんなら、今日はきさまの首を斬つて、父帝の靈に詫び、三軍にも示して、たとえ骨肉たりと、戦を厭（いと）う者はこうだぞという実証とする

つもりだ。それでもやめんか

「やめられません」

「よしつ。斬れツ」

と、文帝は後ろの兵へ手を上げた。がまた「いや待て」と、何かを思い返したらしく、

「植^{しょく}。まず立て！」

「はい」

「わしがここで、一イ二ウ三イ……と七ツまでかぞえるから、声に従つて、七歩あるけ。そして七歩のあいだに一詩を作つてみせろ。出来なかつたら途端に首を落すぞ。もし佳^よい詩を作^なしたらぜひもない。よくよくな生れ損いとあきらめて、ゆるしてくれる」

と、厳命した。

りきしや力者かたわは大剣のつかをつかんで傍らに立ち、文帝は指をあげて、
一イチ・二ニ・三サンとかぞえて行つた。——歩むこと、まさに七
歩目、曹植は哀しげに一詩をきけんだ。

豆ヲ煮ルニ

豆ノマメガラタヲ燃ク

豆ハ釜中ニ在リ泣ク

本コレ同根ヨリ生ズルモノヲ

相ヒ煎ルコトノ

何ゾ太ダシク急ナル

詩は、五言四絶ごごんよんぜつ、わずか二十字にすぎないが、

同胞どうほう相剋そうこく

の悲泣 ひきゆう とうらみを訴えて人の胸を打たずにおかない。

文帝も詩の真理にうごかされ、以後は弟の天性とその好む所にまかせたとのことである。

龍 りゆう 顔 がん はくもつて、はたと、ご苦悶のいろかのよう仰がれた。

七歩ノ詩は聖慮にとり決してご愉快な詩であろうはずがない。

万民は赤子せきし とか。

たとえ、どういう御理想によろうが、たたかいは帝王の最大な罪と御自身責められているはずである。戦 いくさ とは——豆ヲ煮ルニ豆ノ豆ガラヲ燃タバ モト ヒト——ようなもの。また——本コレ根ハ同ツカラ生ジタモノ——。どんなたたかいにせよ、赤子せきし の殺し合いは、それ

だけでも最大な御悲嘆でなければならない。

まさに、今の世を観れば、万民は釜かまの中で煮られている豆のようなものだつた。そして釜の下を焚たきやまぬ焰も、ひとつ根の親とも兄弟ともいえる豆の「豆ガラ」なのである。

豆は、何を怨めばいいのか。——沸ふつぶつ々たる熱湯の中の悲泣ひきゆうは、たれが聞いてくれるのか。

正成は、豆に代つて、豆の怨みを御簾ぎよれんへ暗あんに訴えていたのだった。——たしかにそれはここの人々をして、暗鬱な反省の一瞬ときには立たせていた。——が、その一瞬ときがたつとすぐ、

「だまれ、無用な雑談」

と、公卿のひとりが、こう自己を晦くらます逆作用にまかせて烈し

く発言していた。

「知らぬか、廷尉。——大義親ヲ滅ス、とあるのを。異朝でもそれが新しい朱子の学として奉じられておる。遠い魏朝にあつた故事ふるごとなどは早やカビ臭いわ。……いや、坊門どの」

と、その公卿は、おなじ列にある清忠のほうを見て。

「さだめしお上におかれても苦々しゆうおわせられましよう。

微賤な一廷尉の分際が、かくも長々と、愚言を奏したてまつろうなどとは、たれしも夢思わぬことではあつたが、賜謁しえつをお取次いたした奏者そうじゃのつみも軽くない。……ま、ともあれ、早や御立座うざをねごうてはいかがでしようか

「ウむ」

と、清忠が、玉座へむかつて、笏しやくを正しかけたときである。後醍醐のおひざも、すつと同時に立ちはだつた様子が、簾すの下からうかがわれた。

正成は、おもわず、

「……あ」

と、両手を下へつかえ直した。なろうものなら、その手は、帝のおん衣ぞのすそにすがりついて、なお一ト言ひことの御詫ごじょうをと、おせがみしたかつたに違いあるまい。指のさきも、ひれ伏ひるふした鬚ひんの毛けも、ふるえていた。濟然さんぜんと、涙してないだけだつた。

「廷尉。退がんなさい」

「……は」

「疾う。^ヒ退^サがらつしゃい」

「はい」

「なにを猶予」

「未練^{みれん}にはございますが、いまを措いては、まつたく時^{いuff}を逸します。あわれ、まいちど、御集議にかけ給わつて」

「それどころでない。逆鱗^{げきりん}あらせられた御氣色^{みけしき}ですらある。」

「きつと、今日のことは、やがて重いおとがめでもあろうぞ」

「正成の身、たとえいかような罪に問われましようとも、その儀

はいといません。ただ何とぞ以て、いま一度の御評議でも」

「何と、物の見えぬ鈍^{にぶ}い男よ。ばかな！」

と、公卿たちは一せいに立つた。

そして声のない笑いを正成の背へ向けながらみな去つた。

青空文庫情報

底本：「私本太平記（六）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2010（平成22）年1月5日第26刷発行

「私本太平記（七）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第25刷発行

※副題は底本では、「風花帖『かやばなじょう』」みなつてござ
す。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2012年11月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

私本太平記

風花帖

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>